

週休六日の魔帝生活

灰の熊貓

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神魔戦争。太古の昔、全魔族と神族が滅ぼし合ったとされる、魔族の伝説。

その頂点たる魔帝と神皇は、数多の世界の崩壊と再生の果てにて相討ちとなり、両者共に封印。その後、現世の要となって今も眠り続けている。

そして、ある一人の魔王の手によってその災厄の封印がいに解き放たれようとしていた――

魔帝「休み、週六日でよろしく」
魔王「えっ」

目次

失敗が成功の基とは限らない

199

斯くして労働契約は結ばれり	—	1
仕事の割当はいつも悩みのタネ	—	25
初日は見学からでお願いします	—	48
山積みの仕事は簡単に終わらない		
70		
円滑な人間関係は雑談から	—	90
異動時は引き継ぎが肝要	—	110
意図的に職場で波風を立てるな	—	130
現場は上が思う以上に忙しない	—	146
基礎工事こそ最優先すべき	—	164
咄嗟のアドリブにこそ本質が出る		180

斯くして労働契約は結ばれり

「——め下さい、魔帝様……！　どうか、お目覚め下さいっ……！」

暗闇の中、その闇すら吸う様な暗く深い紫と赤の光が、円陣より立ち昇っていく。

その円陣の外の縁では、一人の女が祈る様に声を絞り出しながら、地に両手両膝を付いて多量の汗を石床に落としていた。

魔王。側頭部には天へ伸びる双角、銀の様に煌めく長髪、荘厳な紋章を背負った紅のローブを着込んだ魔族。それが今、石床に跪いている女の正体だった。

(凄まじい封印の強度……だけど、手応えは、ある……！)

魔王は必死に、或いは決死の覚悟で円陣——封印に両手をかけ、全身全霊を以て破ろうとしていた。

魔王城の遙か地下、歴代の王位継承者にのみ伝承される、円陣の間。この場所には遙か古に世界の全てを平伏させ、神々にすら立ち向かったとされる伝説の魔帝が封印されているという。

その威光は神を束ねる最高神にすら手が届き、しかし最期には相討ちとなってこの地に封印される事となった。伝説はそう締められており、魔帝の復活は魔族にとって悲願

の一つだった。

そして今代の魔王は、その悲願を達成しなければならぬ状況にあった。

(あと、少し……！　あと、もう、ちよつ、とつ……！)

封印への干渉、その反動だけで魔王の腕は手先から肩に至るまで噴き出す様に出血し、脳の内側から稲妻が走る様な頭痛が絶え間なく訪れる。

歴代魔王が何千・何万・何億と失敗を重ねて構築し、完成した開封の魔法。更に事前にあらゆる触媒を用いて強化魔法を重ね、それでもなお魔王は封印の解除に苦しんでいた。

当然だ。何千年、或いは知られていないだけで何万年と破られていないだろう、そんな難問ふういんに自分は挑んでいる。積み重ねた歴史とあるだけの力、自分の命を賭けても届かないかもしれない、いやその可能性の方が高い。

腕の感覚がほぼ失せる。頭が何を考えているのかすらわからなくなる。視界の外側が真つ赤に、内側が白く染まる。命が、壊れている。

(……や、るん、だッ……！)

それでも魔王は陣から手を離さなかった。やる、ただやる。消し飛びそんな意識の片隅に残るその意志に突き動かされ、魔王は魔法を行使し続ける。

そうしなければ死ぬ。文字通りの不退転の状況が、彼女に自殺に等しい開封こうえいをさせ続

けて。

——そして、それは終わった。

「ツ、きやあつー！」

爆発。そうとしか言えない轟音と暴風に吹き飛ばされ、魔王の身体が宙を水平に飛ばされた。

そのまま魔王は封印の間の隅、入り口近くの石壁に礫にされる。封印に臨む為の身体強化が無ければ、壁との衝突だけで下手をすれば死んでいた。受身も取れずに叩き付けられた身で、魔王はそんな事を思った。

そう、思えた。

「——ツ、がほ、げほっ……い、いき、てる……う？」

生きている。意識がある。封印の解除の最中、確実に死に至る一歩手前だった。しかし、今自分は生きている。

自分の状態を確かめる。両腕は肩口までひしゃげて動かない。背中は壁に叩きつけられた時の衝撃で、ローブの内側から夥しく出血し、背から地面にかけて血の河が落ちていつている。

視界も真つ赤に染まり、一応は無事だろう脚も感覚が無い。それもそうだ、これだけの怪我を負いながら、今自分は痛みを感じていない。痛覚が消える程に瀕死の重症だ

と、魔王は自分の状態を客観的に確認した。

「ふ、封印、は………？」

被害の程度はともあれ、自分は生きている。生きてさえいれば大体の傷は魔法でなんとかなる、だからこそ今回の開封を断行した。

高位魔族特有の自然治癒が始まり、全身の感覚が痛みごと戻ってくる。死の半歩手前ほどの痛みが一挙に訪れ、意識が再び飛びそうになるが、歯を食いしばり耐えて前を見る。

封印の円陣がある広間の中央。あつた場所。

「——あ、ああつ………」

そこに、既に陣は無い。

代わりに、人が居た。

「……ま、魔帝様、なのですか………？」

「……む………」

広間の中央で胡座をかいて俯く、魔族の男。

深淵の如く深く染まるも輝く赤髪。耳を覆う様に生えている二つの大巻角。額にも備えられた、伏している三つの眼。

そして、存在感。ただそこに座している、それだけで空気が何倍にも重くなっている

様な威圧感を伴う、魔王とは比較にもならない程迸っている魔力。

格が違う。動いていない、起きてすらいらない。だが、一つ身動きして唸っただけの存在に、魔王は心の底から恐怖と感嘆を覚えていた。

「……………ま、魔帝様！ 魔帝様、お目覚めを！ どうかこの魔王に、僅かばかりのご助力をお願いしたく……………！」

「……………」

呆けていた魔王は慌てて自分の四肢の再生を済ませ、両手両膝と頭を地に臥せる。魔帝は未だ、瞼を開かないでいた。

封印は確かに解除できている、目の前の存在が伝説の魔帝である、その二つだけは確信出来ていた。ならば、後は絶対的な存在である魔帝へ誠意を示す事しか、魔王にはやる事が無い。

何せ、魔帝の立場からすれば封印から解かれた義理はあるが、わざわざ低い立場の魔王に力を貸す義務はない。というよりは、神々をも超える存在がその程度の事で恩義を覚えるともわからない。

故に、頭こぶを垂れる。言葉を待つ。一秒先には魂が直接砕かれてもおかしくない、そんな重圧の時間を魔王は地に這いつくばって耐えていた。

「——あ」

「……魔帝様……?」

「……あと、五万年、寝させて……」

「長すぎですよ!」

思わず魔王は頭を上げて全力でツツコミを入れた。

神すら慄く伝説の存在、その第一声。その中身が、スケールを馬鹿デカくしただけの二度寝の要求。あまりにもあんまりだった。

「うええ……ねつむ、眠い……あれ、なんで起きてんの我……? おかしいな、さつきまで確かに夢の中で百五万三千二百五十三回目の神魔戦争ラグナロクイブもしもルートシミュやってた筈なんだけど」

「封印の中で何の夢見てんですか!? ってかなんですその回数!」

「あーあー、ちよい声のボリウム下げてくれ……寝起きの頭に響くう……」

額の第三の目以外を開いた状態で、魔帝は右目を眠くて仕方無いとばかりに擦って体をゆらゆらと揺らしていた。

存在感はそっくりそのままに、まるで威厳無く佇む——というか、声をかけなければ数分でそのまま寝てしまいそうな姿。凄まじいギャップに、魔王は生まれてこの方最大と疑う余地も無い程のショックを受けていた。

「……あれ? つか、マジで君誰? 我の同胞の親戚? めつっちゃかわいいね、淫魔王サキュバスロード

かなんか？」

「魔王です魔王！ 著しい名誉毀損はやめて下さい、魔界法廷に証言持ち出しますよ！」
「え、あ、ごめん。……あれ、そんな法制定してたっけ我……？ 別にサキュバスってそんな悪い事してなかったと思うんだけど……」

うーんうーん、と魔帝はこめかみの角の人差し指で叩きながら、記憶を辿る。魔王からすれば全魔族の現トップを務める身として、単なる見かけだけで不当な扱いを受けるのは不服極まりなかった。

状況は混沌と混沌、その絶頂にあつた。自分は何千年という歴史の果てである魔帝の解放を遂げた筈が、今やっている事はツツコミだけである。

本当にこの人、伝説の魔帝様なんだろうか。感じ取れる力は間違い無く本物なだけに、魔王は逆に目の前の男の事を疑い始めた。

「うーん……まあ、長いこと寝てりや色々忘れるモンか。しゃーない、よくわかんないけどメンゴなお嬢ちゃん、なんか失礼しちやっただっぽいわ我」

「え、あ、いや、魔帝様が頭を下げる様な事では……こちらこそ、立場も弁えず声を荒げてくださいませんでした……」

魔帝はあまりにも軽く、その重々しい頭を魔王へ下げる。素直すぎる謝罪を受けて冷静になった魔王は、今更ながら自分の軽挙妄動を自覚してこちらからも頭を下げる。

「なんか、全然思ってたのと違う。もつとこう、厳かな空気の中で頭を下げて力を求めるみたいな、そういうシチュをこれまで抱いてたのに。魔王はたった今、理想という物の無為をこれ以上無く思い知っていた。」

「つか、なんで我起こされたの？ 神魔休戦協定に変更でもあつたん？ それとも神皇のアホが起きちゃって、合わせて封印解けちゃったとか？」

「……え？ ……あの、なに協定、と？」

「え、“神魔休戦協定”。知らん？」

「す、すみません、初めて聞きました……」

「マジかー。何万年経ったか知らんけど、伝承途切れちゃったんかー。全く、世界の理も風化するもんなんかねえ」

「はー。感心と呆れが半々といった溜息について、魔帝は額の瞼の上を押す様に擦る。

魔王からすれば、何が何だかわからない。どうにも大事な協定らしいが、歴代魔王の記録や魔帝に関わる伝説の中にも、神魔休戦協定という名前は無かった。

「うーん、封印解かれちゃったし協定も伝わってない。こりゃ相当経ってんなあ、神魔戦争から何万年だ……？ 流石に我の知り合いの子孫がいるなら、我の復活とかぜってー考えんだらうし」

「——えっ？ 復活を……え、なんて？」

「え？ 我的復活とか、当時知る奴らは絶対やらんだろ、って……」

「……えっ、え、ええっ!? ちよ、な、なんでっ!? 全魔族の悲願って伝え聞いてるんですけど私い!」

『復活を望まない』。魔帝のその言葉が最後の引き金となつて、ついに魔王の思考は全て消し飛ばされた。思わず食つてかかる勢いで、魔王は膝立ちとなつて前につんのめる。

目玉が飛び出る様な衝撃を受けて顔を近付けてきた魔王へ、魔帝は思わず胡座はそのままに背を仰け反らせた。

「うおっ、近い、近いて。年頃のお嬢ちゃんがそんないきなり異性に顔近付けちゃあかんで。視線とか言葉とか介する系の魔法とか喰らつたらどうすんの」

「いやそんな微妙に為になる忠告はいいですから! ふ、復活はしないって、どういふ事なんです!」

「うーん、この互いの認識がズレまくってる感じ……最初に次元よ渡りした時を思い出すな、これぞまさにジェネレーションギャップならぬ次元ディメンションギャップギャップの隔てりよ」

「そういう言葉遊びいいんで! お願いますから説明を! ハリー!」

「お、おう、メンゴ……若者は元気あつていいな……」

言動に勢いはあれど、血まみれで今にも前へ倒れかねない見た目しぶんをしている魔王の肩

を、魔帝は軽く掴んで距離を取らせる。事実、魔王は封印の解除と自己再生で殆どの力を使い果たしている状態であり、魔帝の認識は正しかった。

が、魔王からすれば自分が倒れる事など知ったこつちやない。何せ歴代魔王や全魔族の思想の根底が、張本人である魔帝本人から否定されているのだ。自分の命を含む他の些事を差し置いてでも、その真意を聞き出さなければならぬ。

「あー……そもそも私の事、現代はどう伝わってるの？ ほれ、流石に伝説とかあるんだろ？ そうじゃなきゃ我を目覚めさせるとか考えんだらーし」

「え、えーと……遙か昔、この地上を征服した後には神界へ戦争を仕掛けて、永きに渡る最
高神との激闘の果てに辛くも相打ちとなつて封印された、と……」

「ああ、あの八百長そんな綺麗に伝わってるのかー。ま、伝説なんてそんなモンよなー」
「……………八百長？」

ぴしり。魔王の心身が、湖表の薄氷の様に凍結すると同時にヒビが入る。

なんだか物凄く嫌な予感がある、嫌な予感しかしない、嫌な話な気がする。魔王の中の警鐘が、破城槌の様に猛烈に叩いて鳴らされた。

「あー、そーさなー。かいつまんで話すと、まず我つて望んで封印されたんだよね。神皇——そつちが最高神？ つて呼んでるアイツと話し合った結果でさー」

「……………あ……………」

『自分から封印された』。この瞬間、魔王とその他全魔族の根底が粉々となった。

「いやー、神魔戦争が途中で千日手っていうか、億年手ぐらいに膠着してさー。我らから仕掛けたはいいものの、勝つも負けるもいかないって感じになっちゃったんだよね。我、パワー的には無敵だったけど、神々って逃げと嫌がらせに徹すると最悪でなー」

フリーズした魔王を意に介さず、魔帝は後頭部を両手で抱えて、アルバムをめくって懐かしむ様な軽いノリで当時に起きた事を説明していく。

不幸にも魔王の体は脳だけは止まらず、耳にした言葉を一言一句刻んでいく。目を背けたくなる様な事実を耳は全て拾い、脳はしっかりと整理して覚えていく。

脳が停止している部分は、開いた口を塞ぐ機能だけだった。

「魔族側は逃げられ続けて、神々側はこつち倒せない。互いに支配した次元を滅ぼしては取り戻すつての繰り返しで、理解つちやつたのよ。あ、未来永劫勝敗つかんなコレ、つて」

「……」

いやあの頃は若かったなー。誰もが使う枕詞を添えながら、歴史と規模と次元が違いくすぎる話を魔帝は語る。まるで飾らず、つていうかもうちよつと飾って欲しいと願う程に、魔帝の言葉に虚飾は感じられない。

顔を綻ばせて懐かしむ魔帝と、凍り付いた時が少しずつ動き始めて小刻みに震える魔

王。対極的な対面の中で、魔帝は古代の昔話を続けていった。

「んで、当時の同胞達ダチと話し合つて。次元渡りの応用で神皇とこつそり思考チヤンネル合わせて、終戦しよーぜーつつつたの。まあ終戦するにやーお互いに被害出過ぎたから、色々案出し合つてなー」

「……」

「で、一番丸く収まる形つて事で、我と神皇アイツのタイマン最終戦争アルマゲドンする事にして。上手い事お互いに相討ちになつた様に見せかけて、我らわざと封印されたんよ。トップがやられた、これ以上やつても泥沼だ、戦争やめやめ、終ー了ー！ つて感じ」

「……」

「あ、心配しなくても神々アイツらからの報復とかもう無いと思うよ。我ほどじゃないけどダチも凄いい奴らだったから、上手い事終戦を約束させた筈だし」

「……それが、例の協定、と？」

「うん、〃神魔休戦協定〃。ざっくり言えば、魔族と神族の次元渡りを封じて、お互いの世界でじつとしていような、つて感じのやつ。あと規模過剰な魔法の行使禁止とか色々。下手すりや隣の次元せかいごとぶつ壊す系の魔法とかそこそこあったから、当時」

「……………」

魔王が声を出せたのはたった一言、一つの確認だけだった。もう何も言えない。とい

うか口出し出来る要素が無かった。

魔帝と神々の戦いは、現代の魔族達が考えている様な決着では無かった。魔帝の封印は、両側のトップの合意の上で仕組まれた事例でしか無く、そこに悲劇的な要素は全く無かった。つていうか本人がめちやくちやに喜劇的に語つてる。

脳の中に叩き込まれた情報の整理が完結し、魔王の思考の歯車がようやく正常に回り始める。色々と、本当に色々と考える事がある。考えたくない事がある。

しかし、最初にやる事は一つだった。

「――ふ」

「ふっ」

「……ふッ、ぎけないでくださいよオーツ!!」

魔王は叫んだ。叫びたかったから、叫んだ。

追い詰められた理性を完全に千切り飛ばす様に、魔王のよく通る声が封印の間に甲高く響き渡る。不意の大声を起き抜けに喰らった魔帝は、耳鳴りすら覚えて思わず耳を塞いだ。

「うひいえ……すげえイイ声出るねお嬢ちゃん……音神と戦^やりあつた時思い出したわ、この耳から脳にクる感じのダメージ……」

「そんな事はどうでもいいんですよ！ 私、つてか私達魔族はすっこいすっこい、すっこ

い時間かけて魔帝様の封印を解こうと頑張ってたんですよ!? 父様とかお祖父様とかひいお祖父様とか、それからさらにもっとずっと昔っからー! なのに、なのにいーっ!!」

「あーあーあー、ストップストップ、わかったからストップで頼むわ。お嬢ちゃんの声、耳塞いでもめっちゃ届くから勘弁してくれい」

魔王は激怒した。していた。もう伝説の魔帝が相手だろうがお構いなしに、歯止めがきかなくなっていた。

当時生きていた魔族達の事情はあるだろう。魔族と神々の戦争も、想像すら出来ない程に大規模だった。封印はやむを得ない事だったのだろう。

しかし、封印を必死に解く事を悲願と掲げて数え切れない程に年を重ねて生きてきた現代こちからすればたまったものではなかった。誰だこんな大切な事伝え忘れたのは。魔王パンチするからタイムスリップして出てこい。割と真面目に、魔王はそんな馬鹿らしい事を考えていた。

「う、ううう……私……私達は一体、何のためにここまでえ……」

「な、泣くなつてお嬢ちゃん……」

「泣いてませんよお! 全魔族の為に私は泣く訳にはいかないんですよお!」

「お、おお……なんかすげえ志を感じさせるじゃん……若いのに……」

「これでも三百年は生きてますよ私い！」

「いや若いじゃん。我ら時代の戦争のレギュラーとか、若手でも大体千年クラスだったよ」

「スケールがぶつ壊れすぎなんですよきつきからあ！」

涙目で魔王はぎゃんぎゃんと叫び続け、魔帝はそれに若干引きながらも落ち着かせようとする。この場に王とか帝とか、そんな大仰な称号を背負っていそうな存在はどこにもいなかった。

いるのはただの想像外の出来事にショートする比較的少女と、その扱いに戸惑う比較的壮年男性だけだった。あくまで見た目だけの話であり、年齢差はそれこそ数え切れない程に離れていたが。

「はあ……はあ……終わりです……もうこの世の終わりですよ……」

「え、いや協定もあるから滅亡系の魔法はもうぶつ放さないって我。流石に我も戦争終わってもう落ち着いたから。ザ・賢帝だから」

「そういうこつちやないんですよ！ 私達魔族、今滅亡の危機にいるんですよ!!」

「えっ」

もう止まらないとばかりに魔王は心情を露わにし、その途中で魔帝にとつて聞き捨てならないカミングアウトがあつた。

「ここでようやく魔帝は寝惚けた頭を自分で回し始めた。そもそも目の前の自称魔王は、何故わざわざこんな血まみれになってまで自分の封印を解いたのだろうか。そこに考えが至る。

「ちよいちよい、クールクール、クールダウンお嬢ちゃん。滅亡の危機つて何？」

「……あー……そうでした、こっちはそれ言つてないんでした……」

魔帝からの問いかけを受けて、魔王はようやく冷静さを少し取り戻して語調を平らに戻す。

がつくりと頭と肩を落とし、魔王は自分側の本題を告げる事にした。

「……その、恥ずかしながら……我ら魔族——いや魔王軍は今、人間達の攻勢を受けて、今や残る戦力も陣地も僅かという崖っぷちにいます……」

「え、人間？ 人族いるん？ マジか、神魔戦争の前に完全に滅亡させたんだけど……あ、神共が種落として殖やしたとかかね？ 神本体が世界を渡れなくても、別種族なら渡れるってルールだったもんなあ」

魔王はそれまでの勢いの反動から、うじうじとした調子で自分達の恥極まりない状況を語る。

魔王軍は現在、絶賛人間達との戦争中だった。本来魔族と人間は世界を概ね半分に分けて共存している状態ではあった、しかし人魔の両側にいる過激派同士によって、遙か

昔に戦争が勃発。

魔族の末端の土地が奪われる、その代わりに魔族は人族の街を襲っては滅ぼす。世界全体から見れば小規模な紛争を繰り返す内に、人魔は互いに力と争いの規模を高めていった。

そして当代魔王の今に至り、人間側に“勇者”と呼ばれる存在が誕生。四天王と呼ばれる幹部格、果ては半引退状態にあつた先代魔王すら勇者とその仲間は撃破し、魔王軍をかつてない程に追い詰めていた。

何よりも危険なのは、勇者によって制圧された土地に少しずつ人間達の軍が侵攻し、新しく城まで建造して魔族からの逆襲を迎撃する体勢が整っている状況だった。

「——というワケで。我々魔族は損害を減らすべく今いる戦力の大半を魔王城下町を中心に撤退させて密集。勇者達などの突出した戦力に対しては近場の街にゲリラ戦を仕掛け、間接的に侵攻を遅らせるのが精一杯という状況でして……」

「うわー、ヤベーな魔族。つーか人族よーやるな、当時のスペックじゃ考えられん大躍進じゃん」

「……はい……ヤベーです……」

なんで魔族の神にも等しい貴方がそんな軽い調子なんですか。喉元まで出かかったツツコミをなんとか呑み込み、魔王は改めて自分達がいかに切羽詰まった状況かを思い

知った。

何せ、勇者とその一行がどうやっても止められない。単純な戦闘では撤退に追いやる事こそはあったが、最終的には反撃によって敗北・魔王軍は貴重な戦力を失い続けるハメになっている。

なので勇者から見てギリギリ手の届くラインの街に攻勢を仕掛けたり、侵攻ルートを暴風雨や猛吹雪・果てには溶岩まで使つて潰そうとしてきたが、その都度対策を用意されて少しずつ突破を許している。

加えて、人間全体の戦力の向上が著しい。人間は魔族と比べて肉体的に脆弱ながら、戦争によって活発化してブン回つた経済活動によって、勇者に頼らずとも画期的な武装類を開発していた。

「へー、どんなん?」

「一部魔族に限定的に特効の武器や、硬い甲殻も水の様に貫通する砲弾、何十メートルともある大蛇すら殺す様な毒など……」

「はっはっは、ヤツベ面白えー。なんでそんなに成るまでほつといたのそんな危険な連中」

「……返す言葉もございませぬ……」

魔王は自分達がいる状況・受けている被害などを適宜魔帝へ説明していき、その正論

ストレートど真ん中な指摘を受けてぐうの音も出なかった。

勇者達の決起による猛反撃、戦争を介しての人間達陣営の文明の強化。単独の能力的に魔族が上位の存在であるという驕りがあつた事は否めないが、それを差し引いてもイレギュラーが重なりすぎた。

武力という意味では全盛期とも言えた先代魔王の頃の戦力も、殆どが殺されているか再起不能にまで追い込まれている。今代魔王・及び魔王軍には、勇者の足を止める手段があつても斃す戦力が無い。

進退窮まつた。そう判断した魔王は一か八か、勇者達がこの魔王城付近に到達するまでに伝説の魔帝を封印から解き、その圧倒的な力で現状の打開を図る事とした。

「……それで、その……どうかこの哀れで惨めで驕り高ぶつた挙句、貴方様の眠りを邪魔した矮小な存在に、どうか少しばかりのご助力を、と……」

「うわあ、地面に埋まりそうなレベルで落ち込んで……すげえ苦労してきたんだなお嬢ちゃん……」

そして両者の姿勢は、最初に戻つた。頭を垂れて嘆願する魔王、胡座をかいてそれを聞く魔帝。違うのは魔帝が纏う雰囲気の軽さと、魔王が背負う雰囲気の物悲しさの二つ。

魔王としては文字通り命を賭けて、ギリギリの所で魔帝の解放に成功という目的は達

している。しかし肝心の魔帝は封印を受け入れていた状態であり、それを思えば魔王のやった行為は余計なお世話どころか意に真つ向から反する敵対行為にも等しい。

故に、魔王はもう祈るだけだった。同情を煽り、印象をマイナスから少しでも向上させる。下手をすれば魔王軍がこの場を中心に消滅する可能性すらあるのだ、自分のプライドなどもう知った事ではない。

魔王は軍を率いる立場でありながら、たった今靴を百人分舐める程度の覚悟まではしていた。

「んー……あ。そうだ」

「……？」

「ちよい顔上げな、お嬢ちゃん」

「は、はい、何か——」

魔王が頭を上げる。瞬間、魔帝は顔を自分から近付け、間近で全ての瞳を開いて魔王の顔を射抜いた。

額の第三の瞳が開いている。二つの眼差しが、魔王の目を真芯に貫いている。それを理解した時には、魔王の体は完全に凍んで動かなくなっていた。

「えーと、確か……『汝、我の言葉に、従え』」

「え、あ……？」

「『私の言葉、今より、全て肯定せよ』」

「……『はい』」

魔王の竦んだ体に、何かが注がれていく。そんな感覚に戸惑っていると、魔王の口は一人でに動き始めた。

『はい』。勝手に動いている。しかし、それは自分の意志だ。異常なまでに確固たる確信を覚え、魔王の心の底から根源的な恐怖が込み上げてきた。

「よし。じゃ、重ねて。『汝、誓約せよ』」

「……『はい』」

「オツケ。我、お嬢ちゃんに力貸してあげるよ。お嬢ちゃん面白いしかわいそうだし」

「『はい』っ……!?!」

やはり勝手に口は動いて別の言葉が紡げない、しかし頭の中の魔王は驚きに満ちていた。

何せ、自分が望んだ通りの展開が来たのだ。想像していた覇気や威厳は全く感じられず、しかし力だけは確かだろう魔王。特に義理も義務も無いにも関わらず、魔王は助力を受けてくれた。

限りなく最高に近い、理想的な展開。ファーストコンタクトの時はどうなるかと思っただが、これなら全魔族が助かる、いや再復興も夢では無い。そう魔王は思った。

極めて短絡的に、樂觀的に。

「けど、我がお嬢ちゃんの為に働くのは七日に一日だけな。我、めっちゃ眠いしだるいし」

『はッ』……あ……!?!』

「ありや、効き悪いな。我は七日に一日しか働かない。オーケー?」

『は』……『はい』っ……」

「うーん、凄まじいレジストっぷり。起き抜けで慣れない系統の魔法とはいえ、我の魔法こんな抵抗出来るんか。お嬢ちゃん天才ってよく呼ばれてない?」

ちよつとまつて話なんかちがう。つていうか話が勝手に決められてる。

魔王は全肯定マシーンとなった口とは完全に反対の、困惑の真っ只中にいた。

「じゃ、同意って事で、『汝、その誓約、魂へ刻め』」

『は』……『いい』……っ……」

「よしオツケー。もうしゃべっていいよー」

「……ッ! はあつ、はあつ……! な、なんですか、今の……!」

魔帝が手を軽く叩き、同時に魔王の体と意思が再度合致する。

それに伴い、心が痛んだ。

「さっき言ったじゃん我、視線とか介する系の魔法喰らったらダメって。ヤバい幻覚系

とか喰らったたら、ほれこの通りってコトよ」

「そうじゃなくって！ 週に一回だけって、なんでっ……！」

「さっき言った通り、我眠いんよ。封印の解放、正規の手続きしてないからか私のパワー全然戻ってないし。もう一万分の一スケール・我って感じ」

「なあっ……!?!」

くあ、とあくびを一つ見せながら、魔帝はのんき極まりなくそんな言葉を放つ。

完成・成功したと思われた封印の解除、それその物が失敗している。正確には不十分で、魔帝は持っている力を発揮出来ない状態と自己申告してみせた。

その状態でも魔王を存在感だけで威圧してみせた力を恐れるべきか、その状態のせいで思わぬアクシデントが起きている事を怖れるべきか。二つの恐怖に、魔王は顔を引き攣らせた。

「ま、そんなワケで。ちょっと悪い気はしたけど、そういう契約をお嬢ちゃんの魂に刻んだから、よろしくなー」

「……魂に?」

「んむ。契約系の魔法でな、履行しなかったら魂を奪うとかそういうのあるんよ。強制・契約・不可逆の三連コンボ。これ私のダチの一人の得意技だったんだけど、最悪に興味悪いと思わね? はっはっは」

絶句。再度、口が動かなくなる。今度は魔王自身の意思が、言葉を停止させていた。圧倒的な理不尽だった。力による抵抗不能の契約の押し売り、そのゴリ押しによつて自分は命をあつさり握られた。

確かに命を賭ける覚悟で来たし、事実失つても仕方ない状況だった。それを思えば、僅かでも助力をしてもらえる今はベストと言えずともベターな状況だ。

理性はそう告げている。しかし、納得は出来なかつた。

「あ、そうだ。我、さつき言つた通り今パワー全然無いから。まともな戦闘とか一切出来ないんで、そこんところもよろしくなー」

「……はっ……あ、ああッ!？」

そして今再び、魔王の鳴き声が地下を揺らした。

仕事の割当はいつも悩みのタネ

「ま、魔帝様あ!? ちょっつ、まともな戦闘出来ないって、どういうコトですかあーっ!」
「うーん、いい声で鳴くねえお嬢ちゃん。——けど、『慣』れてきた。ここからはそっちの本気も、我には届き得ないとその身で知るコトだな……」

「なんで二話目になってようやく圧のあるセリフ吐いてんですか! っていうか内実がメチャクチャショボいんですよプレッシャーの割に! 今私かなり瀕死なんで圧かけないで下さい潰れます! 内臓が!」

ここ暗いなー、出るかー。そう呑気な調子で魔帝は、どういう訳か胡座をかいたままその場を浮遊し、そのまま封印の間から出て地上へ繋がる長い螺旋階段を登り始める。

綺麗に階段一つ一つを一定の高さでホバー移動するその無駄な基本スペックの高さに舌を巻きながらも、魔王は魔帝の背を追いかけながら先程の爆弾発言への疑問を投げかけた。

「あー、それがなー。私の封印、正しい解き方せんと全然解けんし、間違ったらペナルティで魂のどっか砕くぐらいのセキユリティしてたんよ」

「歴代魔王が解除失敗で痛い目見たのそのせいですか! っていうかえげつないですな

ペナルティ！ 魂への攻撃とか再生のしようが無いじゃないですか！」

「え、即死トランプにしないだけ有情だったと自負してんだけど……我の案は『周辺地方への地震・雷嵐・炎上・凍結・死病の災厄五連フルコース』とかだったのに、大分ダウンスケールさせられてさー」

「魔王から見ても無情極まりない充実のラインナップ！ 心無いんですか!？」

「心があるから他人が嫌がる事が出来る、かつて我のダチはそう言っていた……我を罵りにハメて爆笑しながらね……」

「最悪ですねその友達！」

聞けば聞く程に常識と倫理と価値観と力の違いを思い知らされながらも、魔王は懸命にツツコミを入れていく。

正直ツツコミを放棄したいという気持ちはあったが、魔王は部下に振り回される内にどうしても思^{ツツ}つた事^{コミ}が口からついて出る悪癖が付き、それは魔王相手でも変えること出来ない悲^{さだめ}しき性格だった。

はつきり言つて無礼極まりない魔王からのツツコミに対して、当の魔帝は楽しげに笑い飛ばしてこそいたが。

「ま、お嬢ちゃんが頑張つたのはもうそりやよーわかる。たかだか三百ちよいで我の本^体だけでもサルベージしたのは、まさに偉業よ。パナいねー」

「口調が軽うーい！ 風に吹かれるタンポポの様に——ん？ 本体だけ？」
「うむす。ま、この階段長いし、ゆっくり聞かせてしんぜよーぞ」

かつかつと階段を登る音——魔帝は浮いているので魔王の足音のみが——が静かに地下内に響く中、魔帝の言葉に魔王はツツコミを一時中断させられた。

なんかさつきから爆弾発言しか聞いていない。そして、なんか次もそうな気がする。
やばい。魔王は再び、寒気に等しい予感を覚えた。

「我、そもそも魂の格がクソデカだからねー。八百長試合ではあつたけど、神皇の攻撃で上手いこと魂を分割して、それでようやく封印できるサイズになったんよ。アレよアレ、でつかいスイーツを同じテーブルで皆に分けて食べやすくするとか、そんな感じのアレ」

「なんで例えをえらくシヨボク表現すんですか！ 次元の温度差で風邪引きますよー！」

「はっはっは、小粋な魔帝ジヨークよ。我、フレンドリーさでも当時トップ張ってたからさー」

「力量が違いすぎて反応に苦しむんですよ！ 今の私、宇宙の星とそれを見上げるネズミぐらいのレベル差ありますからね魔帝様とー！」

まるで話が進まない。そう思っているも魔王はツツコミという己の魂の宿痾から逃れられず、魔帝の言葉に声を張り上げていく。

あくまで邪気無く笑い続ける魔帝を見て、魔王は薄々悟っていた。この人、全然立場の上下とか気にするタイプじゃない。

命の危機と度重なる魔帝問題発言シリーズに晒され、完全に限界ハイになっっている魔王は、もう敬語ぐらいいしか礼儀を弁えていなかった。普通に身の程知らずだった。

「まーそんな訳で、我は魔力とか権能とか結構世界のあちこちに散らした上で、本体はここに封印させたつーワケなんだけどなー。封印の無理な破壊も加わって、今の我は当時のパワーを出せないんよ。魔帝パワーの引き出しの鍵がひしゃげてる感じ？　みたいな？」

「……え、それ大丈夫なんです魔帝様？　封印解き放った張本人が言うのもなんですけど、お体に障ってません？」

「大丈夫大丈夫、我の強靱・無敵・最強の欲張りセットから」最強が抜けただけだから」
 そう言いつつ、魔帝は背後の魔王へと振り向きながらふよふよと浮遊してバックする様に階段を昇っていく。この場の螺旋階段の構造は地上に至るまでほぼ一定の旋回と間隔と魔帝は見て、もう別に前向き必要無いかなーと考えての事だった。

そして、魔帝は自分自身の状態を確かめるべく、浮遊移動しながら腕を組んで深く考え込んだ。

「——んむ。よし、ダウンロード完全理解。まず、ダウンロード私の能力は現在殆どが制限されてんね。さつきも

言ったけど、やっぱまともな戦闘はムリだわ、ムリムリかたつむり」

「そ、そんな……魔帝様を戦えなくしてしまうなんて、私はなんて罪深い事を……」

「え？ いや、戦えはするよ？」

「え？」

えっ？ 王帝コンビは、互いの発言に揃って小首を傾げた。

「……えーと……すみません、どういう事です？ 戦えはするけど、戦闘はムリって」

「ああそーだ、この言い方じゃわからんわな今時の若いモンじゃ。我がどんな風に戦ったかって伝承されてる？」

「ええと……『その力は神々をも凌ぐ、まさに破壊の神の如し』とは伝わってますが……」

「そうそれ。我、破壊が大好物なんよ。そりやもう三度のメシより破壊好き」

「……いや、どう反応すればいいんですその発言」

ぱちん、と魔帝は指を鳴らして魔王に指差す。答えになっているのかわかっていないのか微妙な答えに、魔王もまた微妙な顔を浮かべた。

魔王からの反応がイマイチ面白くないのを見て、魔帝は話を続ける事にした。

「キミ、魔王なんでしょ？ 現魔族のトップ、最強なんでしょ？」

「……何を以て最強とするかは判断が分かれる所だと思えますが、戦闘能力的にも軍内で最上位である自負はあります」

「あ、そういうタイプの魔族かキミ。いーね、気に入ったわ——っと、また話がズレちゃうわ、やべーやべー」

久々にまともな会話すると楽しくてしゃやらないな。からからと笑う魔帝を見て、魔王はなるべく客観的を心がけた自分の発言に対し忸怩たる思いだった。

封印の解除の為に現状瀕死であるとはいえ、魔王と魔帝の力は桁違いに離れている。たとえ全快したとしても、この自称戦闘不能・不完全体魔帝には到底届き得ない。

言動はアレだが全魔族が崇める存在に対し、弱い自分がトップであるという事を申告しなければならぬというのは“魔王”という肩書きを持つ者としては極めて恥じる事だった。

というか、なんでこれだけの力の差を感じさせているにも関わらず『戦闘が出来ない』のか。魔王の疑問は、振り出しに戻った。

「わかると思うけど、帝とか神とか皇とかかって、結局の所パワーよパワー。パワーが無いヤツは名乗っても生きていけないのよ。王位篡奪とかこぞって皆狙うしね、まあ我は全部返り討ちにしたったけど」

「……はあ」

「で、そのパワーなんだけど。我が今使えないのは、主にそのパワーの調節コントロールなんよ」

「……はい？」

力のコントロールを使えない。その奇妙な言い回しを、魔王は呑み込めない。

しかしその言葉の意味は、すぐに開示される事となった。

「私のメインウエポンって、基本的に世界の破壊でな。戦闘っていうか、蹂躪しか出来るのよ」

「……あの、それってどういう——」

「その一、地殻破壊。地盤を変動させて、星を地面から割り砕く。相手は土地ごと死ぬ」
「——は？」

びん、と魔王の人差し指が立てられる。

その指先と言葉のワンセットに、魔王は今日何度目かもわからないフリーズを喰らった。

「その二、環境破壊。自然のバランスを崩壊させて地上を枯らす。相手は生態ごと死ぬ」
「……」

「その三、天象破壊。光とか雲とか気圧とかぐちゃぐちゃにする。相手は空気ごと死ぬ」
「……」

「その四、次元破壊。次元を直にぶち壊す事で世界の根源を殺す。相手は世界ごと死ぬ」
「……」

魔王の右手の指が一本一本立てられていく。魔王の価値観が一つ一つ壊れていく。

何を言っているのかわからない、というか理解したくない。なんだその魔法は。そんなんアリカ。そんな軽々しく言える様なモノなのかそのラインナップ。

魔王の口はやはり硬直していたが、頭の中だけは変わらずツツコミを放棄していなかった。

「その五——うーん、やつぱ思い出しにくいな。記憶の方もちよつとノイズがかつてるし、ボケ老人つてこういう感じなんかね。不老・不死・不滅の帝王三天権能は生きてんだけどなー、ちえー」

「……あの。もしかして今言った魔法、今でも使えるんです？」

「そりゃ使えるよ、我魔帝ぞ？ 主に頑丈な神界を破壊する用のヤツだから、今のリミテッド我でも現世の次元レベルなら……まあ、一時間もあれば世界をまるごと破壊出来るんじゃない？」

魔王は絶句した。予想以上に、目の前の魔帝の出来る事がヤバかった。

確かに神々を超えて最高神に手が届くと言われただけはある、暴力と言う事も烏滸がましい、極まった力。何が一番ヤバいかと言うと、魔帝本人が全くの自然体である所がヤバイ。

魔帝は変わらず、本当に変わらない軽い調子で言い放った。『一時間もあれば世界を破壊出来る』。そんな発想が、まるで朝飯のメニューを思い出す様に浮かんでしまつて

いる。

そして何よりも、最も魔王にとってまずい事実は。

「……魔帝様は今、それをそのまま撃つしか出来ない、のですか……？」

「お、やっぱ察しいいねーお嬢ちゃん。そそ、今の我、調節とか出来んでね。我が使える魔法は、原則味方識別無し・範囲指定不能・撃つたら後は血の野となれ屍の山となれー、って感じよ。ぶつちやけ、ぶつぱの後はキミらの帰る土地とかくくに残らんだろねー」

魔王は一瞬目眩を覚え、くらりと後ろにふらついた。思わず階段を踏み外して後ろの奈落へフオールダウンする所だった。

確かに力そのものは窮地の魔王が求めていた、圧倒的なモノだ。しかしそれが、単なる世界滅亡しか書かれていないスイッチの群れとなれば話は別だ。

魔王の求める物は、奪われた自分達の土地を奪還し、人間達に対し上位を取った上での終戦だ。正直な所、たとえ出来るとしても人間を壊滅させるまで戦うのは無駄な損耗が多い。多すぎる。

滅り続ける兵站、同胞の犠牲、上層部へ寄せられる苦情の数々。そういった物を無視して戦争を目一杯まで続けるのは、非現実的だ。勇者という戦力を手に入れ、ガン有利となった人間達はこちらを壊滅させようとしている。だがそれ以前は、裏取引や非公式

の冷戦地帯^{サイレントライン}などを挟み、なんだかんだで上手いこと人魔は世界で共存していたのだ。

「……あの、マジで言ってます……？ その、小規模な……それこそ、ちよつと人間達の土地の手前にドーン、つて脅しをかける程度の魔法とか、ありません……？」

「太陽の光を捻じ曲げて一箇所にドーン！ つて集中砲火するヤツとかならイケるかなー。まあやつぱ威力も範囲も調節出来んし、最悪地殻消し飛ばしてマグマまで到達するかもしれんよ」

「やめてくださいしんでしみます」

ダメだった。魔帝の口を開く言葉の全てが、世界の一角を消し飛ばす最終兵器だった。

確かに人間達の蹂躪は出来るし、劣勢で滅亡寸前である魔族の現状をひっくり返す事は出来る。しかしその後が続かない。魔族が帰るべき土地は破壊され、あまりの非道に人間達の抗戦意識は燃え上がり、下手をすれば余波だけで世界の寿命が削れる様な不可逆の被害が両サイドを襲う。

手に余るとはまさにこの事だった。人間達は勇者という切り札を持って戦争のテーブルを優位にしてきたが、魔帝という存在はそのテーブルを砕いた上で魔族にまでダイレクトアタックしてしまう机上の外の大型爆弾だ。

「いやーメンゴなお嬢ちゃん。神魔戦争の初期段階で我気付いちやったのよ。『あれ、こ

れ通常魔法とか要らなくね？ 世界ごと焼き払っちゃえばええやん』って。つー事で、もう白兵戦用の魔法のキャパ減らして、戦略級の魔法ばつか使うようになってねー。それで我は今まともな戦闘は出来んってか、出禁よ出禁。はっはっは」

「……すごいですね魔帝様……すごいです……」

「おう、崇め奉ってよろしいぞ。我は魔帝、真なる魔やぞー？ 当時の神々も皆ござって

『悪魔がアツ……！』と負け犬の遠吠えを無数に吐いて散っていったモンよ」

はっはっは。今日何度と無く聞いてきた、フランクに過ぎる笑い声を上げながら魔帝はふわふわと階段を昇っていく。当然魔帝本人も、魔王の言葉を素で受け取っている訳では無いだろう。

魔帝は何度と無く『メング』と、軽すぎるものの謝罪を口にしてている。それはつまり、魔王への協力の意思は確かにあるが、自分が出来る手助けが魔王の為にならないと理解している事を意味している。

事実魔帝は、かわいい子孫が泣く泣く頼ってきた期待に応えられない事を申し訳なく思っていた。一ミリぐらいには。

「……そ、そうだ！ さつき、さつきの！ 私を不平等契約に迫り込んだ、あの悪辣極まりない契約魔法！ あれで勇者とか人間の王を洗脳すれば！」

「あ、それもムリ。我の幻覚・掌握系の魔法、だいたい神族と魔族にしか効かんのよ」

「なにゆえそんなピンポイントに!？」

「種族を限定した方が魔法の効力が上がりやすいからさー。敵対する神族や洗脳とかで裏切った魔族なかもを対象に取った魔法ばつかが残ったのよ。人族とか神魔戦争の前に完全に滅亡させたし、しゃーなくない?」

「あああ最後の平和的手段が奪われた! 人間の王を洗脳してゆつくり内政を掌握して、勇者を孤立させられないかなーとか一瞬思ったのに!」

「お嬢ちゃんやっぱいい性格してるわー。我、特攻脳筋戦法ばつかだからお嬢ちゃんみたいな絡め手タイプはいつも重宝してたのよね。どう、後で我とサ店とか行つてデートせん?」

「チャライデートのテンプレ! ホントに太古の存在なんです魔帝様!」

頭を抱え続ける魔王と、それをからかい続ける魔帝。封印の間での対面から永遠に続いていく構図のループが、いつまで経つても完結しない。

国力は限界近く、頼れる主力の軍勢も僅か、手札には用途不明の最終兵器カキ。これで一体どうやって戦えばいいんですか。魔王は命を賭けて封印に手をかけた先程よりも切羽詰まった気分でした。

もう魔帝の力に頼らなければ魔族が滅亡する。そう考えての事ではあったが軽率だった感が今更になって襲ってきている。神より上位の世界崩壊モノで制御不能な存

在を解放するとか、私も含めて歴代魔王は何考えてたんですかね。冷静になってしまった今ではそう思ってしまった。

「まあ歴史と文明は破界と再世のワルツ踊るモンだし、我が解放されるなんてイレギュラー起きてる以上は世界文化も何千周ぐらいしてループしたんちゃうん？ いやあ、話を通じる文明レベルで良かった良かった」

「……休戦協定は伝わってなかったのに、言語体系とかが同じなのは納得いきませんがね……」

「あ、それ私の権能の一つ。意思疎通のミスが無くなる様に、当時の言霊の神を喰って真言の能力得たんだよね我。いやー、後世でも使えるいい権能だわコレ」

「とんでもない事言ってますね!! 喰うモノなんですか神!? 倒すとかじゃなくて!」
「我みたいな奪取能力持ちの存在なら、殺すより奪う方がええやん? まあ我は神の踊り食いを他の神達に見せつけて、悲鳴と怨嗟を聴くのが好きだったのもあるんだけどねー」

「生まれて初めて神々に同情しました私!」

魔王からしてもドン引きの魔帝エピソードがまた一ページ重なる。歴代魔王にも人の絶望を趣味として非道を尽くす存在はいたが——そういう連中のせいで人間からの反魔感情が重なって今面倒な事になっているので、当代としては恨み骨髄であったが——

「、その極致を見せられている。いや聞かされている。聞きたくないのに。」

聞けば聞くほど、今の自分の立場が幸か不幸かわからない。魔帝の封印は解けたが制限がかけられている。協力は得られたが、強力すぎて使えない。何を言っているのかわかるが、何を言っているのか理解したくない。

そうこうわちやわちやと話している内に、魔王の視線の先に光が——階段の終わりが見えた。

「うおー、久々のシヤバの空気じゃー。いやまあ城内つぽいけど。長く苦しい登りだった……」

「……ずっと浮いてたじゃないですか……瀕死上がりでこのクソ長階段登る私のが苦しかったという自負があるんですけど……」

「メンゴなーお嬢ちゃん。我、治癒系の魔法は使えんでなー。自己再生に頼り切りだったし、我が回復に回るより敵を殲滅する方が圧倒的にラクでなー」

「まるで参考にならないスペック差の弊害です……」

階段から出た先は、魔王の間。魔王城の最奥にして、最も荘厳に装飾された空間だった。

高位魔族でも破壊出来ない程に補強「コテイソウ」された素材で造られた広間、それが無数の柱に取り付けられた消えない蒼い炎で照らされている。そして魔王達が出てきた階段の後

ろには、魔王用の巨大な玉座。よく見れば、二人が出てきた階段の側面にはスライドした石畳があり、玉座の位置が妙に奥まっている事から、玉座の上に隠し扉を置く形で階段を隠していたのだろうと魔帝には推測出来た。

えらいレトロな隠し方だなー。我、こんな戸棚のおやつぐらいの感覚で隠されていてい存在なのかなー。現代魔族の認識の甘さに、本当に自分が生きていた時代とはかけ離れているモンなんだと考えながらだった。

「——お、おおお……魔王様……！ も、もしか、そのお方が……！」

「……うげえっ……」

「おん？ お、また高位魔族じゃん。爵位竜人？」

ノーブルドレイク

そしてその階段の出口より少し離れた位置で、一人の男が魔王達を心配と驚愕が入り混じった顔で迎えてきた。

赤の軍服に黒銀の胸当てと白銀のマントを纏う、小型の翼と魔王より小さめの双角を備えた青年。軍の実質的な二番手にして、魔王の一番の側近。

爵位竜人——竜公爵が、絶対的な存在感を発しながら浮かんでいる魔帝を食い入る様に見ていた。

「……公爵。申し訳無いけど、この玉座の間に結界術かけて。魔力漏れと防音、あと出来れば限界まで衝撃に備えられる事に特化したヤツ」

「… 畏まりました、魔王様」

血に染まり疲労困憊といった魔王からの命令を、竜公爵は二の句を継ぐ事無く受け入れる。即座に公爵は右掌の上に蒼い魔法陣を浮かび上げらせ、その内側に魔族文字を瞬時に書き上げる。

公爵がその魔法陣を宙空へ投げける様に浮かせる。直後、魔力の波動が広間全体を覆い尽くした。

「おー、現代チック……私の時代の魔法と体系全然違うなー、もう完全に私の魔法ヴィンテージモノじゃん。違和感ハンパねーわー」

「……それで、魔王様。えーと……その、そのお方が……？」

「……はい……魔王様です……」

「うーす。魔帝だよー。伝説がお世話になっておりますって感じ？」

ほーい、といった軽い調子で魔帝が竜公爵へ右掌を向ける。

竜公爵は死ぬ程微妙な表情を浮かべた。目の前で何故か胡座をかいたまま宙に座っている存在。その魔族から感じられる力は明らかに異次元だが、見られる第一印象はメチャクチャに気さくで気安かった。まるで力と態度が一致していない。

竜公爵が魔王へちらりと目を向ける。魔王は感情の無い顔で、ただ頷いた。

『本当ですか？ ちよつとイメージと違くないですか？』『私もそう思います』。そん

な言葉と意思が、この無言の虚空にて一瞬でやり取りされた。

「魔王様。お体の方は大丈夫ですか？ 正直、大分弱っているようですが」

「残存魔力は殆ど無いけど、肉体の方は大丈夫です。事前の術の効力で自然治癒されているので、スプラッタな見た目程ダメージはありませんよ。心配有難うございます、公爵」

「いえ、私にとつて魔王様の身を案じる事は当然の事ですので」

「うはー、すつげえザ・臣下の鑑。私の時代にも欲しかった、こういう忠誠度溢れる側近」

「すみません魔王様ちよつとだけ黙っててもらえませんか？」

概ね魔王の人間性と扱いのラインを見極めた魔王は、もう魔王へ遠慮する事無く発言する。

魔王もまた魔王の言葉に対し、メンゴメンゴと言いながら一歩身を引いた。空中に浮かんでいるので一歩分、後ろへ水平移動したただけだが。

「……説明して頂けますか？ 正直、今命令された結界の内容から言つてどうにも厄介事の気配がしますが」

「ええ、もう……マジで他言無用でお願いしますね、公爵……他言したら私と一緒に無理心中してもらおうぐらいには衝撃の事態になっちゃってますので……」

「ええ……」

そして、魔王は竜公爵へ現状をかいつまんで話した。

「封印の解除が不完全ながら成功した事。協力の約束その物は取り付けられた事。開封が不完全だった為に魔帝の力が本人にすら制御不能である事。あと週休六日制である事。」

一つ一つを説明されるごとに、公爵の顔は喜びから悲しみへ、悲しみから気まずさへ、そして最終的にはどうコメントすればいいのかわからず顔を引き攣らせるといった様に推移していった。

「——というワケで。魔帝様は魔王軍の現状を打開する手段にはなってくれませんが、戦えば最終戦争待ったナシです。言い分を多めに見積もれば、人間の絶滅と同時に魔族と世界の壊滅に繋がるでしょう」

「……魔帝様、嘘ですよね……？」

「魔帝ウソつかんよ。かわいい子孫の前でウソつくとかカッコ悪いじゃんよ」

「おお、もう……」

竜公爵は頭を抱えた。その姿は先程までの魔王と全く同じだった。

確かにこれは無理心中を覚悟をする程にまずい事案だった。事実上、魔王軍の状況は全く変わっていない——いや、いつそ悪化していると言っても過言では無い。

どう運用すればいいのかわからない魔帝という爆弾を、身内に抱えた状態。今は友好的な——友好的すぎて正直対応に困るが——関係ではあるが、翻意一つで魔族も人間も

世界ごと滅亡しかねない。

どうすりやええねんこんな。魔王と竜公爵のガタガタの心情は今、一つとなった。「まー、そんなワケでどうするよ魔王ちゃんに公爵くん。我絶賛眠いけど、寝る前に一仕事ぐらいなら出来るよ？　まあ魔王のお嬢ちゃんの、私の仕事ってスゲー割り振りにくいんだらうけどなー」

「……魔帝様の気遣いと理性的な分析に感謝します……」

「よせやい、お嬢ちゃんみたいなかわいい子に言われると照れるぜー。魅了の神ほどじゃ無いルックスだけど。モテるだろお嬢ちゃん」

「いりますその注釈？　『あ、キミ二番目ぐらいにはかわいいね』とか言われて喜ぶ女います？　」

魔帝からの微妙に喜びにくい褒め言葉を受けつつ、魔王はこれからどうすべきか、まず最初に何をすべきかを考え始めた。

目下最大の問題は、進撃中の勇者一行だ。単独で一騎当千、幹部格の魔族を打ち破ってきた不倶戴天の象徴。これが、本拠地である魔王城の三步手前の地点ぐらいにまで迫ってきている。

竜公爵や魔王^{じぶん}が出撃すれば、恐らく勇者達の敗北までは追い込めるだろう。その位には実力に自信はある。だが、それだけだ。

「……魔王様、やはり自分達が直接出向くのは——」

「却下です。下手につついて撤退されれば、損をするだけです」

魔王は竜公爵からの提案を蹴る。勇者達は突出した戦闘力を持つが、無敗ではない。幹部の一部や先代魔王が直接戦闘に持ち込んだ時、勇者達をあと一步の所まで追い込み、敗走させた事がある。

そう、敗走されてしまう。倒す事が出来ず、悪運強く生き残られ、撤退しては立て直る。そしてその後、交戦の経験と情報からこちらの弱点などを分析され、二度目・三度目でこちらが敗北する。

人間達の最も危険な所は、自分達の弱さを自覚して補おうとする精神性だ。能力によるゴリ押しを好みがちな魔族とは対照的に、人間は情報と作戦で勝ちを拾おうとする。

勇者一行とは、人間勢力における最大の威力偵察部隊なのだ。勝てる所まで突き進み、負けそうな所からは離脱して情報を得る。少なくとも、魔王はそう認識していた。

「今後の事を考えれば、公爵はともかく私は姿を見せる訳にはいきません。和平交渉の札が一つ失われます」

「魔王様、この期に及んでまだそんな夢物語を——」

「極めて現実的な案です。魔族全体の疲弊を考えれば、状況を見て、和平を望む魔族の勢力」として、最後に私が姿を見せて終戦させるのが望ましい。しかし私が魔王だとバ

「お嬢ちゃん我が言うのもなんだけど凄いな容姿に自信あるやん」

竜公爵からの白けた目と魔帝からの茶々を無視し、魔王は考え続ける。

「下手な戦力を出せば被害が出る。強い戦力を出せば情報的な不利を背負う。私はこの可憐で人好み間違いなしの姿を見せたくない。」

魔帝は余程意にそぐわない失礼な事でなければ動いてくれそうな印象がある、しかし戦闘させてはいけない。控えめに言つて、手詰まりだ。

「魔帝様、極めて失礼な事を申し上げますが、直接戦闘……格闘戦などはいかがですか？ 魔帝様程の格があれば、それだけでも圧勝出来るのでは」

「なんで我がふよふよ浮いてるかわかる？ 我、自分の足で歩くのもしんどいんよ。無理な解除の弊害の一つっばいねこりや、身体能力は一般魔族以下じゃねコレ？ ウケるわー」

「く……！ も、申し訳ありません、我々が至らぬばかりに、魔帝様に不自由を……！」

「ええよええよ、我寛大ゆえゆえ。このままならない感じ、駆け出し帝時代を思い出すわー。ちよつと一部が強すぎてニューゲームすぎるけど」

竜公爵が思い付いた案も、無慈悲な現実という事実が踏み躪る。竜公爵は土下座をする勢いで頭を下げるが、魔帝はどこ吹く風とばかりに何も気にしていなかった。

魔法は禁断、格闘は禁止。魔帝の力を頼りにしたいが、どれも頼りにならない。竜公爵は極めて失礼と心の中で謝罪しながらも、この人一体何が出来るの？ と魔帝へ思い始めていた。

「——魔帝様。先程の話から今まで口にした言葉、全て本当なんですよね？」

「ん？ え、さつき言ったじゃん、魔帝嘘つかない。正確には嘘ついて騙し討ちする相手がある居ないもん、昔は意思を操る神を殺す為に“自分の魂に嘘をつかせる”とか色々やってたけど——」

「わかりました。一つ、やって頂きたい事があります」

「……おん？」

「ま、魔王様？」

竜公爵が考える事を放棄しようとしたその時、魔王が腕を組んで険しい顔をしながら口を開く。

魔王の眼差しは迷い無く魔帝へと向けられていた。魔帝はその真剣な顔立ちに『あ、シリアスな顔も結構ええやんお嬢ちゃん』とだけ思い、竜公爵はこの状況で何をする気なのかと困惑する。

魔王は組んだ左腕をとんとんと右手の指で叩きつつ、整った顔立ちを思案で深めていた。

「何よ魔王ちゃん、せつかくの寝起き一発目だし我なんでもやるぜ？ どこ滅す？ 滅す？」

「魔王様、どうするおつもりで……？」

何やら思いついたらしい魔王に対し、魔帝はにやにやと笑う。竜公爵からすれば、魔王がどうするかが全くわからない。

一歩取り扱いを間違えれば即世紀末という魔帝に対し、何をさせるのか。正直魔王が追い詰められてとんでもない事を言い始めたならば、命を賭してでも止めようという覚悟を竜公爵は密やかに決めた。

「……私に考えがあります」

初日は見学からでお願いします

——勇者。それは、人間達の希望の象徴。

幾年もの間、幾度もの事、幾人もの人間を襲う存在、魔族。それらに対し数々の人間国家は結束・同盟軍を結成するも、それでも強力な生態を持つ様々な魔族の軍勢には劣勢を強いられていた。

しかし、その均衡は思わぬ形で破られる事となった。

「……崖の先にあるあれが、魔王城ですか……」

「なんともまあ、禍々しいっすねー。加えて、魔族達の街と来た。落とすのは一筋縄ではいきそうにないっすよーありや」

部分鎧の下に修道服を着て、十字槍を背負い眼鏡をかけた茶髪の壮年。軽装の布服にコートを纏い遠眼鏡を覗く短めの金髪を後頭部で結った少女。その視線の先に、黒く染まった巨大な城が聳え立っている。

魔王城。この一党が^{パーティー}目指し、そして倒すべき敵が座する目的地。旅の終着点であり、最大の山場。それを前にし、二人は幾許かの緊張を覚えていた。

「思えば長かった——と、感傷に浸るのも早すぎるといふ物だ。何せ、立地が極めて悪

い。見ろ、通じる道はこの下の谷だけ、しかも森で視界が閉ざされている」

「うーん、行き来とかどうしてるのかなー。……あ、竜とかいるか、魔族。いーなー、わたしも空飛びたいなー……ねね、こうばびゅーんってココ飛んでいけない?」

「え、っ。いや、流石にボクの魔法にそういうのはありませんし、あつても途中で撃ち落とされるだけでは……?」

「……お前は少しは緊張しろ」

その後ろから、身の丈よりも巨大な剣を斜めに背負い騎士鎧を着込んだ蒼髪の青年と、二本の剣を腰の左右に佩いた白髪セミロングの少女、フード付きのローブを深めに被って深緑の前髪を脛にかかる程伸ばしている中性的な少女がやってくる。

神父、盗賊、騎士、勇者、魔導師。たった五人の一派にして、数々の魔族を打ち破ってきた人族の最大戦力。それが、この少女達の正体だ。

一派の始まりは、かつて勇者がただの少女だったある日に“神剣”が落ちてきた事。それを手に取った少女は、その日から“勇者”となった。

十歳の時に剣を手に取り五年。たった十五歳で、少女は世界の中心たる王都の武闘大会でも一番となる程の実力を付け、そして魔王の討伐という人間の悲願を背負い旅に出た。

そして、その終わりがついに目の前に見えていた――

「じゃ、休憩しよつかみんなー。わたし、お腹空いちやったよー」

「お前本当に緊張感とか無いのか？ 魔王城が見えたんだぞ？ この苦難の旅の終わりが見えているんだぞ？ どうやったらかこの流れでそうなる？」

「おいしいご飯を食べないヤツは誰にも勝てない、己自身にも……そう、言つてたよ」

「どなたの言葉ですか、勇者様」

「わたし。今考えた」

「勇者さん、マジで通常運転つすねえ……」

「……ボク、流石にちよつと敵の本拠地見えてすぐにご飯食べるつて気にならないんですか……」

一人背囊を下ろし、敷物を広げて食事の準備を始める勇者。その緊張という物を欠片も見せない姿に、残りの四人は呆れていた。

思えばこの勇者という人間は、一年の旅を通して概ねこうだった。一切悩まない訳でも苦しまない訳でも無いが、どうにも全体的に呑気で楽観的な姿勢を取っている。

たった五人で魔族との戦争最前線に立つという無謀極まりないこの旅も、何度と無く勇者のこのタフが過ぎる精神性に支えられてきた。あと同じぐらいに呑気な姿勢を支えてきた。

「まま、実際強い張つてもしよーがないじゃん、まだ着いてもない所の事考えてもさー」。

谷下に進む前にご飯でも食べて一息付くのがいいよ、リクツ的に！」

「お前の“理屈”、腹の空き具合と連動しているだろう」

「とはいえ騎士さん、今回だけは勇者さんの理屈いけんにウチも賛成つすよ。休息は取れる時・場所を取るべきつす。勇者さん絶対そこまで考えて無さそうですけど」

「え、あれ、わたし賛成されてるのになんか貶されてる気がする？　しない？」

「……」

「……」

「あれえー？　わたしの大事な大事な仲間達からの援護がどこにも無いんだけど？」

既に缶詰や燻製肉などの保存食まで取り出してすぐにでも調理を始めようと腰を下ろした勇者に対し、残りの四人はそのまま立って見下すか、視線を逸らすしかしていない。

確かに周囲に敵影が無い内に休息をするという判断は速やかで正しい。が、肝心の勇者の瞳にはそんな理性的な色は見えなかった。どう見ても食欲一色に満ちていた。

しかし、実際勇者の言う事には一理しか無い。食事は敵地に乗り込む前に出来る立派な準備の一つであり、ここから腰を据えて魔王城までの道程を開拓する事を考えれば、谷下へ突入する直前の今は確実に休息が取れる時と言えるだろう。

ただ、『はやくごはんたべたい』という勇者の欲が見えすぎる姿勢に賛同しづらいだけ

で。

「まあほらほら、リクツも通った事だしさつさと座ろうよ皆。ご飯は逃げないけどご飯時は逃げちゃ——」

「……? どうした、勇者」

「——構えて皆。ヤバいの、来る」

「!」

今にも食事を取り始める寸前だった勇者が、唐突に立ち上がると共に腰の二刀を逆手で鞘から抜き、瞬時に掌の上で半周させて構える。その瞳は、既に“勇者”のモノだった。

騎士が構える勇者の前へ出て、他三人が後方で三角の陣形を取る。周囲には何も見えていない、感じ取れもしれない。そんな状況でも全員は勇者の一声で、警戒を限界まで高めて辺りを見渡し始める。

勇者の勘——本人は『ハイパー勇者センス』と馬鹿みたいな名前を付けている——は、敵意と脅威に関しては何んな感知魔法をも凌ぐ察しの早さを誇り、数々の窮地を事前に救ってきていた。

その代わりに、敵の強さや数などの内訳は勇者の感覚的な尺度でしかわからず、味方にとつては相性が悪い相手の場合は十分に機能しない事もある為に、一党も危機感知を

頼り切りにしている訳ではない。

だが、今回はその尺度がこう告げたのだ。『勇者の力を持つてしても不味い何か』が迫っている、と。

「……何も、姿が見えませんか……」

「不意打ち系じゃないのは助かるっすねえ……それだけに『ヤバイ』つてのが怖いんすけど、うち」

「魔導師、今の内に出来る援護を重ねておけ」

「は、こ」

神父が輝きを放ち始めた十字槍を、盗賊が懐から取り出した紅色の短剣を、騎士が拘束具の様な留め具を持つ大剣の鞘を外し、魔導師が複数の魔法陣を浮かべながら小型の杖を。その場の全員が各々の戦闘態勢を取る。

前後左右、全方位へと視線を向ける。まだ何も居ない、見えない。見えない敵が迫っている、瞬間に対応するという覚悟の元、全員が神経を研ぎ澄ましている。

「——上、下がれっ！」

「ッ！」

乱暴な勇者の声と共に、五人全員が全く同時にその場から飛び退く。

まるで平時の余裕の無い勇者の声。その声に産毛が立つ程の嫌な感覚を覚え、その後

にそれが来た。

やわやわ、ゆらゆら、ふわふわ。無風の中で羽が真つ直ぐ降りてくる様な速度で、上空からゆつくりと。

「ふいー、空中散歩なんていつぶりの感覚かね。そもそも空とか宙とかしばらく関係無かったもんない我、めんどくさくて瞬間移動ばっかだったし」

二つの巨大な角、三つの瞼、高位魔族特有の紋章が刻まれた黒いローブを纏った魔族の大男。空から降りてきたその男は、あくびを一つした後に額以外の二つの眼を薄く開いた。

その男は、いつまでも地上に足を付かない。首を手に添えてコキコキと鳴らしながら、足を伸ばせば届く様な高さで胡座をかいて浮き続けている。

空から降りて来たという奇襲性の優位も、人間を目の前にした敵意も、言葉の威厳も。これまで相手してきた敵にあった全てが、何一つ感じられない。

あるのはただ、常に鳥肌を立たせ続ける怖気を覚えさせる威圧感だけだ。

「……キミ、誰？ わたしは勇者やってる身なんだけど、斬っていい？」

「あ、やっぱ君が勇者かー。わっか。若すぎんだろ。全く人間の世って怖いなー、こんなちっこい子に世界救済の尖兵させるとか正気じゃ——」

「シッ!!」

一閃。目の前の存在がまともに言葉を返さないのを見て、勇者は両手の剣を離れたその場で振るう。

それだけで、勇者と魔族の間の空間が裂かれて距離という概念が一瞬消える。不可視の剣筋が、魔族の首と胴を完全に両断した。

——様に、見えた。

「うおー、スツゲ。聞いてる以上に勇者ってスゲーんだな、どう考えても人間レベル超えてんじゃない。うーん、プラス三十点！」

「……!?!」

魔族の男は、何も変わっていなかった。斬った筈の首も胴も傷一つ無くそのまま、血飛沫一つ出ていない。

勇者の神剣は魔を討つ事に特化した剣であり、どんな魔族にも傷を付ける事が可能だ。たとえ距離が少し離れていようが、剣を振って起こされた風の刃にすらその力は乗る。

だが、目の前の魔族には神剣を受けた事による傷も、それどころか剣を受けた様子すらまるで見られない。それどころか、勇者に対してはちばちと軽々しい拍手を送っていた。

「質問、答えてもらってないんだけど。誰っていうか、何者なの、ホントに」

「え、あー……ご想像にお任せしちゃつていい？」

「ふざけるなよ、害獣が」

表情を無くした騎士が、目にも留まらぬ速度で突進する。大剣を構えてただけのゼロスタートから、一瞬で全開の速度で。物理法則を置き去りにした様に、腰溜めにした大剣で男の胸の中央を貫いた。

貫いて、いる。手応えはある。だが、軽すぎた。

「フウー容赦無えー！ 死んだー！ まあ死なんけど我ー」

「な、に……!？」

確実に心臓を貫いている、騎士の大剣は胸から背へと貫通している、しかしその状態のまま男はその攻撃に対してけらけらと笑い飛ばしていた。

人型の魔族であれば、心臓の位置はおおよそ人間と共通だ。時折心臓が複数あるという化物もいるが、それでも心臓を貫けば、というよりは胴体を貫通されれば苦痛で顔に表すものだ。

騎士はそのまま剣を回して胴を抉る。男の顔色が変わらない。それならば。

「ふんー！」

「ぬわー！ 我的顔に何すんじやい！ いやまあノーダメだけど、それじゃダメよダメダメ」

「はあっ……!?!」

騎士は胸の中央から大剣を斬り上げ、喉から顔面を、脳天に至るまでを両断する。したつもりだった。だが、先程の勇者の一撃の様に男の様子は変わっていない。

幻を見ている訳では無い。感触は軽いが、貫いた感触も斬った手応えもある。にも関わらず、目の前の魔族は一切の傷が見られない。一滴の出血すら上がらない。

騎士は不快感にも似た恐怖心から、一步でその場から大きく離れて勇者の手前へと戻る。手にした大剣に目をやれば、そちらにも汚れ一つ付いていない。

なんだこいつは。なんだこれは。理解が、追いつかない。

「んー、我が知らんかっただけで人間って強くなれるモンなんだなー。こりやもう拍手喝采モノよ、誇らしくないのそんな鍛え上げて。つよないキミら? どう、世界の半分あげるから部下とかならな——ごめん、我があげられるモノもう無いわ……許して……」

「そんなモンいらないから、さっさと死ねっす」

「おっ?」

その時、今度は男の胸から杭と短剣の二本が生える。男が気付いて振り向けば、いつの間にか盗賊がその姿を限りなく透明にしながらそこに居た。

「今っす、さっさと全力でぶちのめしちやっして下さい!」

「了解ですー！」

「滅び給えー！」

即座に盗賊はその場から離脱し、掛け声と共に魔導師と神父が杖と槍を掲げて魔法を嵐の様に殺到させた。

不死殺しの聖杭と、退魔の魔剣。勇者と騎士の攻撃の間に透明となり隠密して使った、とっておきの切り札。その使い所と判断した盗賊と同様に、魔導師と神父も全力で魔法を行使する。

火・氷・風・岩・雷・闇。あらゆる魔法がたった一所に降り注ぎ、余波で大地が揺れる。

出し惜しみは全くしない。勇者と騎士の剣が全く通らない事を思えば、魔法で突破口を図るしかない。そう判断しての飽和攻撃。

「……ほえー。なーんか、スゴくなったモンだなー人間くん。我、ちよつとだけ興味湧いたわ。一眠りしたら図書館とか行こかな、いくつになっても勉強って大事だよねー」

「……………」

そんな全員の全力を嘲笑う様に、土煙の中からは変わらぬ呑気な声が聞こえてくる。煙が風で流れて失せれば、纏うローブに少しの焦げ跡すら付いていない男の姿が現れる。

何も変わっていない。ただそこに浮いて座っている、降りてきた時の光景で時が止まっていると錯覚する様な——そう思いたくなる程に、魔族の男はただそこに泰然とあり続けていた。

「いやー、いいモン見せてもらった。こういう出し惜しみ無しの残虐ファイト、我大好きよ? でも流石に今ので弾切れかね」

「なワケ、無いでしょ」

「おっ?」

宙に残る土煙にけほけほと軽く咳込む男に對し、勇者が声をかける。

勇者は、二本の劍を自分の頭上で縦に並べていた。

「もつと面白いモノ、見せてあげる、よッ……い」

勇者の頭上で浮かんだ二本の劍が、光に包まれ繋げられる。

その光が広がり、一つの形が作られる。二本の神劍を核とした、勇者の体の十倍ほどの大きさの光の巨大劍がその場に顕現した。

「ブッ、飛べえーっ!!」

巨劍の柄を握り、勇者が振り下ろす。その劍から、空の果てまで届く様な光の奔流が**発**された。

神劍の力を直結させる事で**発**揮される、紛れもない勇者にんげんの世界最強の一撃。準備に時

間がかかり、構えている間は完全な無防備となる為、平常の戦いでは使えない最大奥義。その一撃は、魔族の幹部が率いる大群を相手に、その幹部ごと全てを薙ぎ払い消し飛ばす程の力が込められている。これを使って、倒せない敵は存在しない。

「——うおー……えーと……ナイスファイ？ スゲーやこりや、マジズゲエ。語彙どっかに落としちゃったよ我、人間ってここまで出来るんだねー……」

——今の瞬間までは。

勇者の不意の一閃、騎士の急所への攻撃、盗賊の魔道具からの魔導師・神父の飽和攻撃、そして神剣の最大出力。その全てを、目の前の男は受け切った。いや、防御すらろくにしていない。

五人全員が、ついに手を止める。目を見開き、目の前の男へ注視する。見る事しか、出来なかった。

「……三回目になるけど、もう一回聞くな。キミ、本当に何者？」

「だからご想像にお任せしますつつってんじやーん。まあなんだ、イイ男にも秘密があるもんよ。ちよつとぐらいはネタバレしたくなっちゃうけど、そういうの興醒めじゃん？」

「舐めた事をツ……！」

「ストップ、ストップつす騎士さん！ アレでびくともしない相手に無策で斬りかかっ

でも無駄っす！」

どこまでも小馬鹿にする様な男の口振りに騎士の肩が角張るも、盗賊がそれを制止する。

認めざるを得ない。目の前の存在は自分達より遙かに格上で、倒す手段が存在しない。神剣の最大出力すら通らない相手ともなれば、ハッキリ言つて手詰まり——というよりは、詰みだ。

何せ、目の前の男は今の所何もしていない。何もするまでも無く、こちらを手詰まりにさせている。圧倒している。

お前らなど敵にもならない、そう弄ばれている。故に勇者達がすべき事は、既に戦闘では無かった。

「……魔王……と、考えてもよろしいでしょうか？」

「ん、まあ。キミらにとつて最強の相手つてのは確かだねー、見たろ我の圧倒的なタフネス。キミらの攻撃はマジスゴかったけど、それを受け切る我はもつとスゴいやん？ 差し当たり我が最強つて事でええやろ」

「……いつがっ……！」

魔王。誰もその姿を見たことが無い、魔族を統べる王。人間の、世界の最大の敵。

そうとしか説明出来ない、圧倒的な力の隔絶。勇者達は眈を決して、目の前の男を睨

んだ。

「んー……我としても、もうちょっとキミらとお話してあげたい所なんだけどねー。まあ、今回は初顔合わせって事で。ここまで折角お越し頂いたキミらに、プレゼントのお知らせをしに来ただけなのよ我」

「……プレゼント?」

「ん、そう。魔王からのプレゼントのお知らせー、どんどんばふばふー」

ばちばちと両手を叩く男の言葉に、勇者達が怪訝な顔を向ける。この状況からの『プレゼント』、どう考えてもろくでもない内容しか思わせない言葉に、一行は構えるしか出来ない。

剣も魔法も勇者の全力も、何一つ効かない相手。勇者達は既にこの場を撤退する事だけを考え、そして勇者以外の四人は自分達が犠牲となって勇者を逃がす事すら視野に入れて少しずつ陣形を狭める。

そんな様子在意にも介さず、魔王を名乗る男はぼんやりと空を眺める。眼中に無いとはまさにこの事だと、この場の全員が自分達のあまりの無力さに唇を噛む事しか出来なかった。

「ん、よし。そんじゃ、カウントダウン始めよっか」

「……カウントダウン?」

「そ。ちよつとしたサプライズだね、勇者達ツアー御一行を出迎える花火やんのよね」
そう言つて、男は無造作に手を上げる。

「ゴ、よーん、さーん、にー、いーち……」

そして、伸ばした手の指を一本ずつ折つていく。

何をする気だ。何が来ようと防御が出来るよう、全員がそれぞれの獲物を前に構えて地を踏み締めた。

「——ゼロ」

全ての指が曲げられて拳が握られた瞬間、男から魔力が迸る。

それまで何もしていなかった男が、何も動かないまま圧を発する。単なる魔力の解放、それだけで勇者達は臓腑の内まで押し潰される様な衝撃を受け、踏み締めた地面がそのままめくれる様に土煙が体を吹き飛ばそうとした。

「なっ、に……!?!」

「ぐうっ……!?!」

嫌な予感を覚えた騎士が前に出て魔力の壁を展開し、それが紙屑の様に碎かれる。

それでも僅かに圧力が弱まった事により、騎士と勇者を除いた三人は数歩たたらを踏んで体勢を崩すだけで済んだ。

「…………ツ、皆、無事!?!」

「少し手は痺れたが、それだけだ……！」

「げほ、げほっ！ け、煙いっす……風、風を！」

「はいっ……！」

魔導師が杖を振り、風の魔法陣が周囲を包み隠す煙を吹き飛ばし返す。

土煙が晴れた先には、男を中心とした軽いクレーターが出来ている。ただそれだけ。

男は魔力を無造作に放っただけで、攻撃どころか次なる魔法の構えもしていなかった。

「……なんの、つもりだ……！」

「いや、何のつもりと言われても。花火って、合図が必要じゃん？ だから、これがわか

りやすいかなーって」

「だから、一体何を言っているのですか——」

神父が真意を問いただそうとした時。勇者達の遙か後方より、雷轟が響く。

他の四人は目の前の男への警戒を解かず、状況の確認の為に盗賊だけがその物音に振り向いた。

そして、見てしまった。

「……ッ！ 勇者さん達、まずいっす！」

「手短にお願ひ、盗賊さん！」

「拠点がやられてるっす！」

「!?」

その内容を聞いて、前に立つ騎士に警戒を任せて勇者は顔の半分だけを後ろへと振り向かせる。瞳の半分が、それを見る。

——空が落ちていた。

「なに、あれ……」

「勇者、説明しろ！」

「……空から、数えられないぐらいの炎が、降ってきてる……い！」

二人の視線の先にあったもの。それは、投石機で投げ込まれる様な大きさの炎が、遙か遠くの雲の上から今まさに降り注いでいるという、信じられない光景だった。

勇者達が使う魔法とは比べ物にならない、大魔法。それが勇者達から見て後ろ——軍の最前線にあたる拠点の場所へ、雨の様に打ち込まれている。

ぞわりと、勇者は全身の毛が逆立つのを感じた。

「打ち上げ花火ならぬ、打ち下ろし花火。うーん、綺麗な光だ。知ってるかね勇者ちゃん達。魂つてのは、燃え尽きる前が一番輝くんだぜ……尊いと思わん？ 蠟燭みたいに短い生命の光って」

「……お前ッ……い！」

うんうんと男は頷きながら、しみじみと情緒に浸りながら無情極まりない言葉を紡ぐ。

なんの魔法陣も無く、あるいは土煙で紛れている間に一瞬で魔法を使ったのか。真偽は定かでは無いが、この距離から男は遙か遠くにある人間軍の拠点を直接攻撃した。

最前線の拠点は城塞とまでは言えずとも、魔族の侵攻を阻止する為に様々な防衛用の兵器が備えられている。しかしそれは、地上から迫ってくる軍勢を想定しての事だ。

遙か上空からの攻撃を、それも大魔法を凌げる様な造りはしていない。

「あれ、何してんのキミら?」

「……なに?」

「なに、じゃないが。助けとか行かないのん? 我が言うのもなんだけど、このままほつとくとキミらの拠点全滅しちゃうんじゃない?」

「……!?!」

助けに行く気が無いのか。それを許さないだろう相手本人が、まるで人間側の様な言葉が発してみせる。

その言葉に全員が戸惑い、そして次の瞬間には理解し難い真意を理解した。

「……見逃してやる、とか言いたいのかなあ、魔王さん……?」

「だって言ったじゃん、顔合わせって。そもそも我はキミらと戦いに来たんじゃないの

よ、つてか戦いにならんし？　ならんかったし？　はっはっは、ウケる」

「く……………」

けらけら、からから。男の嘲笑を受け、勇者は無念で黙り込む事しか出来なかった。戦いにならない、ならなかった。受け入れがたい、どうしようもない事実。その上で、見逃される。

背を向けた所を攻撃する様な意思も、男の表情からは見えない。それどころか、やって来た時のままその場で浮遊し続け、頬杖を付きながらあくびを見せている始末だった。

「……………覚えといてね、魔王さん。わたし根に持つ一途なタイプだから、今回の事は一生忘れないよ」

「うんうん、よくよく覚えるが良い。忘れられちゃったら我シヨック受けちゃうもん」

「……………戻りましょう、勇者様。道筋はボクの魔法でマーキング済みです」

「……………うん」

五人は地を擦る様にゆつくりと後ずさり、男が本当に何もしてこない事を確かめる。一定の距離が取れた状態で、勇者達は魔王を睨みながら後ろへ小走りする。

お元気でー。頬杖を付いていない方の手を振って見送る姿にこれ以上無い程の怒りを覚えながら、勇者達は全員でその場から背を向け、拠点の方向へと走り出した。

これまで負ける事はあった、逃げる事もあった。しかし、これ程までの敗北感を覚えた事は無かった。自分達は、敵とすら認識されないまま背を向けて逃げ出したのだ。

何が勇者か。どこに“勇”があるのか。ぎりぎりど、勇者は歯軋りした。

「……思っている事は皆お前と同じだ、勇者。だが今は耐えろ」

「我々が間に合いさえすれば、助かる命もあります。今は、救助の事だけを考えましょう」

「……そう、だね……」

騎士と神父から窘められ、勇者は頭を振って雑念を捨てる。

魔王を倒すのは確かに大事だが、人命はそれ以上だ。どれだけ多くの魔族を倒そうと、失われた命は戻ってこない。敵を倒す事よりも人を守る事こそが、勇者の使命だ。

だが、この無念は必ず晴らす。その烈火の様な怒りだけを心の深い奥底へと押し込み、勇者は道に戻る足取りを早めた。



「……これで初仕事も終わりかー。なーんか、働いた気いしねーなー。まあ我が強すぎるのが悪いんだけどのー。あー、ひと世界壊してえー」

勇者達を見送った後、男——魔帝は、背を倒して宙に寝転がる。

どうやら、考えとやらは上手くいっただけらしい。魔帝が魔王に言われた仕事は、少し不

満が残る形ではあつたが完全にこなした。

これでマジでいいんだろうか。我、なんもやってないのに。そう考えながら、魔帝は
浮かんだまま上に広がる青空を眺め、そのまま昼寝をする事にした。

山積みの仕事は簡単に終わらない

「……ん、ん。あー、ちょこつとだけ寝たわー。我まともな睡眠取ったのいつぶりよ。戦争時は封印まで出さずばだったもんなー」

魔帝はゆつくりと瞼を開き、寝転んだまま宙に浮かび上がり全身を伸ばす。浮遊しているのをいい事に、仰向けになったまま背から爪先まで弓なりに大きく反らし、それからバネの様に上体を起こす。

しかし、魔帝が今いる場所は見覚えの無い場所だった。模様付きの絨毯が隅まで敷かれた広々とした部屋、魔王のローブに付いていた紋章が描かれた大きな壁掛け、年季の入った調度品の数々。

自分が起きた封印の間、直上の魔王の玉座、そして勇者達と顔を合わせた断崖。そのどれとも違う、謎の部屋。なんじゃこりゃ、そう魔帝が思っていると部屋の外から慌ただしく近寄る足音が聞こえた。

「な、何事ですか！ 魔帝様、一体何が！」

「え、何がって、むしろ我が聞きたいんだけど。どしたん公爵くん、顔色悪いよ？ あ、不死の神に比べりゃウルトラ健康体だから安心してね」

「いやそうではなくて！　今、とんでもない魔力を感じたのですが……！」

「あ、我が背伸びしたせいであつと漏れたんかな。え、これダメ？　背伸びする事も許されない我？　ヤバ」

「……………あ、ハイ、そうなんです、ハイ」

部屋の扉が開け放たれ、慌てた様子の竜公爵が姿を見せる。どうも魔帝が起きた事で、睡眠によって抑えられていた魔力が発せられ、それだけで危機と感じた竜公爵が大急ぎで部屋に駆け付けてきたらしい。

自身が緊急事態と思つた事が、ただの魔帝スケールによる背伸びだった。竜公爵はあんまりなオチに死んだ顔となり、言葉の全てを即座に諦めた。

「まーいいや、ところでここどこ？　我、勇者ちゃん達と顔合わせた後に昼寝かましてた筈なのに、なんか瞬間移動テレポつてんだけど。無断テレポは協定違反だからやめような」

「いやそんな魔法は誰も使えません。というかそういう協定で禁止されてるんですね、瞬間移動。何故でしょうか？」

「星だけ転移させて生物を宇宙に放り出したり、星と星を重ねる様に転移させて二枚抜きとか、散々戦争中に悪用されたんですよ。まあ我がやったんだけど」

「活用手段がダイナミックに凶悪すぎませんか？」

「まあ我魔帝だし」

何もかもが違う、違いすぎる。改めて生きてきた次元と歴史の違いを、竜公爵は言葉のやりとり一つ一つで思い知らされる。

もう細かい事考えてても無駄だ。竜公爵はひとまず、魔帝からの問いに答えることにした。

「ここは玉座の間のさらに奥、魔王様の寝室です。失礼ながら、どれだけ声をかけても起床されなかつた為、あの断崖からここまで運び込ませてもらいました」

「え、魔王ちゃんの部屋なんココ。えー、なんか女つ気ねー部屋だなー。つか肝心の魔王ちゃんはどこおるん？」

「少し離れた執務室で書類仕事中です。魔帝様が三日も目を覚まさなかつた為、そのまま寝具を持ち込んで寝泊まりしております」

「ワーカホリックすぎるあの子。すっごく世知辛いね現世」

勇者との邂逅から丸三日、魔帝は昼寝をかましていた。魔帝からすれば、それは仮眠にも等しい時間だった。

何せ、生きていた時間と封印されていた時間、そのどちらの長さで比較しても日単位の休息などは瞬きに等しい物だ。故に魔帝にとっては、『三日も』ではなく、『三日しか』という感想しか浮かばなかつた。

とはいえ、そのせいでかわいい子孫が割を食うのも少しだけ申し訳ない。

「意外と渋い趣味なんだな魔王のお嬢ちゃん、威厳とか出す為なんか？」

「いえ、この寝室の内装は魔王様の父上——先代の頃からの物で、魔王様の部屋となつても何一つ変えられていないのです」

「お、あれか、お父さんの遺した物は思い出と一緒に残したいとかさういう？」

「いえ、『元の私の部屋の方が執務室に近いし、わざわざ家具を移す時間も惜しい』と」「なんて哀しい理由なんだ、全魔族が滂沱の涙の海に沈んじゃうぜ。あ、海全部を使った津波で陸地を破壊する魔法の使い方思い出したわ」

「おやめくださいしんでしみます」

当代魔王が自分のせいで部屋を奪われたのではないか。そんな魔帝のささやかな申し訳無い思いを竜公爵が正す過程で、両者は互いについて変な方向の理解を深める。

魔帝は魔王の人柄——生真面目がすぎる仕事人気質を。竜公爵はやっぱこの目の前の存在危険すぎるわ、と。

「ふあー……で、結局『考え』はなんとかあったん？ 少なくとも、我は言われた通りに完璧にサボってきたで」

「魔王様は『九割上手くいったので、残り一割をなんとかしなきゃ』と、ここ三日間ほど缶詰に……」

「えー。九割上手くいってもダメなん？ 魔王ちゃん厳しいなー」

「いえ、魔帝様の働きは完璧だったとも言ってみました」

「ふえー。よーわからんし、お嬢ちゃんに直接聞くか」

そう言い、ふよふよと魔帝が浮かんだまま寝室の出口へ行くこうと動き始める。が、そこに立ちはだかる様に竜公爵は魔帝の前へ出た。

「お待ちを、魔帝様。城内の配置もわからずに行くつもりですか」

「へ？ 端から片っ端まで行けばアタリ引くでしょ。上空から見た感じ、三・四時間もありゃ回りきれんんじゃないかね、と思っただけ」

「魔王様の命で『魔帝様の行く所は必ず案内せよ、あと魔帝様を誰にも見つからないようにしろ』と承っております」

「ふーん、魔王ちゃん、なんか考えてんな？ しゃーない、かわいい孫マイナス万年のか

わいいワガママだ、聞いとくかー」

「……正直、今の魔王様に余裕は無いので、魔帝様のご厚意に心から感謝します」

「かたつくるしーなー公爵くん。襟元もつと開いていこうぜー？ そうして開いたクビを斬りに来たヤツをカウンターで殺すのが一時期流行したモンよ」

太古の小話にまた一つ嘆息を零し、竜公爵は魔帝と自分に対して魔法陣を展開、一つの魔法を行使する。

なんやこれ。一瞬魔帝はその魔法に対し、何もしないまま抵抗しようとした——大抵

の魔法は基本的な格の違いで勝手に無効化してしまう——が、竜公爵から害意を感じられない事や攻撃される理由が無い事もあり、頑張つて自分の生態に逆らい魔法を甘受した。

「格下の魔法をそのまま受け入れちゃうとか、戦争以前ぶりだな。で、今の何？」

「隠密用の魔法です。完全ではありませんが、姿と音を短い時間だけ抑えます」

「はーん、勇者ちゃんを取り巻きのちっこい子がやってた奴か。いやはや、我が魔法を初見で見破れんとは、ほとほと衰えたもんよの」

音と姿を限り無く希薄にさせた二人が先代魔王の部屋を、玉座の間を出る。竜公爵はしきりに周囲を見渡し、廊下に誰もいない事を確かめてから魔帝を先導していく。

魔帝アイから見て、竜公爵のその振る舞いには明確に恐れを、より正確には怯えに近いものが透けて見えていた。本人の表情は極めて平静ではあるが、どうにも違和感を感じない。

何せ、竜公爵の恐怖は魔帝本人へ向けられていないのだから。

「なんかそんなビビる事あるん？ 我より怖い事あるん、君ら？ 我が目の前にいる以上の恐怖とか、神界探してもそう無いと思うんけど」

「自分でおっしゃるんですかそういう事。……その辺りも含めて、魔王様から伺つて下さい」

「お、魔王ちゃんココかー」

不審な竜公爵のナビゲートの果てには、一つの扉が待っていた。

竜公爵が二度ノックすれば、『公爵ですね、どうぞ』と声が返ってくる。それに合わせて、扉が内側へと独りでに開いていった。

二人が部屋の中へ足を踏み入れる。そこには、大机の上に築かれた書類の山脈と、その隙間から顔を覗かせる魔王がいた。

「公爵、結界」

「はっ」

二言、それだけで竜公爵は魔王の意図に沿い、執務室全体を覆う結界を構築する。

魔王はその結界に見覚えがあった。魔王が魔王と共に玉座の間へと上がってきた直後、竜公爵が魔王に命じられて使用した、やけに周到な密閉用の結界だった。

「ふむん、色々聞きたい事あるけど……まず一番気になるトコからいこか。どうだったん、『考え』」

「魔王様のお陰で、上手くはいきました」

「それよそれ。なんでそんなちよつとだけ歯切れ悪いん？　つてか、結局魔王ちゃんの作戦の細かい所知らんまんまなんやけど我」

魔王が一番の疑問——魔王が実行した作戦の成否について聞く。それに対し魔王は

手に持つ書類を一度置き、達成感一つ感じられない真顔で魔帝と向き合った。

訝しむ魔帝に対し、魔王は前に顔を合わせた時の様な焦りに満ちた物とは異なる、極めて真面目な表情を保っていた。

「まず、感謝を。魔帝様が勇者達の注意を引いてくれたおかげで、私達は前線基地を攻撃出来ました」

「我マジでなんもやってないけどね。まあでも、合図がちゃんと見えたみたいで何よりよ」

魔帝が魔王に指示されて行った仕事は主に二つ。勇者達の前に現れて時間を稼ぐ事、そして時が来たら軽く魔力を解放する事で魔王達へ攻撃の合図を出す事だった。

不老・不死・不滅。魔帝の持つ完全無敵セツトは、当時の神皇すら破れずに封印する事ではか対処出来ない程の強固さを持っている。

神が破れなかった物が、人間達が持つ不死殺しの道具で破れる筈も無い。魔王は再三『大丈夫ですよ？ うっかり破られたりしませんよ？』と入念に確認を取った上で、魔帝を勇者の前へと送り出した。

「しっかし、魔王ちゃんも中々やるやん。三百程度であんだけ大規模な魔法撃てるんだから、やはり天才か……」

「そういえば魔王様、魔帝様の解放で魔力を使い果たしたと言っていないませんでしたか？」

「心配ありません。民達から接收した禁薬をばっちりキメたので」

「何をされてるんですか魔王様!？」 あれは寿命を縮めるといふ事で禁制だと法で定めただけではありませんか!」

「私が法であり、民にバレなきや違法でなく、即死でなければ寿命などただ即物的に支給えるコストです。そもそも魔王様の解放を決めた時点で私の寿命など有って無い様な物ですし」

そして魔王がやった事は、竜化した竜公爵を自分達ごと透明にして上空に飛び、勇者の前へ魔王を降下させた後、そのまま人間達の前線基地へと向かい上空から奇襲する事だった。

魔王軍の優位性の一つとして、竜族などの有翼種族による制空権がある。竜公爵の様に雲の上まで飛行出来る程の力を持つ者はそう居ないが、そこに魔王の魔法を加えれば察知・防御不能の空襲が可能だった。

また、竜公爵は嵐竜の血族であり、雲と雷を部分的に操作する事が出来る。それによつて魔王の目から届く様に基地上空に大規模な雷雲を生成し、魔王はそれを見たら攻撃の合図を出す様に言われていた。

魔王の魔力解放の直後に合わせて魔王が雲の上から魔法を降らせれば、勇者達の目の前にいる魔王が攻撃をしたと錯覚させられる。それが今回魔王が書いた筋書きだった。

「ところで、なんで勇者ちゃん達逃がしたん？ あのまま攻撃し続けられれば、基地滅ぼせたんじゃないね？」

「全滅させては意味が無いんです。あそこ人間達は勇者達の足止め役になつてもらわねば困りますからね」

「とーと？」

「死んだ人間は蘇りません、なので死んでしまえば割り切つて無視出来ます。ですが瀕死ギリギリで生きている人間はそうはいかない。なので生かさず殺さず、苦しみの中で復興と治療に時間がかかるよう建物をメインに攻撃しました」

「うわー魔王ちゃんかわいい顔してエグーい。魔帝ポイントを三十点進呈しよう」

その上で魔王は、攻撃の後に勇者達を見逃すように魔帝へ指示していた。それは善意ではなく、悪意に限りなく等しい妨害行為だった。

人間達の前線基地は選りすぐりの軍人達が多く駐在しており、また補給の為に多くの物資が保管されている。それらが重大なダメージを受け、しかし立て直す事が出来るとなれば、人間達は兵士の治療を優先する。そしてそれは、勇者達にしても同じだ。

勇者一行は根本的に善人であり、万能だ。基地の人間だけでは対応出来ない重傷者であつても、生きてさえいれば快復させる魔法を行使出来る。故に基地が攻撃され、かつ魔帝と戦うメリットが無いとわかればすぐにでも撤退するだろう。その魔王の見込み

は果たして的中していた。

「あと、『自分については魔王とも魔帝とも断言せず、適度にぼかしておいて欲しい』ってのはなんだったん？ 魔王って勘違いモノさせるだけなら、我普通に名乗ってたよ？」

「勇者は無駄に勤が良く、また嘘を見破る魔法もあります。なので嘘も本当も言わないのがベストなんです」

「弱者つてのは色々想定せにやならんのかなー。絶対強者たる我には無縁の心配だわー」

「ええ、私は弱いです。……強ければ、ここまで魔族が追い込まれる事も無かった」

「待つて魔王ちゃん、そんなガチ凹みしないで。我が嫌なヤツみたいじゃん」

「魔帝様、僭越ながら真面目に今のは嫌味だと思われませう」

その上で、魔帝には自分の正体を断言させないまま勇者達が勘違いするように仕向ける。

魔王は自分の姿を隠したまま基地を強襲し、“魔王”という存在とイメージを魔帝へ擦り付け、なおかつ今の勇者では魔王の相手にならないという威圧をかける。

ここまでが魔王の『考え』であり、その目論見は全て成功していた。

『九割上手くいっただけ？』ってのは？ あと一割どこいつちやっただけ？

「切りたくもない札を切らされた、というのが一割です。今回の上空強襲は、せいぜいあ

と一回しか使えませんかね」

「え、なんで？」

「……いくらか、面倒な内情がありました」

しかし、魔王の顔色は優れない。魔帝がそれを質問すれば、魔王は気まずそうに目を逸らした。

「まず一つ目に、攻撃の前兆がわかりやす過ぎます。竜化した公爵を隠す程の大雲から魔法が降ってくる、そう割れてしまえば人間は上空からの攻撃を警戒し防ぐようになるでしょう。これによって間接的に、魔族のアドバンテージである空の優位性は大きく制限されます」

難しい顔を浮かべ、魔王は溜息をつく。超高所からの魔法爆撃は、人間達にとつては反撃不能の攻撃である事に間違いは無い。事実魔王は遙か昔にこのアイデアを思いついた時、ちよつとアイツらの王都ぶつ壊そつかなーと思つたぐらいだった。

だが、都一つに打撃を与えただけで終わる程今の人間勢力は弱くない。加えて空中から大規模攻撃があるとわかれば、対空意識が強まり魔族からの攻撃の戦術が制限されてしまう。

さらに言えば、この技は大雑把過ぎた。雲を挟んで攻撃するという性質上、魔王は細かい狙いを定められず、攻撃範囲を広げざるを得ない。的確な位置に攻撃出来ない以

上、威力は大幅に下がる。

故に与えられる損害は広く薄く、そして警戒さえすれば凌ぐ事は人間側にも可能となってしまう。それこそが今まで魔王がこの戦法を取らなかつた最大の理由だった。

「二つ目に、私と竜公爵は今の魔王城の要です。私達二人が城を短い間でも空けてしまふのは危険が生じます」

「勇者ちゃん達が人間側の最前線なんですよ？ 別に城攻められる心配とかないじゃない」

「いえ、現体制に不満を抱く魔族によるクーデターがありえます」

「マジで面倒な内情だった。そんな事気にしながら戦争せにやならんのキミら？ 一致団結出来ん？」

「そもそも私自身が戦争に消極的な姿勢を取っていますからね。魔族の多くは『死ぬまで殺す』という闘争第一主義を掲げています」

「うわー私の遺伝子を感じるうー」

それ以上に魔王の頭を悩ませているのは、魔族達の反逆の可能性だ。正直な所、勇者を相手取るよりも遙かに面倒な事態と言える。

先代魔王や軍の幹部を始め、多くの魔族が犠牲となつている現状、元々好戦的な種族である魔族達の反人感情は限界まで高まつている。軍に関係の無い一般魔族すら、勇者

や人間軍へと特攻してあえなく散る事すらある。

魔王は竜公爵以外に人間達との和平を目論んでいる事は明かしていないが、それでも魔王城近くまで軍を撤退させて軍事行動を消極的にしているという現実はストレスの元だ。それがいかに戦略的に正しかろうが、感情とはコントロール出来るものではないのだから。

「三つ目、これが最大の問題点です。魔王様が七日に一日しか働いてくれません」

「え、我関係あんの？」

「大アリです。何せ勇者達は魔王様があの攻撃をした、という認識を抱いているのですから。いざアレをやりたい時、魔王様が眠っているのはハツタリが利きません」

そして根本的な問題点として、この攻撃は魔王が姿を見せている時に撃たなければならぬという制限がかかっている。

今回行った攻撃は人間軍へ大きな打撃を与えるものではあったが、主目的は進軍の抑制だ。『離れていようが攻撃出来る』、そう思わせる事で人間側は迂闊に魔王城へ近寄り辛くなる。

しかし、最大の利点は“勇者達を強制的に撤退に追い込む”という所だ。が、それには“勇者達の前に魔王が姿を見せ、その間に魔王が遠くを攻撃する”という二つを同時に満たす必要がある。

単に空襲をするだけでは人間側に学習され、防備に徹して凌がれる。凌がれてしまえば、勇者という戦力が強引に軍を突破するというこれまでの状況に戻るだけだ。

「しかし勇者達も馬鹿ではありません。『自分達が魔王に勝てない』、そうわかれば拠点を前線に出す事の危険性を説き、無用な犠牲を避けようと侵攻を留めさせるでしょう」

「なんだ、ならええやん。我に勝てないんならもう戦争終わりやろ」

「いえ、いつかは必ず魔王様を打倒する為の別の手段を模索し、それを試す為にやってくる事でしょう。まずは軍を後退させ、それから様々な文献の情報を調査してからとなるでしょうが」

「めっちゃ時間かかりそー。大変だね人間」

「時間をかけさせる為に虎の子の策を切ったんです。存分に人間軍には勇者の足を引く張ってもらわなければ」

とはいえ、魔帝によって勇者達が魔王城まで辿り着くという最大の危機は脱する事が出来た。東の間の猶予ではあるが、体勢を立て直す時間としては十分だ。

あとは執政者の仕事だ。ギリギリの瀬戸際で掴み取れた時間が残っている内に、次の方針を考えて動く。魔帝という力を戦力として運用出来ない以上、この人魔の戦争の勝ち筋は未だにゼロなのだから。

「……っーか、お嬢ちゃん結構やるモンだねえ。人間との和平がうんぬんって言うてる

割には、エグい事しとるやん」

「戦争なのでですから、互いに奪い合い殺し合うのは当然の事です。正直な所、個人的心情としてはあそこの前線基地の人間は全滅させたい所でした」

「おつとソフトに物騒。その心は？」

「魔王様。魔王様は父上——先代魔王と、幹部だった義兄・義姉など、親族を多く失つておいでなのです」

竜公爵が悲壮な表情を浮かべて魔王の立場を説明する。その間も、魔王は感情を失つたかの様に眉一つ動かさなかった。

「戦争なのでそこは仕方ありません、こちらも敵から多くのものを奪っています。一度戦うと決めたならば、得る事よりも失う事こそを覚悟するべきなのです」

「魔王様……」

「征服か和平か、どちらも戦いの果てに掴み取る物です。だから私は、より損害と期間の少ない方を選ぶと決めました。その過程に感情は不要なのです」

「うわあ我と全く戦争に対する温度が違う。我とか『アレ壊したいから壊すかー』ぐらいのノリで戦争してたのに」

「神魔戦争の頭目としてどうなんですかそれ？」

「明らかな戦争に対する認識の温度差に、魔王はここに来て初めて表情を崩して魔王を

睨む。

と言つても、その顔に嫌悪は無く呆れのみがある。現戦争で絶賛頭をぐるぐる回している身としては、何一つ学べない前身に対して思う所はあるが、古代と現代を比べる事その物が無駄だと既に身に沁みていた。ツツコミの過程で心の底まで刻み込まれていた。

はあ。溜息を一つ零し、魔王は頭を手で小突いた。

「あ、そーだ。魔王城の中だつてのに我の姿をめっちゃ隠したがつとるみたいだけど、なんで？」

「端的に言つて、魔帝様の事を『魔帝様』と知られる訳にはいかない、という事情があります」

「んん？　まるで意味がわからんぜ魔王ちゃん」

魔王の策とその裏にある思考はわかった、しかしここに至るまで魔帝の姿を魔法で何度も隠そうとしてきた理由はそのままだ。

思えば魔王は、玉座の間で竜公爵と対面した時にも嫌な声を上げ、すぐさま結界でその場を密閉させていた。『魔帝を魔帝と知られてはいけない』、その意図が魔帝には掴めなかった。

「再確認となりますが、魔族の現状は全滅一歩手前です。魔帝様という最終手段が無け

れば、私はとつくに人間側へ降伏し、自らの命と尊厳を明け渡してでも魔族の存続を訴えかける所でした」

「うわあ、精神的にも崖っぷちすぎるやん。つてか魔王ちゃんはそれでいいんか？」
「損害の最も少ない選択肢があればそちらを取ります。そういう訳で、最後の逆転の目として魔帝様の復活にワンチャン賭けたワケですが……」

そう言うつてから、魔王は魔帝から真横に目を逸らす。

「私が魔帝様に縋らざるを得なかったように、魔族もまた絶対的な力を求めています。が、その絶対的な力である魔帝様は戦えません、というか絶対戦っちゃいけません」

「はっはっは、メンゴメンゴ」

「……そして大多数の魔族は、かの伝説の魔帝が復活したと知ればこう思うでしょう。『魔帝様の力を得た以上人間など敵ではない』、そう意気揚々と反撃に転じようとするのが目に見えます。実際には、魔帝様の力は世界に広げきれない程の誇大広告なのに」

魔王の懸念点は、魔族達が魔帝の力をアテにして戦争を進めようとする事だった。だが、味方の持つ手ごと潰してしまう様な巨大な武器ちからで戦いを挑める訳もない。

故に魔帝が戦えない事を聞いた瞬間から、魔王は魔帝ごとその事実をなるべく秘匿しようとしていた。口に戸が立てられない以上、いかに信用出来る側近と言えど竜公爵にすら明かしたくなかった程だ。

「という事で、魔帝様が復活した事実と存在そのものは最高機密です。明かしたらダメですからね？ 絶対ダメですからね？ 言いふらしたりとかしたら、私はその時点で責任取って自害しますからね？」

「うーん、魔王ちゃんがそこまで覚悟ガンマリならしやーない。かわいい子にそこまですさせるのは我的にダサいし、素直に黙ってしんぜよー」

魔王による心の底からの嘆願に、渋々といった感じで魔帝は応じる。

竜公爵も必死が過ぎる魔王の姿が不憫でならないという表情を浮かべており、墓場から地獄の底まで魔帝の存在を秘する事と決めた。

「……で、これからどうすん？ 我はあと三日はダラけたいし、魔王ちゃんも我の扱い困つとるんやろ？」

「いえ、魔帝様のこれからについてはある程度は考えてあります。従って頂けますか？」
『もつと働け』以外なら我は大体受け付ける構えやよ。『一回死ね』とか言われても、大道芸として首落とすぐらい我は寛容だからの」

「いえ、そんなドン引きするレベルの考えはありません。いや、やんないてくださいね？
普通に怖いので」

魔帝からの冗談なのか本気なのかわからない提案に冷や汗を流しつつ、魔王は机の引き出しから一枚の書類を取り出す。

魔帝の方へと差し出される形で机の上に置かれた書類の一番上には、大きくこう書かれていた。

「一般魔族として、ふつつーに生活して下さい」

“転入届”と。

円滑な人間関係は雑談から

「あーたーらしいー朝がつきたー、滅亡のーあつさーだー」

「やめてください死んでしまいます。私の胃が」

魔王城下町、中級集合住宅『魔界ハイム・第二階層』。その内の部屋の一つにて、起床した魔帝は剣呑な歌を口ずさみながら、飾り気の無いまっさらなリビングへとのおんびり歩いてきた。

それを迎えるのは、当代魔王。本来は魔王城の最奥に居座るべき彼女は、リビングの中央に置かれたダイニングテーブルの上でチラシと新聞に目を通している。

古代で魔の頂点として、神と覇を競った男帝。現代の魔を統べ、世界を分つ戦争の頭目たる女王。その二人はたった今——新居で同居生活をしていた。

「うーん、いい匂い……今日の朝食何？ 人肉とか？」

「捕食花と叫喚葉の野菜炒め、フライドポテト火炎牛ベーコンのチーズトーストです」

「魔帝と魔王の食卓とは思えぬ圧倒的庶民感。永らくに渡る魔帝人生において、ここまです帯染みた朝は無かつたぜ」

魔王は新聞から目を切り、一点を指差す。魔帝がその方向を見れば、リビング傍の

キッチンにて魔王が挙げた食材が独りで料理されていく光景が広がっていた。

『料理はプログラムです』。この部屋へ転入した初日に魔王はそう言い切り、魔王の繊細にして圧倒的な魔法操作によって料理を半自動的に行ってみせた。

我とは全く別方向にスゲー。魔王の高度が過ぎる一般的な所業を見せられ、魔帝は今も舌を巻いていた。

「丁度出来上がる頃合いです。席に付いて下さい、テレキネシス念動力で配膳する所までオートなので、そこにいると皿に突進されますよ」

「我も流石に朝飯の皿にケンカ売られた事は無いのー。あれ、我戦闘禁止令出てる以上、皿に勝てないんじゃないか？　へへっ、我に挑むか、一介の皿風情が……」

「あの、ちよつと圧出ささないでくれません？　マジで皿をキツカケに家破壊したりとか……しません、よね？」

「……………」

「沈黙はやめてくださいってばあ！　冗談ってわかってても怖いんですってばあ！」

一瞬だけ魔帝は魔王を脅かすだけの圧を発する。しかしそれは、これまで見せてきた空間全てを震わす様な威圧と違い、せいぜいテーブルと窓を震わせる程度の力しか出されてない。

魔王はすぐに引つ込んだ圧と、想定通りの圧力を見てホツとする。魔王の冷や汗ダラ

ダラの内心も知らず、魔帝は魔王の対面の椅子に腰掛け、後頭部に両手を回して食事が来るのを待つ。

それから十秒もしない内に、まるで見えない人間がいるかの様に朝食がキッチンからテーブルの上へ、律儀に道の中央を浮かんで運ばれた。

「……ふー。魔帝様、どうです？ その指輪、違和感とありません？」

「んむんむ、問題ナツシン。なにせ魔王ちゃんの愛の籠った指輪ゆえな、失敗とかあるワケ無いやろ〜」

「その一般化の指輪、色々考えながら丸二日かけて制作した八個目の魔道具なんで、既にもう七回失敗してる計算ですよ」

「マジかよ七回も破局してたわ。指輪パリンパリンで笑う」

そう言つて魔帝は自分の左手の薬指に嵌めた、妖しく光る斑水色の宝石を持つ指輪を魔王に見せ付ける。その指輪は、ここに転居する前に魔王から魔帝へと贈った物だった。

効力は、ただそこに居るだけで魔王すら威圧する程の魔帝の力を、少なくとも一般魔族よりちよつと上程度に収めるという物。ちなみに魔帝が薬指に嵌めている理由は『我がそうしたかった』というだけで、世間一般的に愛の象徴とされる意味合いは微塵も無かった。

「つーか我にデバフとか、そうそうかけられるモンじゃないんだがの。三天権能のおかげで、我そういうのには滅法強いんやけど」

「まあそこは苦勞したので……って、三天権能ってアレでしたよね。不老・不死・不滅」とかいふ相手にしたくない能力ナンバーワンのヤツ」

「おう聞いてくれや我がマイハニー！ コレ我ながら自慢のアピリテイなんでな！」

「言っておきますけど、私がここにいる理由は単に魔帝様の監視ってだけですからね？ その為だけに現職魔王が市井生活とかしてんですからね？ 嫁扱いやめてもらえませんか？」

魔帝と魔王、この二人が同居生活をしているのは魔王の言葉通り、魔帝の監視の為だった。

何せこの魔帝は、存在その物が人魔・全世界の大災厄だ。魔帝本人の性格は穏やかでフレンドリーと言っているのだが、事あるごとにちよつと世界を破壊したがる大悪癖がある。

そこに一切の悪意は無い。得意な事と趣味が破壊、そう言い切る魔帝の瞳はどこまでも澄み渡っている。知らずにそんなモノを封印から解き放ってしまった本人である魔王は、責任を持つて魔帝の新生活を監視する事にした。

ちなみに魔帝は魔王の意図を正しく理解しながら『我の嫁我の嫁！』と、おおはしゃ

ぎして煽っている。実際魔帝の生活能力が絶無な為に魔王が家事を担っている現況、傍から見れば否定はし辛いのだが。

「まあ魔王ちゃんにとつても面白い話だと思っうぜい？　そもそも、不老・不死・不滅つてそれぞれどういう能力だと思っうん？　所感を述べよ」

「え？　……まあ、どれも”死なない”つて共通項がありますが……別々に分けてある事という事は、それぞれ違う能力なんですよね」

「うむす。なれば王のルーキーたる魔王ちゃんへ教授してせんじよう、絶対強者の力を」
二人はのんびりと朝食を摂りながら、なんでもない雑談の様に魔帝の理不尽極まりない能力についての話を始める。

“帝王三天権能”、不老・不死・不滅。あらゆる高位魔族を討伐してきた勇者すら傷一つ付けられなかった、無敵の力。勇者と相対する前にその絶対性を聞かされた時、魔王は『インチキ過ぎませんか……』と思わず零してしまった程だ。

しかし、その詳細を冷静に分析した事は無かった。

「魔王ちゃんは頭良いし、すぐ気付くと思っうやで。第一問、”不老”つてなーに？」
「……そりやまあ、老衰しない事、ですぬ」

「老衰つて？」

「え。文字通り、老いる事で身体が弱まる事じゃ——あ」

「お、もう気付いた？ 秒やん、やっぱ察し良いねえ」

サラダをフォークで運びながら、言葉を単純な所から魔王は思案していく。

不老。その反対は、老衰。時と共に衰え、やがて死に至る事。そこに“不”を付ければ、どうなるか。その答えを、魔王は直感的に一足飛びで理解した。

「——時間で死なない。衰えない」

「大正解、魔帝ポイント進呈！ 我の“不老”は、つまり時間の否定なんよ」

魔王が目を見開いて答えを呟くのに対し、魔帝はパチンと指を鳴らす。

不老。その真髄は、時間という概念から隔絶される事だ。たとえ何年、何百年、何億年。どれだけ経とうと、魔帝は死ぬどころか衰える事も無い。常に全盛期を保ち続けている。

それに気付いた時、魔王は顔が引き攣るのを感じた。

「……あの、もしかして……例えばですけど、時間を操る魔法とかあったとして。それ、効かなかつたりします？」

「その言い方じゃ時間魔法はこの時代じゃ廃れちゃった感じかー。そのとおり、我には加速も減速も停止も効かんよ。まああくまで無効化出来るっただけで、我自身は自由自在・縦横無尽に無限行動出来ただけだな！ だははー！」

「うわあ……」

それを聞かされた魔王は畏怖というか、なんかもう酷いな、という一歩引いた感想を抱いた。

『時間停止が効かない』——その言い振りでは、実際に喰らった事があるのだろう。戦争のトップとして常に敵の立場と意図を推測する身である魔王は、古代戦争の神側の視点を軽くイメージしてしまう。

何億年経とうと弱まらず暴れ続ける世界の破壊者。時間という絶対的なモノに干渉しても、まるで封じられない。しかも無効化は任意で、魔帝本人は好き勝手に加速して動き回る。

あ、こりやダメだ。どうにもならないという諦めが、魔王の頭の中で結論付けられた。

「じゃ、次の問題行くやでー。」「不死」ってなーに？」

「そのノリ続けるんです？ ……どうせ額面通りの話じゃないんでしょね」

そう言い、魔王は半分になったトーストを両手に持ったまま、口に運ぶ事を忘れて思考し出す。

“強さ”の考察は、戦争のトップとしては極めて重要な事だ。情報収集を周到に行つた結果、地力の劣る筈の人間軍は魔王軍を押し返していった。勇者という最強の剣の存在が最大の要因ではあるが、それだけでは魔王軍が勇者の居なくなつた土地を奪還出来ない理由にはならない。

故に魔王は、魔帝の強さについても極めて真面目に考える。なお魔帝は単に魔王が困る顔が見たいだけで、つまりは単に自分が楽しもうとクイズを投げかけてるだけだった。

「……不死……死さない……」 死ぬ”の反対……不老が” 時間の否定”、じゃあ今度は何を否定してる……?」

「あ、ごつそさーん。いやー魔王ちゃんの家庭メシうまかったー。てか、なんで王なのにこんな一般料理上手いん? いつでも若奥様やれるじゃん」

「え? ああ、私は王位を篡奪された時に備えて、一般市民の生活について調べてましたので……いや嫁扱いマジでやめてくれませんか?」

「驕りが無いの極み過ぎる。魔王ちゃんだけの力がありながら、どれだけ最悪の事態想定してんの」

「人間達の奴隷に堕ちた時ぐらいまで、ですかね」

「王が考えていい次元の想定じゃないやん。魔王ちゃん怖いわー」
「魔帝様に怖いとか言われるとは思いませんでした」

そうこうしてる間に魔帝は食事を終えて空の皿に食器を揃えて乗せる。そして椅子の上で胡座をかきながら、魔王が思案する顔をにこにこ眺めている。

魔帝にとっての魔王とは、可愛い孫娘・面白い子供・見てて飽きないペットの合の子

の様な存在だった。趣味が戦争・蹂躪・破壊という現代では破綻した価値観を持つ魔帝にとつて、その全てが出来ない現状、一番の趣味は魔王で遊ぶ事である。

そして今回の『魔王ちゃんて遊ぼう』のコーナーは、言葉遊びだった。

「……ちよつと変な言い方かも知れませんが……」生命の否定、「ですか?」

「ほつほう。悪くない言い方だね、正解でええよん。ポイント追加ー!」

思案の果てに出した答えを魔帝は肯定する。死なない、イコール命の否定。

命を否定するこそが不死、その答えは一見して矛盾している様に思える。命が潰える事が死なのであれば、命という物を否定する事もまた同義であると見るべきだ。

しかしそれは、観点の一方でしか無い。

「薄々気付いてると思うけど、昔は生命その物を司る神もおつてなー。ソイツに対抗する為に、我生命という概念を捨てたのよ。命が無ければ、そりゃ生死もナツシン。ハツハツハ、死の神が『何故だ、何故死なんのだ!』とか絶叫してたのマジウケたわー」
「私が同じ立場でも叫んでたと思います」

命が無いモノは死なない、誰でもわかる簡単な理屈。それこそが魔帝の不死性だった。

それを聞いた魔王は、顔を顰めながらトーストを口に運ぶ事を再開する。なんかもう、次元が違いすぎて驚く事も投げた。魔帝は文字通り、常識知らずの存在なのだ。

魔帝という強者の秘密から、魔王はあわよくば何か今回の戦争の参考になる事を掴もうと思っていたが、概念レベルの話を連発されてはどうにもならなかった。

「なんか魔王ちゃん冷や汗ダツラダラなトコ悪いけど、どうせだしラストいこつか。不滅」

「……この話、もう良くないですか？ 魔帝様がどうやってても死なないって証明、もうされてませんか？」

「まあ不老不死つての、定命奴の夢らしいし、理想らしいけどねー。我レベルからすれば、不老不死程度じゃ足りんのよ。知りたくない？ 不老不死の弱点」

「……………」

不老不死の弱点。そう言われると、魔王の中で少し興味が湧いた。

勇者は魔帝には遥かに劣るものの、常識から外れた存在だ。いずれは老いるし、死なない訳でも無い。それでも尚、魔族にとって最大の脅威であり、旅の中で成長を続けてきた化物だ。

仮に、億に一つも無いとは思いますが、勇者が不老不死の力でも得たとしたら。それこそ魔王が土下座して軍門に下るか、魔帝の世界崩壊が視野に入ってしまう。

しかしそこに弱点があるなら、対応出来る策があるなら。それを事前に知るのはいかなアドバンテージになるのではないか？

「……不死と不滅の違いって、なんですか……?」

「うんうん、流石によくポイントを理解してる。一瞬でそこに行き着くとは、先生大歓喜や」

「いつ魔帝様は私の先生になったんですか。……ちよつと考えます」

トーストとサラダを遅れて食べ終えた魔王は、二人分の食器を洗浄する自動魔法を起動させ、キッチンへと送ってから再度思考の海に潜る。

一方の魔帝は『こんな下らない話にちゃんと付き合ってくれてなんて魔王ちゃんマジやさしいな』程度の気持ちで、真剣な魔王の様子をにやにやと見ながら、呑気に欠伸をする。

一つのダイニングテーブルの上には、天地程の温度差があった。

「……不老・不死と違う……滅亡の反対、否定……」

不滅。一見して、不老と不死が揃っていればそれだけで存在としては“不滅”だ。

止められない常時最高潮クライマックス、剣や魔法どころの次元に無い永遠の命。古来から多くの者が惹かれてきた、最上級の夢。だが、魔帝はそこに『弱点がある』とハッキリ明言した。

時間の否定、生命の否定。それだけではカバーしきれない、何らかの弱点。それをカバー出来る、何かの否定。

——滅亡しない事。滅亡の否定。滅亡という事象の、言い換えとは。

「……………あつ。そっか」

「結論出すのはっや、有能過ぎん？ 天才はいる、悔しくもなんともないが」

そして二十秒弱の熟慮の末に、魔王は目を見開いて答えに辿り着く。その様子に、魔王は『ほえーマジでやるやんこの子』と、何気に小さく舌を巻いた。

不滅の正体について、弱者という立場の閃きで理解した魔王は——ぶっちゃけ敗戦続きで悲観的になっており、思考力を鍛えねば魔王業しごとやつてられなかった——、副次的にだが不老不死の弱点についても看破する。

「損傷の否定」

「お見事、全問せいかい！ 魔帝ポイントが溜まったその貴女、さあ嫌いなモノを一つ言うがよい……………どんな存在でも、ひとつだけ破滅させてやろう……………」

「史上最悪の神頼み！ 積み立てなきやよかったそんなポイント！」

呟く様に、魔王は答えを漏らした。

そのスピード回答に魔王は喜色満面で、魔王に最悪クラスの提案を持ちかける。それが魔王にとつて、絶対的に求めていない願いと知った上での愉快犯だったが。

「まあ破滅はさておき、ちゃんと答え合わせでもすっつかー」

「置きません。遙か地平の彼方まで捨ておいて下さいそんなモン」

「地平レベルでええんか？ 瞬間移動で拾ってくるで、我」

「異議ありです。瞬間移動が協定で禁止されていると言ったのは魔帝様自身のハズです」

「む、一本取られた。公爵くんからの聴取もバッチリかい」

「魔帝様の情報と供述は一つ残らず覚える事にしてるんですよ。主に世界平和の為に」

一つ一つが洒落にならない魔帝ジョークを、魔王はスッパリと切り捨てる。

魔帝の一言一句、一挙手一投足。存在その物が超厄ネタである以上、魔王は監視にあたり全神経を費やす気概で、魔王の全知全能をフル活用し記憶・記録していた。絶対に漏洩しないよう、自分の頭の中だけに。

それはともかくとして、魔帝は最後の答え——“不滅”について淡々と語り始めた。

「不老不死ってだけじゃホラ、解体バラされちゃったら終わりじゃん？ 不死に頼ってばかりの神を頭だけ奪とって、『神々のサツカー』した事があってなー。あいつら蹴り飛ばすの気持ち良いから、戦争中ちよつと流行ブームったんだよね」

「トンデモ無いですね古代魔族の皆様！ 前々から思っていましたけどが精神性疑うんですけど!？」

「良い奴程早死するって言うじゃん。ま、神共カミは我を相手にしても無駄に生き永らえてたし、そういう意味ではこの言葉矛盾しとるか？ 言葉ってムズカシイねー」

さらに一つ語られる魔帝ズ・エピソードに、魔王は『記憶する』という決意を固めた事を聞いた事を後悔したくなった。聞きとうなかつたそんな話、マジでそう思った。

しかし確かに魔王の言う通り、不老不死は不完全で無敵では無い。老いも死にもしないが、身体が仮にずっと切り離されたりでもすれば、文字通り手も足も出なくなってしまう。

それを利用して、『お前不死なのか、じゃあお前ボールな！』と、神をサッカーボール扱いにするのは本当にどうかと思うのだが。

「つーワケで我は気付いた。傷を含む悪影響^{デパブ}、それすらも克服する。時間・生命・損壊。その全てを超越すれば、我絶対じゃね？ とな」

「……魔帝様が封印されるしか無かつたっていう理由もわかりますね……」

「まあこの三つを完全に備えるのは、神魔戦争でも我と神皇^{クソボケ}ぐらいだつたけどな。他の連中はどれかが不完全で、驕り高ぶつたヤツは皆無様を晒して滅^めつとつたわ」

「滅る」って初めて聞きました、どこの言葉ですか……」

肩を落としながら、魔王は魔帝の絶対性を改めて思い知る。

魔帝が単なる不老不死であれば、今言つた通り全身をバラバラにすれば——それだけの力を持っているかどうかはともかくとして——、殺せはしないが動きは封じられる。しかしあらゆるダメージを受けないとなれば、もうどうしようもない。

不完全な復活により、身体能力その物は一般魔族と化した魔帝であったが、それでも尚勇者が突破出来なかった理由はこの理不尽三原則が未だに健在だったからだった。

「で、話を遙か前に戻すけど。そんなワケで、私の力を抑え込むなんてそうそう出来んのよ。その点魔王ちゃんはマジ天才だと思うぜい？ 全次元スタンディングオベーションや」

「ええ、まあ……その話、作成前に聞いておけばもうちよつと失敗しないで済んだと思います……ああ、思い出したらパーになった魔導素材の合計額をまた思い出しました……うひええ……」

「魔王ちゃんホント“王”っぽく無いよね」

長々と続いた魔帝クイズだったが、その本当の趣旨は“権能アリの魔帝の魔力を抑えた”という魔王の功績に対し、『やはり……天才か』と魔帝が称賛している、という一点に集約する。

ちなみに魔帝が外的な影響を無効化する、という話は魔王にとって今日初めて聞いた話だった。何故なら、この部屋への転居に伴い一般化の指輪を作ると決めた後、魔帝は『眠いんでまた一眠りかますわ』とグースカし始めたからだ。

何人たりとも妨げられぬ爆睡の最中、魔帝は魔道具まどうぐを作っては寝てる魔帝の指に勝手に嵌め、都合七回ミスって心折れそうになりながらも、八回目で成功したという顛末が

あった。

「寝てる魔帝様の圧にすら耐え切れず、一秒でぶっ壊れるのを見た時はマジで『は?』って声出ましたからね……試作とはいえ、あれ作るのも結構お金かかったのに……」

「私の権能を破らぬ限り、お前に勝ち目は無い! ってのが私の決め台詞だった頃が、六・七百年ぐらいあつたぐらいだかんの。すぐ飽きたけど」

「私の人生の倍の期間が滅茶苦茶スピーディーに扱われてますねその逸話」

事実、魔帝の“魔力を抑える”という事は極めて難題だった。存在しているだけで威圧的な大量の魔力を垂れ流す魔帝に対し、魔王は三回目の失敗辺りで一度地面に五体投地を晒した。

魔王は世界最高峰の魔法の使い手であり、要求と素材さえあれば短時間で無からオリジナルの魔道具作成も得意としている。国庫の圧迫を意識する様になってからは、魔道具の作成失敗など有り得ないとばかりに考慮せず、むしろ素材の節約を意識する程余裕があつたレベルだ。

が、素材の糸目も付けずに挑んだ“魔帝の弱体化”は、神々すら破れなかつた権能の前にあえなく失敗をかましまつた。久々の大失敗に、驕りは無いつもりだつた魔王も真面目に凹んだ。主に費用面を気にして。

「実際、どういう効能なん? 正直、なんか抑えられてるーって感じしないんだけど。神

皇の手も入った封印を受けてた身として、魔王ちゃんの婚約指輪エンゲージリングにそんな感覚無いんだけど」

「ちよいちよい嫁そのネタぶつ込んでくるのやめませんか？ ……そりやそーですよ、ソイツに封印だとか抑制の力は一切ありませんので」

「ほほう」

かちやり。キッチンへ運ばれてオートで洗われていた皿の全てが、弱火の魔法で乾かされ棚に戻る。

調理・配膳・洗浄・乾燥。その全てを、術者本人である魔王がクイズに思考を割ける程の手放しでやり終えられる。『一家に一人、マジカル魔王ちゃん！』というキャッチコピーが一瞬魔帝の頭に浮かんだ。

国のトップとしてはあまりにド失礼なレッテルを貼られた事も知らず、魔王は話を続ける。

「ふふん。どうせだし、クイズのし返しといきましょうか。どんなやり方でも抑えられないモノを、どうすれば大人しく出来るでしょうかつ？」

「ギブアップ！」

「はっや!!? 諦めはっや!!? コンマ一秒も考えてないじゃないですか!?!」

魔王の意趣返しを、魔帝は瞬時に投げ捨てた。それはもう、言葉のキャッチボールの

一投目をビンタするが如き諦めの速度だった。

「私の座右の銘の一つは『考えるより壊すが易し』ゆえ、致し方無し。謎掛けの神とかが謎を破らないとダメーじ通らない結果とか張った事あったけど、キレて結界を次元の狭間へダンプして消滅させた事すらあったねー」

「クイズから最も遠ざけた方がいい存在！ さっきまでのクイズはなんだったんですか、好きでやってんじやなかつたんですか！」

「我はね……他者を困らせる事が、たまもなく大好きなんだよ……！」

「そうですねファーストコンタクトから今まで常に困りマックスですよー」

つくづく振り回されるだけの立場である、そう自覚して魔王は机に頭を突っ伏す。

そんな魔王の銀髪を携えた頭頂部を見て、魔帝はけらけらと笑い続けていた。銀髪なら白髪とか生えてもあんまり目立たないんじゃないかな、そう考えるぐらいには魔王への配慮がゼロだった。

「じゃ、答えよろしゅうな。我も少し気にはなってるし」

「……逆の発想です。その指輪は、抑制どころか開放してるんですよ」

「むむっ？」

魔王がのろのと頭を上げ、魔帝をジト目で睨む。

思考を完全に放棄し、答えを言われるのを待つだけの魔帝に対し、魔王は説明した。

「魔力の圧は魔帝様という存在を中心に、近い程強まります。ならいつそ、思いつきり広範囲に力を拡散・霧散させる事にしたんです。その指輪は、いわば魔力の霧吹きみたいな物なんですよ」

「言い方が一気にシヨボクになった。霧吹きて」

「それでも圧が強すぎて、指輪一個だと耐久力に難がありました……まあ、なんとかしました。今の魔帝様の魔力は、この城下町の外に至るまで極めて広範囲に薄く散布される状態です。今の所、『あれ？　なんか最近空気がうまいなあ』程度の影響ですね」

「我、魔王ちゃんも大概だと思おうわ」

抑え込めないなら、いつそ思いつきりバラ撒いてしまえ。鎖を引き千切る程に凶暴な魔犬を解放し、散々暴れさせてストレスを解消させるが如き発想の逆転。それにより魔王は、魔帝の力を間接的に無力化した。

ついでに言えば、魔力を拡散する事で城下町全体の土地的な魔力を底上げするという副産物を付けた。流石に魔帝の力がそのまま全員に宿るといふ訳では無いが、魔族の疲労と魔力の回復速度が向上したり、魔力を必要とする高級家畜や農作物を育てやすくする等、長期的に街の利益となる投資となっている。

戦争ばっかやってた魔帝の永い歴史の中で、こんな事を成し遂げる存在は居なかった。

「相当の素材がオジャンになりましたが、まあ必要経費です……神経をすり減らして魔帝様を城に隠蔽し続ける訳にもいかない以上、魔帝様の一般魔族化は避けられないトコなんで……」

「実際スゲーと思うぜ魔王ちゃん。まさか我をマジで一般魔族として生活させるとは思わなかった。よすよす、やっぱ褒美として人間滅ぼそつか？ 城一個なら指パッチン一発で——」

「あー、きようはおそらがきれいですなー!!」

魔王は魔帝の言葉を叩き斬り、窓の外へ視線を映す。

朝から疲労マックスの魔王とは裏腹に、嫌になる程の青空が広がっていた。

異動時は引き継ぎが肝要

「つか、魔王ちゃんはココにいていいんか？」

「とうとう？」

「魔王ちゃん、王なんやろ？ 我のじやくたい一般人化はともかく、我を幽閉して城で業務に勤しむのがフツーなんじゃない？」

風と水の魔法を微細に調整し、例によつて自動魔法で部屋の掃除を隅々まで行いながら新聞や雑誌に目を通して魔王に対し、魔帝は当然の疑問を投げかけた。

やっている事の高度さに目を瞑ると、やたら魔王は家庭的に魔帝へ尽くしている。が、ここは仮にも“王”が居ていい場所でも、いるべき場所でも無い。

魔王城の中に、肝心の魔王がいない。戦争最前線でブチ暴れてヤンチャしまくつてた魔帝が言うのもなんだが、どう考えてもおかしな事だった。

「その辺は大丈夫です。私はまだ魔王ではないので」

「え、なんやそれ」

そこで魔王は、とんでもない矛盾を孕んだ問題発言をさらりと言う。

『自分は魔王では無い』。しかしこれまでの発言や言動・行動を鑑みると、この魔王が

現魔族の頭目である事は明らかで疑いようが無かった。

「お父様——先代魔王が勇者に撃破された、という話は覚えてますか」

「あー、それで魔王ちゃんが世襲制で魔王になったんやろ？」

「実の所、その事実はまだ公表してません。一般的には、まだお父様が当代の魔王であるという認識なんですよ」

「え、マジ？　なんで？」

魔王はなんでもない事のように、軍事のトップ変更という最大級の問題を隠蔽しているという事をカミングアウトした。

あらゆる全てを破壊で解決してきたウルトラ脳筋である魔帝からしても、その事実にはいくらか疑問が残る。何せ、大将の生死など早々隠し続けられる事では無い。

加えて、最高指揮官不在の中で兵をどの様に納得させ動かすというのか。他にも大小様々な問題があるが、その渦中ド真ん中にいる魔王の顔色は平然としたままだった。

「まず、お父様と勇者の決戦で他の魔族は全員余波で近付けず、決着を見届けた者はごく少数でした。そしてお父様は、勇者とほぼ相打ちに近い形で半死半生になりながらも、魔王城までなんとか生還したんです」

「ほー。やるやん、勇者ちゃんのパワーを浴びた身としては、アレと戦って生き残るのは大したモンやと感心するで」

「まあ、神剣とかいうインチキ武器で受けた傷のせいで、治療の甲斐無く城で息を引き取ったんですが……その時、お父様の最期を見届けたのは私と竜公爵だけだったので」

魔王は特に悲しむ素振りも見せず、肉親の死に様をさつくりと説明する。

感情豊かな魔王が親の死に対し何も思う所が無いとは、デリカシーの欠片も無い魔帝すら信じてはいない。『戦うと決めたなら失う事こそを覚悟する』、ただその信念に殉じているのだろう。

とはいえ、現代道徳ゼロ点の魔帝からすれば『わー立派やなー』と、凄まじく他人事の感想しか抱かなかつたが。

「幸いお父様は勇者に挑みに行く前、念の為『娘を次の魔王と認める』と遺書を残しており、かつ出陣時に“魔王”では無く“大魔将軍”と名乗った為、勇者もお父様が魔王とは気付きませんでした」

「娘を信じて全部を任せたんか。いい親父やったんやなー」

「そしてお父様が死んだ時思いました。“お父様は傷を癒す為に今は臥せてるだけ”と発表しとけば、次期魔王たる私の支持率が充分になるまでの時間が稼げる、と」

「一瞬で打算に塗れた話になったなー」

仮にも親が死んだ時に思う事なのだろうか。ほんの小さな欠片程はある魔帝の常識

が、魔王の迅速かつ打算が過ぎる判断に少しだけ驚いた。

魔帝は圧倒的な力で大体の事を力業で踏み潰してきたが、しかし神々の狡つ辛い手口で足止めされて厄介だと思つた事は何千回もあった。そういう意味では、この魔王の計算的な思考とやり口は神達の生き汚さにダブる物がある。

要は、魔王は魔帝的にあんまり敵に回したくないと思わせるタイプの存在だった。

「という訳で、今の私は現時点”治療に専念するお父様の代理であり、代弁者として執政しているお姫様”という立場です。それでもお父様を出せと言われた時は、私か竜公爵が力づくでブツ飛ばすか、変化で誤魔化します」

「我が言うのもただけど、パワープレイやね。バレないモンなの？」

「私と竜公爵は現状の魔王軍最大戦力です。そして魔族は、基本的に力こそ全てです。納得しない奴も、とりあえず暴力で黙らせればなんとかなります」

「仮にも和平とか望んでる王の台詞なん、それ？」

戦争の決着の仕方を和平と目指している筈の魔王から語られる、手段を選ばぬゴリ押し具合に、魔帝は言葉とは反対に内心で評価を上げていた。

魔帝は自由と混沌を好み、美辞麗句を述べる連中が嫌いだ。故に敵との和平を目指すという最終目的には思う所があるが、魔王の言動と行動には唾棄したくなる善性は感じられなかった。

結果の為に過程を選ばない。正義や感情に振り回されず、現実と利益を見る。そういう真つ当な精神性を、魔帝は何よりも気に入っていた。

「という訳で、城には公爵を置いとけばなんとかなります。公爵も事務仕事は得意なので、緊急性のある物だけ通信してもらえば城は回せます」

「あの書類のジャングルみたいな執務室に公爵くん置いてきたん？」
「致し方のない犠牲です」

「書類のせいで犠牲になる軍のナンバーツとかいう現実の世知辛さよ」

まあ、現魔王軍の悲しすぎる現状を聞いても、魔帝にとつては何処までも他人事は他人事だ。七日に一度しか働かないと契約した魔帝にとつて、その内任せられる仕事以外はいつでもいい。

ふーん、そう。大変だねー。ところで昼食は何？ そういう感覚だった。

「という事で、私が城に常駐する必要は無いです。お父様がバリバリ前線に出てる頃、私は後方で」民の生活に寄り添う優しい姫」というイメージ戦略を取っていたので、城に居ないのも疑問に思われないうしでしょう」

「イメージ戦略って断言しちゃってるよこの子」

「まあ別に百パーセント打算ってワケでも無いので、そこはご愛嬌です。ちゃんと直談判してくる民達の悩みは解決してるので」

その上魔王は、先代魔王時代にも城では無く町にやってくる事が多かった。正直な所、魔王は先代と比べると魔族からの支持が悪かったのだ。

戦闘能力と技量は誰も疑わないのだが、如何せん慎重で穏やかな気性が魔族としてらしくない。魔帝を代表的に、魔族とは基本的に好戦的な種族なのだから。

流石に虐殺や蹂躪を好むのはごく少数だが、魔王軍の兵士達は戦いの中で殺し・殺される事を基本的に肯定している。軍のトップとしては貴重な人材が勝手に死ぬな、という気持ちで一杯なのだが、ともかく後先知らずな思想の者ほど尊ばれている。

そこで魔王は、父が先代時に武威を示している間に地固めをした。兵に好まれないなら、市民からの印象を良くする。これにより魔王は、先代とは異なる方面で魔族達の信頼を得ていた。

「こんな形で役に立つとは思いませんでしたが、そんなワケで魔帝様の自由な生活を許しつつ、私自らの監視も問題なく出来ます。魔帝様としても、代わり映えの無い城内で隠れながら生活するのもイヤでしょう」

「魔王ちゃんの配慮には感謝感激雨霰だぜ。雨霰って単語でまた一個魔法思い出したわ、〃全物質を微塵に切り刻む嵐のクソデカ空間を発生させる〃っていう、宴会芸みたいなヤツだけど……」

「えげつないのはいつもの事として、どんな宴会で使うんですかそんなん」

「兵達が奪ってきた神の首級を放り込んで、ピングオマシーンにするのよ。一番パワーある神を引いたヤツが勝ち」

「ほとほと最悪ですね!!」 冒読「 って言葉すらまるで足りませんよその所業!」

例によつてまるで参考にならない魔帝の大魔法と活用法を知らされる魔王は、心底古代の戦争の恐ろしさに慄いていた。というか、あまりのモラルの無さに頭痛すらしていた。

ツツコミは反射的にしてしまふものの、魔王は魔帝のエピソードにろくなモノが無いのは既に理解している。話を深掘りすると無限に声帯を消耗するともわかった魔王は、話題の軌道修正をする事にした。

「……さて。魔帝様へ求める目下最大の目的を言います。予め言いますが、これは仕事ではありません」

「んむ? 変な言い方やの、なんじやいな」

魔帝は妙な言い回しをする魔王へ、怪訝な顔を向ける。

一方的に結ばれた不平等契約により、魔王は魔帝に対して七日に一日しか労働を指示出来ない。魔帝自身は魔王（むすびにいら）の為に働くのは各かでは無いので、遙か格下の存在からの理不尽な命令であつたとしても受け入れるつもりだ。

が、今回は前置きがおかしい。魔王は魔帝へ何らかの要求をしようとしているが、

仕事ではない」と断言した。魔帝が刻んだ契約魔法は絶対であり、嘘や誤魔化しは効かないにも関わらず、だ。

「七日に一度という制約上、残り六日を魔帝様は一般魔族として過ごさねばなりません。しかし魔帝様が常軌を逸する寝坊助であつても、六日の間じつとし続けるとは私には思えません」

「うむす。封印の時差ポケも少しずつ直つてきたでの、眠気も大分マシになつてきたわ」
 「なので、魔帝様にはある程度ですが一般魔族としての生活態度を身に着けて——というよりは、この時代の生活を知ってもらいます。ということぞ」

こほん。咳払いを一つし、魔王は魔帝に対して告げる。

「前に魔帝様が言った通り。デートしましょう」



「魔王城・城下町なんて言うから、おどろおどろしい精鋭が闊歩してるかと思つたんやけど……ケツコーのんびりした雰囲気やなー、魔王ちゃん」

「マオ」です、「マテイウス」さん。私、一応お忍びで来てるんですからそこ守つて下さい」

そんな事を言いながら、平民の一般着に着替えた魔王と魔帝は並んで城下町を歩いて行く。

マテイウス——呼ばれ方の響きを優先し、魔帝をもじった偽名——は、戦争で絶望的な劣勢に置かれているとは思えない城下町の活気と平穏さに、違和感すら覚えていた。

井戸端会議がちよくちよく見られる住宅街、数々の魔族が行き交う市場、大小様々な規模の武器防具屋、昼間からそれなりの人数が見られる酒場。ぶつちやけ、軍の最大拠点とは到底思えない街並みと雰囲気だった。

「んー、角無いとバランス感覚狂うわー。なーなーマオちゃん、ちよびつとだけでいいから生やしちゃダメー？」

「ダメです。マテイウスさんレベルだと短くても角から格の違いが察されかねません。私も角隠してるんですし、女性に合わせるのは男性の甲斐性だと思いませんか？」

「うえー、そういうの我ニガテだわー。まあマオちゃん可愛いから許すけど」

「光荣です」

“マオ”と“マテイウス”は服だけで無く、変装魔法によつて姿を大きく変えていた。

まず、両者に共通して角が綺麗さっぱり無い。魔族における角とその大きさは、概ね能力の高さに関係する為に、まずこれを隠さない限りは魔帝どころか魔王すら畏怖されてしまう。

次に髪の色も変えた。魔王の輝きを放つ程の銀髪は薄く青みがかつた白に変わって

おり、魔帝の血の様に深みのあつた赤髪は黒っぽくすんでしまっている。

なるべく目立たない様に、かつ自分自身が髪に違和感を覚えないう程度の変色。これは人混みの中に吞まれたとしても、見慣れた髪色で互いを認識出来る様な対策でもある。

最後に、魔帝の額にある第三の眼は特に嚴重に変化を重ねがけた上、鉢金で守られていた。

「まさかテキトーに言っただけなのに、割と真面目にデート出来る町とは。我としては、人魔の屍の山で血のジュースを啜るサ店に行く気持ちだったのに」

「私がマティウスさんに付いていくという判断は間違っていないかつたと今心底ホツとしてます」

「我もマオちゃん侍らせるのは気分良いからワイン・ワインやな。我のかつての嫁達は、どんだけ見た目が良くて油断したら首刈りに来る様な連中ばっかだったし」

「事情は知りませんが、恐らくマティウスさんが全面的に悪かったんだと思います」

てくてくと二人は街並みを見て回る。所々で魔王軍の兵士らしき者が巡回しているのが目に入るが、マティウスの眼には竜公爵の足元にも及ばないレベルの弱者ゴキとしか映らない。

練度も力量も足りない、しかし何よりも緊張感が足りない。魔王や竜公爵が揃って持ち合わせていた、常に危機を警戒しているという様なパリツとした感じが無いのだ。

これは明らかに軍兵としては異常な点だ。マティウスからすれば、『お前それ隕石と降り注ぐ地でも同じ態度取れんの？』って言いたくなる感じだった。

「なんとなく考えている事はわかります。町は、平和でしょう？」

「ドーも落ち着かんぐらいにねー。現実とかわかっていらつしやる？ マオちゃん達が血反吐吐いてるって状況とは思えんぜ、こののんびりさ加減は」

「まあ、ここは私が意図して作り上げた仮初の箱庭ですのぞ」

そう言つてマオは、魔族同士が道の隅で口喧嘩をしている場へ視線を向ける。

わざわざ道の端で口喧嘩をしてるだけ。怒気をぶつけあつてこそいるが、殴り合い・殺し合いを是とする魔族にあるまじき光景。それこそが“魔王”が望み、地道に作り上げた“箱庭”だった。

「私の持論ですが、安全に帰る場所があるというだけで余裕が出来ます。『ああ、この場所に戻って来たいな』、そう思ってくれるだけでも兵達は理性的に行動してくれるんです」

「弱者の理屈やね、戻るよりも蹂躪む方が愉しい我には無縁の気持ちよの。とはいえ、戦えない身になつちやつた以上この町で退屈する事はあんま無さそうで助かるけど」

「あーそうでしょうねーすごいですなーマティウスさんはー」

自分の信念に近い持論を弱者のモノとばっさり切り捨てられたマオは、がつくりと項

垂れる。

しかし何度となく折れてきた心は丸まった背と共にまっすぐ立ち直り、話を続行した。

「平和というのは、表面上にしか存在しないモノです。武力にせよ経済にせよ、時世で形は異なりますが、必ず争いという外殻の中でのみ築かれる小さな庭です。しかし、その庭が良いからこそ護りたいという意志は強固となるのです」

「うわーすげー立派な考えだあ……ごめんねマオちゃん、我一生かかってもその考え理解出来る気せんわ。我、平和とかどーでもいいし」

「……………まあ、はい。個人の思想は自由ですよ、はい」

ダメだ、一般道徳のスタートラインにも立てない。悪びれもせずに平和への思想を真つ向から無視してくるマティウスに対し、マオはそういった思想を伝える事全てを諦めた。

平和主義という思想は魔族にとって基本良くない印象を持たれるも、個々人によって感想は持ち合わせている。しかし“魔帝”は違う。

戦う以外の思想が無い。平和主義という四文字を覚える余地すら無い。あまりに純粋な、濁り一つ無い自然体の闘争快樂主義。それこそが魔帝の本質だった。

ひどい。ひどすぎる。私の苦労とかなんだと思ってるんですか。マオが思ってる事

を全て吐き出したとしても、『やー、メンゴなメンゴ！』で邪気無く笑って流される未来を正確無比に予知してしまったので、ぐつと言葉を呑み込む。唾は苦かった。

「——おつ、マオちゃんじゃん！ よう、今日は休日かい？」

「あはは、私に休日なんてありませんよ……でも、町の様子を見るのは大事ですからね」「つたく、大変だねえ……魔王様が早いとこ完治してくれりや、マオちゃんの負担も減るつてのに」

ガチ凹みしている中、一人の魔族が気安くマオへと声をかけてくる。

三メートル近い巨体と、岩の様な筋肉が服越しにも浮き彫りになっている偉丈夫。背丈以上に長柄の斧を背負っている大鬼^{オーガ}。マオの対極と言える厳つきを持ちながら、その声色は全面的に親しみがあつた。

「……魔王様の具合はどうだい？」

「最悪です。神剣とかいうクソ武器滅べって思うの、百回から数えるのやめました」

「はっはっは、違いねえ！ 俺も一回やり合っただけど、風圧だけで死ぬかと思っただしな！

……勇者マジで死なねえかな……」

あからさまに機嫌を悪くしたマオを見て、大鬼は一瞬だけ殺気を漏らす。が、すぐにそれを引っ込めて溜息をつく。

この一連の光景に、マティウスは平和な町並みを眺めた時以上の違和感を覚えた。

「……兄ちゃんや兄ちゃんや。スルーは我も傷付くぜい、刹那程の寿命でも挨拶は大事よ?」

「ん? おお、悪い悪いニーサン。マオちゃんの連れだつてのに、挨拶もしなかった。許してくれ、名前は?」

「マテイウスよ。おお許すとも、私の心は天空の果てより寛容と言われた事があるのでな! 鏡の中の我にだけど」

「だははは、なんじゃそりゃ! マオちゃん、また変なヤツ引つ掛けてきたなあ!」

心底愉快とばかりに、大鬼はマオの背中をばんばんと手で叩き付ける。が、マオは無言で瞬時に構築した防御魔法陣を背中に貼り付け、暴力にすら等しいその掌をブロックした。

というか、叩いた大鬼の方が顔を歪め、掌を引いた。

「いつでえ……相変わらず手厳しいわ、物理的に。前々から思ってたけど、マオちゃんなんでそれで前線出ねーのよ……人間の城とか余裕でぶつ潰せるだろ?」

「ふふん、そう言われると思つて最前線の拠点はつい先日ぶつ飛ばしてきました。連中、今頃泡吹きながら退却してますよ。ザマーミロです」

「マジかよ、さつすがあ! ……でも反射を瞬時展開するのマジでやめない? 殴った手が一方的に痛いって理不尽だと思つぞ俺」

「貴方はもうちよつと自分の腕力が暴力である事を理解して下さい。巨体の種族以外の他人にそれやったら、今度は“手痛い”じゃ済ませませんよ？」

小柄の為に上目ながらもジト目で睨み付けてくるマオに、大鬼は『こええー』と顔を軽く引き攣らせる。

そこでようやく、マテイウスは理解した。この大鬼は、マオを知っている。

「なー兄ちゃん、もしやマオちゃんの正体とか知ってるん？ 軍関係者？」

「あん？ まさかアンタ、“マオちゃん”について知らんのか。って事は、新入りだな」
「億年ぐらいは寝て過ごしててなー。で、町の案内がてらデートしてもらってるんよ」

「うわー、マジかよ羨ましい。なーマオちゃん、俺ともデートしてくれよー」

「はっはっは、四天王クラスになってからまたお越し下さい」

おちやらかながら純然たる事実だけを述べるマテイウスへ、ジョークとしか受け取っていない大鬼は笑って返す。なお、マオはマテイウスへ『マジでバレないようにして下さいよマジで』と思いつつも満面の笑みをキープしていた。

羨望と呆れの混じった表情で、大鬼は説明を始めた。

「アンタもエスコートされるぐらいなら知らされてると思うけど、マオちゃんが姫様なんてのはずっと前から常識レベルで公然の秘密だよ。いつまで経っても“お忍び”なんてすつとぼけるから、城下町の皆は『あーもうそれでいいよ』って感じになってるけ

ど」

「一応お父様の体面とか私の立場から言つて、公的に“王女”がやってくるなんてダメですからね」

「の割には、俺らの生活にガンガン頭突つ込むじゃんか。おかげで助かつてるけど」

「ここは魔族最大の城下町なんですから、相応の生活はしてもらわんと困ります。つて
いかか私がツツコミ入れざるを得ないトラブル起こすのやめて下さい、だるいので」

「こえーよマオちゃん。マオちゃんの“だるい”はガチで殺傷力あるんだから勘弁だ
ぜ」

実の所、魔王が変装した“マオ”として直々に城下町へやってくるのは、魔帝の封印
を解くよりも遙か以前からやっていた事であり、城下町の名物にすらなっている程だっ
た。

一般市民の生活を知る事、生活の問題を直に見る事、住んでいる魔族達の不平不満。
そういった事柄を観察しては、あくまで姫という立場では無く一魔族として関わる。

変装したお忍びの姫である事がバレるのはすぐだった。が、それ以上に魔王は民達に
真摯に向き合い続けていた為、長い時間がかかったものの結果的に城下町に来ている魔
王は“マオ”として知られ、変装をしている時は本人の希望から“ちよつと高位な魔族
”程度の扱いを受ける様になっていた。

「で、最近そっちはどうです。出回る装備の質とか、傭兵フリールの連中とか」

「マオちゃんのおかげで装備の質は悪くはなっていないが、鍛冶のおやっさん連中は『素材が……素材が足らん……』って泣きそうになってたぜ。姫様の手を煩わせて尚このザマか、つて具合だよ」

「え、マオちゃん鍛冶屋へ何したん？」

「中央製錬所の装置を私直々のモノに改造しました。私の魔道具作成の腕は知ってるでしょう？」

「我が思う百倍はダイレクトに生活に頭突っ込んでいらつしやったこの子」

そして“マオ”として城下町の情報収集を終えれば、今度は“王女”として魔法と魔道具の手腕を民の生活レベル向上にフル投入する。

まず、王族わたしたちを全部当てにするな。必ずそう前置きながらも、マオは魔王軍最大拠点である城下町の明確な問題点にことごとく頭を突っ込み、ともかく片っ端から解決していった。

畑や家畜などの食糧問題は、王族直轄の地を潰してでも確保して農耕用魔道具を量産した。武装を作る大本である製錬施設は、抜本的な改造により運用効率を向上させた。魔族の力量差による生活ギャップの格差問題を、ランク差のある公営集合住宅を各地に作り分断する事で減らした。

それはもう、がつつり干渉していた。タチが悪い事にそういったマオの考えた事業の費用は、マオ本人の私財を多分に投資し、かつ現場監督から完成後の経過まで分身魔法を使つてでもやり遂げる程だった。

大鬼の口からそういった主要事業をつらつらと聞かされたマティウスは、この時代に復活を遂げてから初めて、ついにドン引きという概念を心に抱いてしまった。

「……それで、当てにするな」はムリ無い？　もう全部マオちゃん一人でいいんじゃないかな、つて具合やん」

「それが聞いてくれよマティウスさんよ……マオちゃん、やった事業の経過観察はするけど、さらに手助けを求めたらゴミを見るみたいな顔を見せてくるんだよ……『当てにするな』と言つた筈だ、これ以上甘えるな』つてさあ……」

「無駄な手助けはしません。私は生活の基盤を作るだけで、それを維持するのは民の仕事です」

「マオさんに睨まれたい」とか言うアホもたまに見るんだけど」
「わかりました、次からは笑顔と魔力プレッシャーで処しときましよう」

そう言つてマオは、笑顔を浮かべると共に殺気の籠つた魔力を立ち昇らせる。それは魔帝が見せた全方位への圧力と異なり、自身の周囲の空気に歪んだ陽炎を見せる様なモノだった。

圧を発さず、見せるだけ。輪郭が歪むだけの圧縮された魔力を至近距離で感じ、大鬼はビビって半歩離れ、マティウスは『器用やなこの子』と魔力操作の技量を評価していた。

「大鬼さんがそんだけビビるぐらいなら丁度良いですね。それじゃ、マティウスさんへ町案内の続きをしなきゃいけないので、そろそろ失礼します」

「お、おう……なんだ、その、魔王様によるしくな……」

「ええ。大鬼さんも、あんまり無茶して下さいね。最前線は壊滅させましたが、人間達のしぶとさを舐めちゃダメですよ」

「俺にや勇者と同じぐらいマオちゃんか怖えよ……なんでそれだけの力を持つてそんな謙虚になれるんだ……?」

冷や汗をダラダラと流す大鬼がその場から去るのを、マオはにこやかに手を振って見送る。

気付けば町の住民の視線はマオに集まっている。『あ、またやってる』みたいな、そんな意志が向けられている。その視線の中に、マティウスは“魔王”への畏れが然程含まれていないのを感じていた。

「……ホントにマオちゃん、つぼくねーのなあ……我、一生かかってもその在り方は理解出来る気せんわ……」

「個人の在り方は自由ですのので」

絶対的な暴力を是とする帝。日常的な生活を是とする王。

旧新の時を超えた二人の大將は、絶対的な思想の隔絶を理解しながらも、肩を並べて平和な町中をのんびりと歩いていった。

意図的に職場で波風を立てるな

「——で、どうですマティウスさん？ これで一通りの施設は見て回ったと思います」
「闘技場にぬるぬるのぬるま湯なルールが制定されてるのはビビったわ。タイマン限定・殺害規制・結界アリとか、おままごとやん」

「傭兵達の誇示と、戦闘技術の共有がメインですからね。不死でも無いのに命を賭けられても困るんですよ」

「ちなみに事故つちやつたらどうすんアレ」

「罰金百万Gです。あそこに出るのは所属派閥の無い者が多いので、やらかすヤツは大抵差し押さえを喰らって泣きを見ますね。というか、泣かせます。私が」

それからマオは、半日ほどかけて城下町の主要な施設をマティウスへ紹介していった。

最も人が集う中央市場。魔族の戦士が集う武具商店。賢者が管理する大図書館。生活用品を主として扱う商業施設。本当にあった小綺麗な喫茶店・飲食店通り。

マティウスが少し関心を持ったのは大図書館と、先程立ち寄った魔族の闘技場。しかし、「闘技」と言うにはそれは余りにも制限がありません。

マテイウスとしては、もつと魔族達の頸と血飛沫が弾け飛ぶ大乱闘スラッシュ・アンド・クラッシュャーズを期待していただけに、明確なルールが制定された狭所戦など肩透かしもいい所だった。

「あんまり聞きたくない気持ちもありますが、一応聞いておきます。マテイウスさんが居た時代はどんな感じだったんです？」

「え？ 弱肉強食の二十四時間営業、自分の血は他人の死で洗い流して、死んだら自己蘇生^{リザレク}したり、強制蘇生^{おきあが}らせてサンドバッグにしたり、世界が壊れたらちよつと制覇した神界^{トコ}から次元^{パーツ}くつつけて補修したり——」

「あはは、やっぱ聞いちやいけなかったヤツですね。十秒前の私を殴れ、私」

わかりきっていた文化の違いに、マオは渴いた笑いを浮かべる。その瞳に光は宿っていないかった。

地獄だ。言葉だけで地獄が展開されている。朝から夜が明けたその先でも常に殺し合い、死亡は流血と同じ価値、死者は終わりを否定され続ける。修羅の国は全日フルオープン・満員御礼だ。

マオは一瞬その時代を想像し、瞬時にイメージを放棄する。これ以上考えるのも嫌だったが、一瞬でも考えてしまった事すら嫌だったからだ。

昔は昔、今は今。それでいいでしょ。マオは優れた頭脳全てを駆使し、思考放棄^{にげること}を選

んだ。

「ま、いかにミニチュアサイズとはいえ闘争は闘争、暇がありやまた見に行くかの一……マオちゃん、そんな時はまた入場料頼むわ……」

「いや、金はいくらでも出しますけど……凄いいヒモつばい発言ですね……相応の仕事はしてもらうので、別にそんなへりくだる事は無いんですが……」

マティウスが頭へ下げる姿を、マオは限りなく微妙な顔で見やる。今日の町案内における出費は、当然の事ながら全てマオの財布から出されたものだった。

復活したばかりのマティウスが金を持つている筈も無い。が、“魔帝”は勇者の撤退という誰にも出来ない仕事を成し遂げており、金銭の出費など気にする必要は一つたりとも無い。

そんな偉大な存在が、女に金をせびっている。しかし魔帝の存在を公表出来ない以上、その有り様は正しい。実態と現状の乖離に、全ての元凶たるマオはなんとも言えずにいた。

「そういうえば、大図書館にも興味持っていましたよね。なんか意外です」

「フツ、情報も戦いの内に入るからね……スマン方便だわ。我は暴力に関しては全知全能だったし、こうして限定復活でもせん限りは興味ゼロスポットだったわ」

「知ってます、知ってました。だから意外って言うてんです」

まあ一般レベルの金銭のやり取りで済み、かつマティウス自身がそこまで体面を気にしていないので、その問題は無視しても良い。

それよりも、闘技場はともかく図書館に対してマティウスが興味を見せた事が意外中の意外だった。本人も認める通り、“魔帝”としての彼は純粹なる暴力の化身としか思えない。

そんな人種が図書館で本を求めると、『意外な一面』という一言で納得するのはマオにとつては難しかった。つていうか何の裏があるのか、と勘繰っていた。

「マオちゃんをやつてる魔法とか、勇者ちゃん達の力とか。ドーも、私の時代と随分体系や生態が変わつてゐるみたいだからのー。ドーせ我は戦えないんだからこの際、億年ぶりに読書とかいう時間効率の悪い趣味に手を出すのもアリかなつて」

「全読書家を敵に回す発言やめませんか？ 愛書家の一人としてちよつと怒りますよ」

「スマン我つて無敵だから『敵に回す』つて言葉わからんわ」
「いつそ清々しい程に凄まじく高位の無反省！」

はっはっは。いつも通り頭を抱えるマオを笑いながらも、マティウスの言葉に嘘は無かった。

この時代の魔法は、魔帝時代のモノとは根本的に異なる。起こす規模で言えば圧倒的に古代の方が強いのは間違いないが、自動魔法などという婉曲な技術は存在しなかつ

た。そんな事するぐらいなら分身と加速を重ねて連続して詠唱しろ、って感じだった。加えて、原則この時代には“詠唱”が無い。かつての魔法は長つたらしい詠唱が必要であり、実の所くっそ面倒だった。敵に『こいつ何言ってるんだ』と思わせる程のレベルの早口と滑舌が求められていた。

最も大きな違いは、人間その物だ。あまりにも強すぎる。魔帝視線からすれば全て等価値の強弱ではあるが、その能力はかつて滅ぼした人族とは雲泥の差だった。

まあ、退屈凌ぎのテーマにはなるやろ。その程度のモチベーションだったが、絶対的な力を持つ存在からの興味がゼロでは無いというだけでマオが驚くには十分な事だった。

「さて、そろそろ日も暮れますし帰りますか。当分の食材も買い込みましたからね」

「ほーい。……あ」

「ん、どうしました？」

「——そうやなあーっ！ 帰るかマオちゃんっ！ 我と！ 一緒に！ 住む！ 愛の巣にっ！」

「なんて事しやがんですかこの野郎!!」

すぱーん、とマオがマティウスの後頭部をぶつ叩く。発言の直後コンマ秒でマティウスの言葉の意図は裏まで理解した、しかしその判断は残念ながらコンマ単位ですら遅す

ぎた。

周囲の魔族全てがこちらを見て、目を見開き唾然としていた。野郎、なんて事考えやがる。マオは互いの上下関係を忘れる程に、マテイウス本日最大の爆弾発言へ怒りを抱いた。

“マオ”が王女であるのは公然の事実だ。それと同棲していると高々に叫ぶなど、たとえ酒に酔った出任せだろうが有り得ない。一応変装している事で一般魔族である以上不敬にはならないが、マオを強く支持し過ぎている住民からの私刑すら考えられるからだ。

が、叫んだ男はその蛮行をやつてのけ、隣に立つ肝心のマオ本人も殴つただけで否定していない。有り体に言つて、この光景は男の発言を事実と認めているのと同義だ。

(——誤魔化しは出来ない。完全な嘘と言ひ包めようとすればむしろ真実味を後押しする。そもそも発言を確かめるべく、私達が共に帰る姿を追ってくる者がいるなら、“私が嘘をついてまで隠そうとした”という行為その物が牙を剥く)

刹那。マオの思考だけを残し、世界の時が止まる。光の速度で回る思考の車輪が、世界を置き去りとしていた。

ここは最大の分岐点だ。“マオ”がマテイウスと同居している事など、いずれ割れる事だ。戦争の避難民として案内し、面倒を見ている。それが本来想定していた一時凌ぎ

だったが、この監視生活を続けるならいずれボロは出ただろう。

しかし、いつそ本当に親しい関係であると見せるのも当然問題だ。王女と気兼ねなく同居する者など、次期魔王のポジションを王女が認めていると取られかねない。多くの者がそう邪推する事は確定だろう。

（——遠縁の親戚……ダメだ、”なら強い魔族なんだろう”と兵士や傭兵に取られ詮索される。そもそも、魔王軍がここまで攻め込まれているにも関わらず、今まで手を貸してこなかった親戚などおかしい）

回る。回る。止まった時の中で、”魔王”は独り動き続ける。保身、ただその為だけに。

切羽詰まった時の魔王の思考速度は、あらゆる魔族をぶつちぎりで超越している。慕っていた父が死んだ時には、自分が魔王就任時の支持率を上げる事を真っ先に考えた。魔王の制御が不可能と見るや、瀕死の重傷を負っているながら速やかに隠蔽する方針を確定させた。

あらゆる可能性を思索し、駄目な考えは即時に棄てゆく。瞬時にして入った極度の集中状態の中で、冷静な思考は全速を保ち続ける。

須臾の入る余地すら許さぬこの時だけ、魔王は自己保身の世界の頂点に立っていた。

（——軍関係者、アウト。兵へ紹介する事になる。避難民、アウト。これだけ元気な避難

民などいない。無言で去る、一番アウト。これまで全ての可能性を個々人に邪推される)

一つ一つ、言い訳が思考の自重で潰れていく。その度にむしろ魔王の頭は軽くなつていった。

八方塞がり、状況は最悪。しかしそんな事は、勇者を相手にしている現状とならら変わりない。どれだけ絶望の淵に追い詰められようと、関係無い。結局やるかやらないか、それしか道は無い。

どんな関係であつたとしても、マオとマティウスという二人が勘繰られる。ならばどうする。

——ならば。まともな言い逃れが出来ないなら、そのまともを棄てるだけだ。

「えい」

「えつ」

瞬間。マオは、マティウスの腹に神速の手刀をぶち込み、背中まで貫通させた。

(“不滅”を切つて下さい)

(え、いいけど)

続けて、ギリギリ聞こえる程の指示を届け。マオが腕を引き、手刀がマティウスの体内に留まる程度にまで戻される。

ブチ抜かれているマテイウスの背中から、夥しい程の血が飛び出し始めた。

「……あつはつは！ やだなあマテイウスさん、いくら戦争後遺症の人でも、言っている事と悪い事はあるんですよ？ まあ、やさしいマオちゃんは許してあげますけどね！」

満面の笑顔を見せつけながら、マオは先程大鬼を気圧した殺気の蜃気楼を立ち昇らせつつ、腹部を抉り取っているマテイウスへフレンドリーに話しかける。

マテイウスを『戦争で疲れて狂った人』と婉曲的に言いながら、並の魔族なら致命的となるボディブローを埋め込み続ける。マオの殺意に満ち溢れた所業に、周りからの注目の色が一瞬にして恐怖に染まった。

(少し痛かった、って顔して下さい)

(ほーい)

そしてマオが魔法陣をマテイウスの腹部へ展開し、腕を身体から引き抜く。腕一本分貫通した重傷は、マオ自身の治癒魔法で瞬く間に治された。

合わせてマテイウスは、あいててー、と胡散臭い演技をする。が、その大根に等しい演技はマオの殺気と治癒魔法の速度に気を取られ、傍からはあまり目立たなかった。

「……はあ。全く、あまり変な事言わないで下さい。これでも私、結構強い魔族なんですよ。」

「あーメンゴメンゴ。……まで怒ると思わなかったわ、ちよつとしたジョークだったん

や

「マテイウスさんは町に来たばかりで知らないから仕方無いですね。だから面倒見えてあげてるんですから、今回はこれで手打ちにしといてあげます」

腕と道に散らされドロドロにへばり付いたマテイウスの出血を、直ちに水魔法で浄化して真水にしながらマオはそう言つてのける。

城下町にやつてきたばかりで“王女”を知らない狂人を、公開処刑一歩手前の所業によつて咎める。暴力を基本的に肯定する魔族にのみ通じる、全力全壊のハツタリ。それがマオの取つた手段だった。

「それじゃ、最後にハイムへ案内します。全く、面倒見るのは最初だけなんですから、早く一人で生活出来るようになって下さいね？」

その上で、最初から同居しているとは言わない。あくまで短期間だけの手助け、緊急措置と観衆に思わせる。殺害一歩手前のインパクトで注意が最大に達している今の内に、話を一気呵成に重ねる事で周囲の思考の余地を奪う。

その場全員の思考が戦慄で停止している間に、マオは踵を返してマテイウスをハイム方向へと連れて行く。その場の後に残つたのは、今しがたの光景に対する畏怖の静寂のみだった。



「……ふう。とにかく、凌げましたか」

「やるやんマオちゃん、流石に想定外の対応だったわ。顔真っ赤にして恥じらいながら『ちがいますちがいますちがいますー!』って反応を期待してたんやけどなー」

「知っていますかマテイウスさん。人は追い詰められすぎると一周して冷静になるし、弱者はそこでさらに手段を選ばなくなるんです」

普段は温厚な王女による魔族の大半殺し。その惨劇に対してその場に立ち会った住民達が遅れて反応し始め、俄に沸き立つ騒ぎに吸われる様に大通りの魔族達がそちらへ向かっていく。

自然と道から人気が薄れ、周りに誰も居ないのを見やってからマオは大きく溜息を吐いた。

「はっはっは、戦争後遺症と来たかー。あながち間違いないってのが中々芸術点高いやん、我じゃ無けりやガチギレ案件よ? あそこに戦争後遺症の方が实际いりや、お気持ちモンやん」

「あの一瞬、私は止まった時の中で周囲の魔族を全員確認しました。あの場に最前線から戻ってきた兵士は無し、重傷を負った経験のある傭兵もいません」

「どういう空間把握能力を發揮してん? ってか、住んでる魔族の事全員知ってるん?」
「何の為に私が町に降りて来てると思ってるんですか。前々から住んでいる民の事な

ど、全て記憶しています。名を覚えるというのは、想像以上に好印象なんですよ？」
魔王のスペックを戦闘以外にフル活用しているマオを、マティウスが愉快そうに笑う。

事実、マティウスは戦争で狂った魔族なのは現代的には確かだ。破壊と殺戮を好悪を超えた当然の常識として考え、存在しない戦争内での自分の活躍を訴え、来た場所は不確かな新住人。

成程、これは狂人と言われても仕方無い。マティウスは凄まじく不当にして不名誉な称号を取得しながらも、面白くて仕方無いとばかりに笑い続けていた。

ちよつと癩癩を起こせば世界を滅ぼす。そんな存在であるとこの世の誰よりも把握しているにも関わらず、命知らずなギリギリのラインまで踏み込んでくる。こんな面白い存在は、恐らく現世で魔王しかないだろう。

それすら自覚している。魔帝が魔王を滅ぼせば、この世界で唯一自分を愉しませる玩具もが無くなる。その感情を知った上で、マオはここまで踏み込んだ発言をしていた。「すごい貶しちやつたのは申し訳無いとは思っています。しかし、今回の事で逆にマティウスさんはどんな事を言っても『あ、こいつホラ吹いてんだな』という発言の自由を得た筈です」

「あーなるほど、それを強く印象付ける為にあんな騒ぎになるレベルまでキレた風に見

せたんか。マオちゃん、我のカミングアウトから秒でそこまで考えたのん？」

「不自然な点もあったでしょうが、咄嗟の考えとしてはベターだと思いましたので」

「うーむ判断スピードの極み。褒めて遣わそう、うりうり」

「ちよ、撫で回さないで下さい！ 髪が乱れるじゃないですか！」

「うりうりうりうり」

背丈の差を利用し、マティウスは上から一方的にマオを撫で回す。背丈的に丁度マティウスの肩の高さにマオの頭があるので、めちやくちや撫でやすかった。

マティウスによる魔帝スケールの発言は、常識から破綻というか破滅しているレベルだが、本人的には一切嘘を言っていない。平然と価値観の違いをわざわざポロポロ零し、言い直す気はカケラ程も持っていない。

しかしそこに“戦争の被害者”という肩書を上書きし、あの現場に居た者がそれを噂で伝達していけば。魔帝のトンデモ発言全ての真実味が薄まり、狂人の戯言として流される事となる。

とびっきりの悪意いたずらの効力を、瞬時に切り返して逆転させた。成程、これは“王”だ。自分とは全く別方向の傑物で、かつ面白く可愛らしいこの“弱者”は、この時を以て魔帝時代を含めたトップクラスのお気に入りに見做された。

「やった後に言うのもなんですが、痛みは大丈夫でした？」

「まあほぼ確信してたと思うけど、我基本痛みは百パーカットしてるから無問題よ。あ、“不滅”を切って傷を作って出血させるのは上手い発想やったね。ちばちば」

「朝の“不老”の説明で、時間を無効化出来るって聞いた時から、権能は任意に限定出来ると考えていましたので、そうなるだろうとは思ってました。真面目にクイズ答えておいて良かったです」

勇者どころか神々の攻撃に対しても傷一つ負わず、血一つ流さなかった相手に傷を負わせる。その唯一の方法は、マテイウス本人に傷を許させる、という事だ。

権能によるあらゆる対外の絶対否定を、本人が失くす。“不滅”を失くせば、同時に損傷の否定“が消えて傷を与える事が出来る。

そして“不死”がある限り、魔帝は何をされようが死ぬ事が無い。腹では無く心臓をブチ抜いた所で、余裕で生き残っていただろう。つくづく酷い能力だったが、今回はそれに助けられた。

「ちなみに血が出なかつたらどうするつもりだったん？」

「考えていませんでしたが、恐らく炎で焼いて傷口を塞ぎつつ、治癒しながら拷問するみたいな形になったと思います」

「はっはっは、外道やん」

「マテイウスさん程じゃないです」

ふふっ。アドリブでその場を凌ぐ事に必死にされ、完全に疲れ切っていたマオはいつそ笑いが込み上げてきていた。

もうさっさと帰ったら寝たい、そう思うレベルだった。しかしマティウスは欠片も家事が出来ない以上、帰った後の家事はやり遂げなければならぬ。

おかしい、私一応魔王なのに。確かに一般魔族として暮らせる様にと想定はしていたが、立场上伴侶を得るつもりも、相手がここまでロクデナシとも考えていなかった。

時に現実には想像を超越する。戦争内で常に“最悪”を想定し続けてきた身ではあったが、まさかこんな方向の“最悪”があるとは思っていなかった。

これ私後世で伝説になってもいいでしょ。しかし魔帝の存在を隠蔽しなければならぬ以上、語られぬ事も無い物語なのだろう。嗚呼、なんて悲しい、なんて切ない――。

「あ、晩メシなにー?」

「狼猪ポリアの肉巻き、彼岸櫻アビスフルールの根と葉の煮込みスープ、銀シャリです」

「新婚一発目なんだしもつとバーつと行こうぜい? つてか、最後のは文字通り銀の米なの?」

「白米です。白米は銀より重しです。私の夕食は米類、例えそれは神にも変える事能わずです」

「なにその信念」

それはそれとして、マオは揺るがぬ食事への信念を抱き、二人で帰宅した。

現場は上が思う以上に忙しい

「——め下さい、マティウスさん。どうかお目覚めくださいーい」

「ん……むむ……」

「早く起きないと、朝ごはん冷めちゃいますよー。あつためなおすのイヤなんですけどー」

マオによるマティウスの町案内から翌日。変化の魔法を解かないまま、二人は朝を迎えていた。

時間は住宅街前の大通りを人々が当たり前の様に行き交い、完全に平時の活気が付いた頃。率直に言って、世間一般的には寝坊と言える時間帯。

マティウスの眠るベッドの傍に立ち、エプロン姿のマオは両手に持ったフライパンとおたまでカンカンと金属音を立て、覚醒を促していた。

「ふふ、こういう朝のやり取りやつてみたかったですよねー。絵巻とかでは一般的家庭の姿らしいですし。ほらほら、徐々に強くしていきますよー」

微笑みながら、マオはフライパンを叩き続ける。そもそもマオは自動魔法によつて食材も道具も触らずに済む為、これらは未だ使われる予定すら無いまっさらな新品の物

だった。

ここに買っておいてあるのは億万分、那由多に一つほどの確率でマティウスが自分から料理をしたいと心変わりをした時に備えて。そしてマオ自身が庶民の生活に憧れ、形だけでも生活用品を買ったからである。

ぶつちやけ、一般家庭のなりきりグッズでしかなかった。

「ほーらほーら、直で殴っても痛覚が無いんなら、聴覚へ訴えるまでですよ。さつさと起きた起きたー」

「んむ、ぐ、ぬぬう……」

カンカンカンカン。時と共に、おたまはより強いビートを刻んでいく。

マティウスは放っておけば、日単位で寝る。別に寝たまま放っておいても良い——というか放っておく方が世界の為ではあるのだが、今日はそうはいかない。

“仕事”がある。元々先延ばしに出来ず、しかし一週間に一度しか働かないという制約故に後回しにせざるを得なかった喫緊の仕事が。

「……んー」

「あ、起きましたか。すみません、今日ばかりは起きてもらわないと——」

「うりゃ」

「へ」

それに応え、マティウスは起きる。

同時に、マオの胸を両手で鷲掴んだ。

「……んむんむ。なるほどなるほど。ほうほう」

「……………」

もにもに。むにむに。

寝ぼけ眼の瞼を少しずつ開きながら、マティウスは真顔で得心する様に揉み続ける。

マオはお玉とフライパンを手に構えたまま、完全に硬直していた。

「……うむ！ やっぱ、若いモンはええな！」

「きいえあぁーッ!!」

刹那、マオの瞬速の右膝がマティウスの顎を打ち上げ、跳ねた頭を神速の左踵が地へ叩き伏せた。



「あーたーらしいー朝がきつたー」

「私はこんな朝など希望してませんでしたかねっ！」

「己が欲望を世界に求めるとは、傲慢とは思わんかね……」

「個人に欲望を押し付けるのもどうかと思いますかねえっ?!」

額に青筋を浮かべたマオは、あまりにもいつも通りすぎるマティウスの言葉に対して

いつもの三倍は險しく力強いツツコミを挟んでいく。

逆寝起きドツキリでやられた堂々が過ぎるセクハラに、マオは用意した朝食を温め直さず、むしろ氷で凍結させシャーベット状にした上でマティウスに出していた。

文字通りの冷や飯を与えられたマティウスであったが、そんな怒りを意にも介する事無く、むしろその反応すら愉悦とばかりにけらけらと笑って朝食だった氷ものを食べていた。

「もう、もうっ！ 信っじられませんが、ほんと！ デリカシーとか無いんですか！」

「我らの時代で求められるのは『死デスか死』だったよ？」

「今の私にはわかりますねその気持ち！ ちよつと死んでくれませんかマティウスさん！」

「ええよ、“不死”切ればいいんだよね？ さあマオちゃん、キミは“不滅”が活きてる我を殺し切れるかな……？」

「ああああもおお!!」

ああ言えばこう言う、ああ殺そうとすればこう生きる。絶対無敵・厚顔無恥・逍遙自在。その言葉の筆頭主席とすら言うべきマティウスと対面しつつ、マオは頭を抱えながら机を肘で叩いた。

ハッキリ言って、マオはセクハラというモノに無縁な人種だった。魔族という種族的

には人族よりも遥かに荒くれな産まれでありながら、先代魔王・及びその幹部周りには人格者が多く、自然と育つ環境は穏やかな物だったからだ。

しかしお忍びで街に降りてから初期、自分がまだ王女とバレていなかった頃は厄介な人間を引き寄せた。魔王城直下という立地には、相応の実力と自信を備えつつも普通な性格の悪い連中はごまんといる。

そんな中やってくる、王女にも近い容姿を持つ女。鴨が葱と鍋と火を背負ってやってきた、当時の無頼漢達は皆そう思った。そう思い、実際行動した。

「別にええやんこんぐらいのスキンシップ。ちよつとぐらいサービスシーンしてもええやーん」

「同じ事を抜かしてきた魔族はこの町にもいましたよ。そいつら残らず全員蹴り飛ばしましたけどね……ついさっきマティウスさんにやってみたのにつ！」

「綺麗な脚やったねえ」

「流れる様にセクハラを重ねないで下さいもっかい蹴り穿ちますよ！」

マティウスはすつとぼけながら、自身を床に打ち付けた凶器である脚について、その威力を除いた感想を述べる。並の魔族であれば撲殺必死の力を見せたその脚が染み一つ無いモノだった事を、魔帝アイは見逃していなかった。

そう。“マオ”は遥か昔、今朝とほぼ同じ事をしてきたのだ。城下町の市民達へ邪な

行為に及び、かつそう手出し出来ない力量を併せ持つ無頼漢。それらに対してマオは自分自身を撒き餌として吸い寄せ、全員残らず地に蹴り伏せたのである。

マオは魔法に特化した魔族だ。が、その長所は『魔法さえ封じてしまえば良い』という弱点も生む。故に当時の魔王と幹部陣は、英才教育でその弱点を克服させようとした。

その内の一つが、マオ自身の格闘能力だった。

「マオちゃん、魔法寄りやと思つとつたけど殴り合いもイケるんやね。我は徒手格闘とかいう非効率的な戦闘とか久しくやつとらんから、新鮮やわ」

「……………はあ。魔法封じの対策として、幼少期から最低限素手でも自衛出来るようにと、当時の將軍から格闘術を学ばされたんです。あんまり好きじゃないんですけどね」
魔法が強い、なら魔法を封じればいい。魔法を封じられた、なら力で殴ればいいじゃない。極めてシンプルかつ魔族的に最高に頭の良い暴力的な理屈で、マオは格闘術を学んだ。

しかし「最低限」と言つたマオの認識は、半分間違いだつた。マオの足技は、当時の城下町に闊歩していた腕自慢の悪漢の大半を魔法抜きで叩きのめす程の練度を誇る。

お嬢さんちよつと二人きりの所に行こうや。良いですよ、では痛い目見て下さい。この一連の流れはもはやテンプレートの如く行われ、悪漢達は誰も知らない路地で土砂を

味わう。

これらのエピソードは既に“暴れん坊王女様”というシリーズ物の絵物語に描かれる程有名であり、『悪いことをしたら王女様に蹴り飛ばされますよ』と子育ての常套句となる程だった。

「まあマオちゃんは誇つてもええやろ、当時はパンチ一発で星を真つ二つに割る遊びとかもあつたけど、あの時代はパワーばつかでテクは磨かれんかったからな。確かな積み重ねを感じるいい蹴りやつたで」

「セクハラして蹴り飛ばされて床舐めておきながら、良くそこまでいけしやあしやあと人を褒められますね！ 誇つてもいいですよ！ その無神経さー！」

「まあ痛覚切つてるし神経無いと言つても過言じゃないかもなん。上手いこと言うね、座布団一枚ある？」

「ふんー！」

『その減らず口を潰す』、殺意にも等しい純粹な怒気。その発露と同時にマオは、机に乗り上げ・付けた両手を軸に回転し・マティウスの顔面の下部分を蹴り穿ち・勢いのまま机を離れ床に降りる。その四動作を、一息一言すら許さぬ一瞬で終える。

一秒後に残つたのは、“不滅”によつて傷一つ無くにこにこ笑顔を保ち続けるマティウスと、『まあわかつてた』という諦念を顔に浮かべたマオのファイティングポーズだけ

だった。

「うーん速い。今の我、動体視力はまあまあ残ってるけど身体能力はひつুকいからなあ。ギリ視えても反応出来んわー、まあブロックする気も必要性も最初から無いけど」

「……私は今……冷静さを欠こうとしています……」

「はっはっは、メンゴメンゴ。そんな怒らんでや、カワイイ子は笑顔が一番よ」

「その笑顔を奪ったのはマテイウスさんですけどね!？」

はあ。溜息一つ零して気持ちを整理しながら、振り払えきれない暗い気持ちをマオは抱えて再び着席する。

こういった流れを以て、これまでマオに対するセクハラ・及び邪気を孕んだ行為は大體マオが足を振れば解決していた。ついでに言えば、暴れん坊時代に培った邪気センサーによって、そういった思考が自分へ向けられるだけでマオは即座に反応出来る。

しかし、今朝のマテイウスに邪な気持ちは無かった。『したいからする』、そんな子供の如き無邪気な邪気に対しては、流石にマオは反応出来ない。というか、セクハラを下心の予兆すら見せず実行する存在そのものが異常だ。

もうやだこの人。割と本気でマオは、マテイウスの持つ“魔帝”という次元最高峰の肩書を忘れて嫌悪を隠さないようになっていた。

「まあ朝コミュは……までにして。マオちゃん、今日はどしたん。基本的に私の眠りを

妨げないスタンスなのに、セクハラされてまで起こしに来るとか」

「好きでセクハラされたみたいない言い分やめてくれませんか!? 蹴っ飛ばしても蹴っ飛ばしても、私の怒りが収まらないんですがっ!」

「我の事なら、いくらでも蹴るといいよ……それで、マオちゃんの気が収まるな」

「ふんす!!」

言葉が結ばれる前に、予備動作無し of 音速のドロップキックがダイニングの宙空を突き抜ける。その過程にあつたマティウスの上半身は一瞬消し飛び、しかし瞬く間も無くその体は元通りに再生し———というか、すり抜けたとしか思えない程にそこに在り続けた。

着地直後に反転し残心の構えを取ったマオは、その馬鹿げた再生速度を視認すら出来ない。無駄とわかっていてもやった、しかし残るのは敗北感すら感じない“無”の徒労感。

勇者もコレを体感したのだろうと考えると、敵ながら同情の念をマオは覚えた。塵芥レベルで。

「マオちゃん、もういい?」

「……わかりました。もういいです」

『もう気分は良くなったかな』。『はい、もうどうでもいいです。全く同じ言葉は限り

ない温度の違いを以て交錯し、マオの本懐をまるで遂げる事も出来ぬまま霧散した。

マオはマティウスの対面の椅子へ戻る。その瞳に、今を生きる命の煌めきは無かった。

「よし、本題やね。わざわざマオちゃんが起こすぐらいだ、今日は久々のお仕事デーかい？」

「……ええ、はい。本当は即刻取り掛かるべき仕事だったんですが、制約やすみもありますし……マティウスさんが一般生活を知る事はある種、魔族存続の最優先事項でしたので……」

“仕事”の単語と共に、マオの死んでいた思考が切り替わり、瞳に力が戻る。

こんな事なら割と本気で起こしたくなかった、そんなマオの気持ちを“魔王”は遥か彼方に追いやる。ここからは、魔族の平和の為に働く王の時間だ。

「……現状の再確認をします。勇者達は既に、魔王城が見える所までやってきていました。しかしマティウス——いえ、魔帝様のおかげで撤退に追い込み、最前線の人間軍も撤退中です」

「お、なんや仕事ん時は名前は言い換えるんか。ええね、こういうマジモードのスイッチっほいやり取り。……我らが魔王よ、次はいかなるお考えで……？」

「あの、切り替えたのを一瞬で茶化さないでくれませんか？ ちよつとぐらいマジモード

維持出来ません?」

「愚問だな、我が王よ……我魔帝ぞ?」

「あーはいそうですね、魔帝様は魔帝様でしたねー」

マオとマティウスは、その意識を“魔王”と“魔帝”へと変わる。といつても、本人達の自称する認識が変わるだけで、間柄ややり取りが変化する事はカケラも無い。

現状、魔王軍と人間軍の大勢は然程変化していない。勇者と軍の最前線を撤退させた事は大きい、結局の所これは一時的な物であり、時間を置けば再び勇者達が進軍してくる事は変わらない。

「現状、勇者を止められるのは魔帝様を投下する肉盾戦法のみです。勇者達が前線から引いている間、他の人間の軍事拠点に攻撃を仕掛ける事で戦線ラインを下げさせる事は出来ません……が、こちらから上げる事も出来ません」

「魔王ちゃんと公爵くんが城から離れられないから、だっけ?」

「そうです。四天王格の幹部が一人でも残ってさえいれば話が違つたんですが……先代魔王・及び四天王の内三人は死にました。竜公爵が四天王最後の一人です」

「最後の一人”って響き良いよね。我も昔は”終焉おわりの一人”とか称されてたらしいよ、喰つた神の記憶あたまからそう聞いた」

「意味合いが天地開闢程に差があるものと思われれます」

問題は、魔王軍の深刻な戦力不足による進退の自由の利かなさにある。

主要戦力たる四天王は、かつて勇者達一行に対し自らの軍勢を連れて対峙した。結果だけ見れば愚か極まりない事に、四天王達は共同路線を取らず『自分とその手勢だけで立ち向かいたい』と挑み、そして各個撃破されてしまったのだ。

空輸・空爆という重要性を持ち、かつ現魔王の侍従という独自の立ち位置を持つ竜公爵・及びそれが率いる竜人師団は、前線に出る事はあまり無かった為に未だ本格的には交戦していない。しかしそれでも、勇者と偶然接敵した部隊は残らず壊滅させられてきた。

結論。竜公爵とその師団が居なくなれば、その時点で“魔王軍”は壊滅だ。

「そして戦力不足を補うべく、魔帝様を復活させましたが……本人を前にして言うべき事でもありませんが、結果的には失敗でした。魔帝様は前に出せず、防衛戦力としても不安定だからです」

「おいおいおい、ヒドいぜー魔王ちゃん。我、勇者でも幾万の大軍でも止めろって言われたらちゃんブロックするぜー？ フンフンフンフン」

「明確な対処法の存在する防衛戦力などアテに出来るワケないでしょ」

「え、マジ？ 我つて対処出来るの？」

「まあ私視点からすればの話で、人間側あつちがその手に気付く事はそう無いでしょうけど」

そして魔王は突貫工事の最終防衛ラインとして、魔帝を勇者へ当てた。これにより勇者は、現時点で突破不能の推定魔王のこれ以上無い挑発を受けながら軍ごと撤退するという、最大級の屈辱と敗北感を受けた、という形になっている。

しかし、この無敵という言葉に理不尽という衣を纏いながらへらへらと笑い続ける防衛ラインには、人間側からすれば到底信じ得ない致命的な欠陥があった。

「前にも言いましたが、魔帝様は七日に一日しか働いてくれません。つまり私が魔帝様に仕事を命じた翌日以降、六日以内に勇者が強行軍でこの城まで辿り着けばそれでジ・エンドです」

「おいおい、いくら仕事外だからって我は魔王ちゃん達を簡単に見捨てたりしないぜ？」
「では聞きますが。仮に城まで勇者が辿り着き私達を殺そうとした時、魔帝様はどう助けてくれますか？」

「え。とりあえず、なんかテキトーな事して塵一つ残さず消滅させるけど……」

「範囲は？」

「……あー、この城下町ぐらいなら覆って余りあるかなー」

「ジ・エンドです」

あつ、そつかあ。呑気に魔帝がそう呟くのを見て、魔王はがっくりと肩を落とす。

そう。止められない勇者を唯一止める事の出来るこの防衛ラインは、特大の自爆ス

イツチでもある。それも、うっかり独りでにポチっと動いてしまう勇者以上に止める事の出来ない存在だ。

魔王は魔帝という駒を、一度は動かせる。しかし一度動かした後、続けて動かせない。その上、その駒の攻撃性能はゼロか世界破滅ワールドゼロの二つしか無い。

つまるところ、その日の運が良ければ勇者達はこの最終防衛ラインを素通り出来るのだ。

「さらに我々の負け筋はもう一つあります」

「マジかよ、私の対処手段二つもあんの。自分で言うのもアレだけど、七日に一日の私の労働権を勇者ちゃんに来るまで保留にしようときやえんちやうん？」

そしてこの魔帝という存在の性質は、さらにもう一つの負け筋を孕んでいた。

七日の内の六日を必死に凌ぎ切る、あるいは魔帝を完全に待機させて勇者の進軍に当てる。この二つのどちらかが成立すれば、勇者の前に魔帝を出す事は出来る。

制約が重すぎるとはいえ、この二つの方針を取れば魔帝という鬼札を切る事自体は容易だ。しかし、そこまでなのだ。

『あれ、これ相手しなくてもよくない？』そう気付かれてしまうのが、最大にして最悪の負け筋です」

「……………あー」

言われて、魔帝は気付く。確かにこれは、魔王側の視点では絶大な欠点だった。

確かに魔帝は七日中六日を寝て遊んで過ごす為、その間は勇者は動き放題だ。しかしその実働出来る一日とて、魔帝に出来る事は何も無いのだ。

魔帝が勇者達へ出来るのは、ただ目の前で突っ立ってお喋りする程度だ。攻撃しか能のない魔帝が動いた場合、やはり例によって超特大の自爆スイッチが起動する。

前回撤退に追い込んだ時も、魔帝自身は何もしていない。魔王と竜公爵が同時に動く事であろうと、魔帝という次元最大の虚仮威^{ハッカリ}に“絶対に倒せない魔王”というシールを貼り付けて宣伝しただけなのだ。

魔王はそれを知りすぎる程に知っており、人間達はそれを全く知らない。もし知れば、勇者は魔帝を倒す事を完全に無視・放置し、城を制圧して国を滅ぼす事を選ぶだろう。

たとえ魔王一人が生き延びていようが、敵の本拠地が滅んでさえしまえば、この戦争という対局においては勝利と言っているのだから。

「魔王である私の仕事は、この二つの事実を必死こいて隠蔽して勇者の侵攻を留め、この敗色濃厚一番搾りの如き戦争を泥沼化させ、互いの勝ち負けをうやむやにして一時的な和平をなんとか掴み取る事です。あとはもう、どうにでもなれって感じですよ」

「目的地として凄まじく曖昧な軍事目標やね。そりやまあ反発食らうワケだよ」

「この思想を直接的に伝えているのは竜公爵のみですが、民達も私が薄々人間達への復

讐や征服を第一として考えていない、というのは気付き始めています。その辺の心証も今必死で誤魔化してますけど。例としては先日のお点空爆とかで」

はあああ。溜息を大きく、いつもの二倍は長く吐いて魔王は肩を落とす。

先代魔王は人間達との戦争に勝利する気で動いていたし、四天王を含む大多数の魔族も生體的に弱者である人間達を制してやろうという気に満ち満ちていた。

しかし、当代魔王は既にそんな気は無い。真つ向勝負で勇者に勝てない、軍力も武装の近代化によって工学的に追い越された。

あ、これ負けますね。そう悟ったからこそ、魔王は小規模の軍兵を運用しての各地ゲリラ戦で、人間軍の侵攻の妨害・遅延に徹してきたのだ。

敵を斃すのでは無く、敵の邪魔をする。『あくまで先代魔王の傷が癒えるまで』という題目で魔王はそう命じてきたが、その目標が限りなく消極的で魔族の思想・感情に反しており、そんな魔王の姿勢を問題視する声も徐々にだが大きくなっているのは事実だった。

「……長々と話しましたのでまとめます。今は人間達を一時的に騙してるだけで、人間達がいつでも魔王軍を滅ぼせる状況なのは変わってません。なので、なんとか騙し切る為に手を尽くさねばなりません」

「いやー、マジで大変だねえ魔王ちゃん達。ぶっちゃけ我、こんな追い込まれた状況とか

知らんから逆に面白いわ。我産まれた時から最強だったから。はっはっは」

「あははっ、マジで大変すぎて魔帝様のその顔面もつかい蹴っ飛ばしたいぐらいですよ」

「蹴りたいなら蹴ってもええよ？」

「蹴っても無駄なのでやりません」

さあカマン。言葉にせずとも表情に瞭然と書いてある様なそのニヤケ面に怒りが再沸騰し、魔王は足が飛び出そうとするのを理性によつてギリギリ統御する。

一時的に得た仮初の猶予。これを、戦争の終結という未だあやふやなモノが形となるまで引き伸ばす。その為に、魔王は次策たる“仕事”を練っていた。

「朝から世知辛さのオンパレードみたいな話だったけど……改めて、そんな状況で我へ頼む仕事って何よ？ 勇者ちゃん達にもつかい会いに行つてカマセ、とかそんな単純な話じゃないやろ？」

「魔帝様をダシに攻撃するには、事情を唯一知る私と公爵がセットで動かねばなりません。遠くへと撤退中の軍・及び随伴しているだろう勇者へ追撃するには、城が空きすぎる。執務室の書類の処理によつて公爵は動けない現状、そこまでの遠出は出来ません」

「軍事と事務が同価値で真横に並ばされてるのスゲー哀しいね」

なんか魔王ちゃんいつも書類書類言つてんな。そう思いながら、魔帝は次の仕事が皆目検討もつかずにいた。

魔王の言い分から客観的に鑑みて、自分は本当に運用し辛い駒だ。暴れ回る事しか知らない魔帝の戦争観では、こんな劣勢の状態を凌ぐ方法などわかる筈も無い。

なんかもうめんどくせーなー。ぜんぶ壊せばよくないかなー。魔王へ抱く愛玩の念が無ければ、とつくに魔帝は地上の半分ぐらい雑に滅ぼしていただろうという程度には、現状をかつたるく思っていた。

「ええ、まあ……内容が内容なので、ちよつと言ひ辛い仕事だったんですが。今朝の魔帝様の態度を見て、迷いは無くなりました」

「ほえ？」

少し歯切れの悪い言い方をしながらも、最後は締めた口調で魔王が告げる。

今朝の態度？　なんかしたつけ我？　既に魔帝は自分が魔王に対し、今朝何をやらかしてどう思われたかすらアウトオブ眼中といった具合の、極めて間抜けな相槌を打ち。

「では、魔帝様。土の肥やしになって下さい」

「ええよ」

全く意味も意図も分からないオーダーを、魔帝はまるで考える事無くとりあえず了承した。

基礎工事こそ最優先すべき

「——と、いう事で。ここが私達魔族の實質最後の砦である、千年樹海」です」

少し早めの昼食を終え、数時間後。魔王と魔帝は、魔王城より離れた谷の先——広大な樹海の手前に居た。

“千年樹海”。千年の間、ただそこに在り続けるだけで外敵の突破を許さなかつた事から名付けられた、大自然の要塞である。

ちなみに千年より遙か前には一度外敵の突破があつたとかそんな事は無い。単純に樹海が出来てから千年を超えた当時の魔族達が『キリがいいし響きも良いから』千年樹海」と名付けよう』とし、それから名前を誰も変えてないだけで、正しく言えばこの樹海の名前は“千年+α樹海”となる。

「巨大な魔法植物の数々、地上最大級の魔獣や魔蟲達、正常な思考を惑わす濃霧。城への明確な道筋は一部の高位魔族の口伝にしか存在せず、人間側からはここが唯一の侵攻ルートです」

「……あー、スゴイ場所ってのはわかるんだけどさー、魔王ちやーん」

広く深い谷底にある一本道、抜けた先で高く聳え立つ何十メートルにも及ぶ高さの

木々の群れ。その樹木達の隙間を満たす様に漂い続ける、限りなく白く濁った霧。

先を見通す事など不可能な、そんな樹海の入口で——魔王の横にいる魔帝は、浮いたままぐるぐるとスクリュー回転していた。させられていた。

「なんで我はビンゴマシーンみたいにされてん？ ブオンブオンぶん回されるコレも仕事なん？」

「単に私のストレス発散でぶん回してるだけです。ちよつと胸が空くので」

昼に城下町を出た二人は、人目が付かない所から魔王は風魔法によつて飛翔。そして樹海上方スレスレをすつ飛ぶ事で、この樹海の道順と性質を完全に無視して魔帝を連れてきた。

が、その運送過程から今に至るまで。魔帝は魔王の風魔法のドームに閉じ込められ、その中で螺旋回転させられていた。体の上下左右が浮遊しながら何度もひっくり返るその姿は、この地上に存在する全てのボールよりも強烈なスピンを描いていた。

「まーだ朝の事根に持つてるん？ ほらほら、切り替えていこうぜ？ いくらなんでも、このままじゃ仕事にならんやろ」

「……三半規管に特に変化も無さそうですね。その辺もダメージとみなされる、と。覚えしました」

「ぬわす」

魔王が指を弾き、魔帝を封じ込める風のスクリュー結界が解かれる。直後、魔帝は足がギリギリ届かなかった低空から落下し、背中を強打した。

城下町を出てから数時間続いた乱回転を終えても、魔帝の顔色はまるで変化していない。魔王としては外傷で無ければ少しは嫌がらせダメーになると思っていたが、そのアテは外れて少し残念だった。

ほぼ拷問じみた事を、数時間続ける。それを終えても尚気が晴れない程度には、魔王は朝のセクハラについてキレ続けていた。穏やかな心を持ちながら、その内に激しい怒りを渦巻かせていた。

「あいてて。痛みとか感じないけど、あいてて。……ほむほむ、確かに立派な木々だねえ。こういうのを見ると、高周波次元ブレードメガデイメンジョンでまつさらサラサラにしたくない？」

「もう響きからしてろくでもない魔法な感じしますね」

「うむ、聞かせてしんぜよう。アレは世界の次元を微塵切りにする斬撃を多重に——」
「わかりました。もういいです」

バツサリ。魔帝が自慢げに世界破壊バリエーションの一つを紹介しようとするのを、魔王は切り捨てる。取り付く島を、その端すら見るまでも無く切り捨てる。

聞いてないし聞く必要も感じない。何が悲しくて自爆スイッチの種類をさらに記憶しなきゃならないのか。魔帝としてはかわいい子孫に自分の長所を一つでも多くア

ピールしたいのだが、そんなモノは魔王としては頭痛を加速させる種をバラ撒かれるに等しい事だった。

「ちえー、そっけないなーもー。……それで、このデートスポットと言うには余りにもクソデカすぎるこんな場所で何すん我？」

「朝言つた事を復唱しますが、現状最大の問題は〃魔族側は勇者を止める手段が無い〃、この一点にあります」

「……んー……っーか。なーなー、魔王ちゃん」

立ち上がった魔王は両手を後頭部で組み、魔王へ問いかける。魔王は腕組みをし、魔帝と向き合った。

勇者に勝てない、止められない。耳にタコが出来る程に聞かされ、魔帝の中ではもはや現世における常識とすら認識されつつある、魔族が現在直面しているどうしようもない現実。

この事について、魔帝は今に至るまで少し疑問に思っている事がある。

「魔王ちゃんはいつつも〃終戦〃とか〃和平〃とか言つてつけどさー。最前線の勇者ちゃん無視して、後ろの人間の国全部滅ぼしやそれでええんちゃうん？ 最強を無視して本拠地を落とすつてやり方、そっくりそのまま魔族サイドの勝ち筋やん」

あっけらかんと、魔帝は人間達を滅ぼすシンプル極まりない提案を出す。

魔族の負け筋は、魔帝というハリボテの防衛線は無視される事。しかしその戦術は、人間側にも適用される筈だ。

竜公爵に乗って魔王が上空から攻撃をするやり方は、手口を知られてしまえばその内対策される。しかし対策する時間的な猶予を与えず、竜公爵の取れる最高速度で人間達の国へと飛び回って空爆していけば、人間の国のあらかたは壊滅させられる。そういう、単純に最速な暴論。

魔族サイドが勇者を倒せない様に、人間サイドも勇者無しでは魔王を倒す事は出来ない。勇者と魔王、互いの力量を実際に見た魔帝は、そういった認識を持っていた。

「残念ながら、魔族による空襲戦法は遙か昔よりあつた戦術でして。私ほどの大出力・大規模なモノではありませんが、人間側は何度もそれを受けて学習してきました」

「あ、スゲー嫌な滑り出し。めっちゃ魔王ちゃんが頭抱えてそう案件の気配」

「お察しが早くて助かります。人間達の主要な大国は、既に空襲の備えを済ませてるんです」

“魔王を倒せるのは勇者だけ”、その魔帝の認識は極めて正しい。

だが魔王を耐えるだけなら、今の人間達は可能だった。これまで他の魔族達によって何度も空中から一方的に攻撃される内に、人間達は空襲という手出しが出来ない——しかし、言ってしまうえばワンパターンな攻撃への対処を覚えてしまったのだ。

魔法の予兆を感じする探知機。生半な魔法を弾く素材と加工で築かれた砦や城。弱い竜ならそのまま撃ち落とせる程の威力と射程を持つ高射砲。迎撃装置を護る結界や魔術師部隊。

人間達の万全の防衛体制を偵察で知った当時の魔王は、頭を抱えた。魔王ですら一国落とすのに時間がかかる、かかりすぎてしまう。情報を低めに見積もった上での魔王の結論がそれだった。

「人間達の強みは、その強さを技術工学テックノロジーで共有出来る事にあります。敵ながら天晴と思いい、私はそのやり口をパクる事で城下町の文化レベルを底上げしてきました」

『『パクる』って断言しちゃったよこの子。『敵から学ぶ事はある』とか、なんかそういう言い回しで誤魔化さないの？ 王的に』

「軍力も文明も、全て負けている事は百も承知です。それを恥とは思いますが、拘って滅びるより百万倍マシですよ」

そして、人間達の大国達は規模に比例して鉄壁の要塞と化した。国々は全てが友好関係と言えずとも、共通の敵たる魔族への防衛技術は積極的に共有していった。

ぶつちやけると、国や城を一個ぶつ飛ばしても代わりがいくらでもいるのだ。それどころか、戦線を上げる為に造られた拠点ですら、高位魔族の空襲への備えが出来ている文化水準にまで達している。

主要戦術が潰されている現状、勇者を抜きにしても魔族は攻めに転じられない。空は迎撃され、陸は勇者が蹂躪してやってくる。文字通り、今の天下は人間達のモノだった。「という事で、私達魔族が空から出来るのは人間達の偵察ぐらいです。拠点に近付きすぎれば迎撃されますが、距離を取って遠眼鏡を使えば動きは把握出来ますからね」「パワーでパワーを捻じ伏せてきた、我ら魔族のプライドがどこにも見当たらないのう……どつか落としてきちゃった？ 魔王ちゃん」

「落とすというか、墮とされましたからね。プライドごと」

という事で、魔王は空の優勢を全て偵察に回し、勇者・及び人間軍の侵攻状況の把握のみに徹するよう魔王軍へ命令している。

これまで魔族は、一方的に攻撃出来る事に一種の快楽を覚えていた。それ故、いかに王女からの命令と言えど、ただ黙って見ているという指令に現状ストレスを感じている。

万能ワード『魔王わうさまが復活するまで』で一時的に我慢させている状態ではあるが、もはや空から一方的に攻められる程度では足りないのだ。

足りないという事を理解出来ないままだったから、こうして滅びようとしている。魔王は、他のどの魔族よりもその時流を実感し、自戒している。現状を、後悔している。「ほれほれ、またなんか響めつ面になつとるで。もー魔王ちゃんはマジメちゃんなんだ

から、王なんてドツシリ構えて笑つとくモンやで。例えその先に幾億の屍を積むとしても」

「破滅的な励ましを有難うございます。お礼に、魔帝様にはここで肥料になつてもらいます構いませんね？」

「お、それぞれ。朝から思つとつたけど、我今から何されんのん？ 新生活始まつて二日目で生き埋めにされん？ ウケる」

どこまでも他人事に笑う魔帝に、血管を浮かべながらも満面の笑顔を魔王は返す。

ここに來た理由、本題。“土の肥やし”、“肥料”。朝と今言われた、魔王からの謎すぎる命令。魔王のストレス値を散々チャージした回り道の果てに、話題はそこへと戻つてきた。

「まあ、半分はそうです。こちらを御覧下さい」

そう言いながら、魔王は自分の懐からガラス珠を取り出して魔帝へ見せた。

珠の内側には、現代の魔法陣に使われている文字が上下左右にビツシリと描かれている。そして中央には上下に分割する割れ目が存在し、その中にぽつんと小さな植物の種が入れられていた。

「なにそのガラスボール？ 呪物かなんか？」

「説明はやりながらで十分でしょう。少しお待ちを」

魔王は珠を左手に持ち、右手で魔法陣を展開する。陣の展開から一秒で、その表面から空気の渦が放出され始めた。

それを魔王が自分の手前、樹海の地面へ向ける。すると、陣の先から生んだ空気の渦が大きく・細く・鋭く・長く。流れる様に形状が変わり、ゆつくりと地面にぶつけられる。

限りなく細い、竜巻のドリル。それが、大地の深くを目指して穿孔し始めた。

「^{ユグドラシル}世界樹というモノがあります。この世界で最も大きく、魔力を宿した樹です。魔帝様の時代には、そういうのありましたか？」

「デカイ樹ってーと、次元と次元を繋げる概念の樹ってのは神界で見たかなー。その樹を斬り落とさないと次元が壊れないって感じのヤツで、我も初見はビビったなー」

「……今回ばかりは、その狂った昔話が少し役に立ちそうですね」

「おん？」

『昔は良かった』では済まされないクソデカ昔話に対し、いつも通りのツツコミが飛んでこない事に魔帝は話題が盛大にスベった様な印象を受けてしまう。

古代と現代のジェネレーションギャップによる魔王の反応。すっかり一つの楽しみとしていたそれがやってこない。魔帝がほんのちよつと残念がっている間、昔話をスルーした張本人たる魔王は淡々と地面を空気で抉り続けていた。

ざりざり、がりがりがり、ごりごりごりごり。どこまで掘る気なのか、第三者である魔帝にはさっぱり検討も付かない程、ドリル音が淡々とその場に響き続ける。

「この珠の中にあるのは世界樹の種子、その一つです。昔から世界樹は世界最大の栄養源を持つ植物として人間と魔族で取り合い、その大半は戦争の中で焼かれた挙げ句、残った一部は人間の国の管理下にあります」

「ほーん、えらい貴重^{レア}っぽいやん」

「実際貴重です。コレは種とはいえ、今や魔族の持つ唯一の世界樹なので」

そこまで話した所で、ようやく魔王の右手のドリルが掻き消える。魔王の目の前には、掌程のちっぽけな直径でありながら深淵のごとく深い穴が出来ていた。

魔帝の視線が魔王のガラス珠の中にある種と、たつた今穿たれた用途不明の細穴を行き来する。魔族全体にとって超貴重なこの種、魔法文字が描かれているガラス珠、魔王が掘った縦穴、連れて来られた魔帝^{じぶん}。この全てが、何かに繋がっている——と、魔帝は考えすらしていなかった。

話を聞きながら、ぼけーっと見やるだけ。どうせ暴力を振るうしか能のない自分に、魔王ちゃんの考えなんかわからん。ならもう考えんのやめて流れに流されていこー。

魔帝は今、完全なる思考放棄の境地に居た。

「では、魔帝様。〃不滅〃ナシで」

「お、つてコトは……ほい、失くしたで」

「つせいー！」

魔帝が権能の一つを放棄する、瞬間魔王が魔帝の胸の中央を右の掌底でブチ抜く。

腹部では無く、胸を——心臓を。本来誰であろうと、即座に致命傷となる一撃。魔王は骨ごと、魔帝の心臓をその通り驚掴みにして背中へと摘出した。

「フウー死んだー！　まあ死なんけど我！　……あれ、なんかデジャ・ヴー」

「ふぬー！」

そのまま魔王は、掴んだ心臓を風穴の空いた胸から引き抜いて手元にする。

肉体から千切れて尚鼓動を刻んでいる、不死の心臓。それが魔王の掌の内のモノとなった。

「もう“不滅”戻していいですよ、魔帝様」

「ヒドイ、我のカラダが目当てだったのね……！　我の心を弄んでっ……！」

「まあ酷いのは確かですが、罪悪感がカケラも湧きませんね。弄ぶのも間違いないですし」

そして魔帝の傷が瞬時に掻き消え、魔王が握っている心臓以外の全てが無かった事になる。しくしくと声だけの嘘泣きを見せる魔帝から、魔王はしれっと視線を切り、掌の心臓を握り潰した。

魔王の手から心臓の肉片と血が撒き散らされ、残るのは成れの果てだけ。そして魔王は器用にも左手の親指だけでガラス珠の上下を小さく開き、かつて心臓だった残りカスを中へと入れる。

かつて工芸作品の様に透明だった珠の内側が、放り込まれた肉と血でドス黒く染まる。それを魔王は、ゴミの様にぼいっと目の前の穴へと投棄した。

「ではちよつと離れましょうか。魔帝様、こつちへ」

「それより魔王ちゃん、城下町でやった時より我への殺意高くなかった？　ねえねえ今ガチで殺す気だった？　そんな殺気ぶつけられちゃ、我ちよつとワクワクしちゃうやん」

「捨てて下さいそんなワクワク。絶対地獄が湧く湧くだけでしよう」

「はっはっは」

「あっはっは」

血塗れの殺意に満ちたブラックジョークを交わしつつ、魔王達は樹海から離れるように歩く。事実、さっきの魔王は今朝の苛立ちを少しでもスッキリする為に、純粹なる殺意を込めた渾身の右ストレートでハートキャッチしていた。

もはや致命傷のやり取りが雑談のタネにしかなくなってない。そんなイカれた状況にまともな言葉をつツコむ役は、もはやこの場に存在していなかった。

「話の続きです。あのガラス珠に描いたのは私特製の魔法文プログラムで、その効果の内の一つが
“世界樹の種を莫大な魔力によって強制的に成長させる”というモノです」

「私の心臓をあゝの種に与えて育てる、と。」「肥やし」ってそういう事かー」

「ええ、魔帝様はそこに在るだけで魔力を垂れ流してますからね。その心臓ともなれば、
一部でも十分すぎる程の大量の魔力よっぶんになつてくれます」

魔王の説明に、魔帝はようやく今回における自分の役割を理解した。

世界樹の強制的な覚醒と成長。その為の、魔帝じびんという養分の塊。完全に魔王からモノ
扱いとされている魔帝は、いつそ清々しい気分だった。

自分の孫に贈り物をする、そんな感覚。子孫とか残す暇があるなら神々を破壊する事
で愉しんでいた魔帝にとつて、自分から何かを与えるというのは新鮮で良い心地だっ
た。その内実は心臓をぶち抜かれて目の前で潰されるという鬼畜な所業であったが。

「ん、『効果の一つ』？　なんか追加攻撃とかするん？」

「……あながち的外れでもありませんね、その表現。さて、これだけ離れば十分ですか
ね」

百メートル以上は悠に離れて、魔王は樹海の——世界樹の種を投げ入れた穴の方へと
振り返る。魔帝も明らかに途中である魔王の話の続きを楽しみにしつつ、魔王の動きに
追従する。

その時。魔王達のいる地面が、地響きと共に揺れ始めた。

「あの珠のプログラムには成長を促す部分と、成長した後の部分の二つがあります。ただの世界樹一本だけではどうにもならない状況なので、少々細工をしました」

「ほほうー？ ……お、すつげえ揺れる。我浮くわ」

「あ、魔帝様、私も掴まっていいですか？ 魔力勿体無いですし」

「やったーそのワガママボディを存分にハグハグ出来るー！」

「わかりました、自力で浮きます」

魔帝がウキウキと浮き上がるのを見て、前言を完全撤回した魔王も風魔法で低空を飛ぶ。そうしている内に、地震は肥大化して地が割れ始めた。

加速度的に地震が大きくなる。地面の罅が四方八方へと広がり、割れゆく大地が隆起していく。浮遊していなければ誰もがその場に留まる事すら出来ないだろう、それ程の地震——その直後。

天を衝く如き勢いで、大木が地面から急速に伸び上がった。

「うおでつか……！ 我の破壊欲が疼くわあ……どうしよ、何で破壊しよつか……！」

「ぶん殴りますよ魔帝様。たとえなんの意味が無くてもぶん殴りますよ。コレ、急拵えとはいえ私達の最終兵器なんですから」

雲まで届いている、そんな錯覚すら覚える程の高さ。十分に離れた筈の魔王達のすぐ

手前にまで至る、圧倒的な太さ。

肥沃な大地で何千年もの時を経てようやく至れる筈の、世界樹の成木。それが魔帝の心臓という最大級の養分と、魔王の高度な魔法技術によって、たった一時で産まれさせられた。

「最終兵器？ このクソデカツリーが？ 何破壊すんのコレで」

「まず話題を破壊から一刻も早くリリースしてくれませんか？ コレは防衛装置なんですから」

「んん？」

防衛。ろくに覚えの無いその概念だが、いかに素人以下の魔帝目線でもそれがこの大木に当て嵌まるとはあまり思えない言葉だった。

確かに目の前の世界樹は、千年樹海のどの木よりも遥かに高く聳え立っている。だが大きいだけでは軍や勇者は止められる訳も無い。いかに樹海の入口を塞ぐ程巨大であつても、勇者や軍が力づくで攻撃すれば迂回するだけのスペースは十分に作れるのだから。

「さっき言った通り、あの樹には成長した後の機能^{プログラム}を仕込みました。ざっくり言つてしまえば、決められた範囲内に人間が侵入した場合、あの樹が自動的に攻撃するという物です」

「おー、立ってるだけで攻撃してくれとか便利やん。どんな風に攻撃するん？ めっちゃ気になるわ、魔帝的に」

「期待してる所悪いですけど、流石の私でも植物なんて思考力の無いモノにはあんまり複雑な設定は出来ませんよ？ せいぜい木の葉を飛ばしたり、枝で敵を捕まえて——」

そんな説明をしている最中。魔王の上から、枝が降ってきた。

「えっ」

「おっ」

世界樹の上方から高速で伸び落ちて来た枝は、魔王の胴に巻き付き。

「——ひえあああ——ッ!?!」

がっしりと捕まえた魔王を、一瞬で上空へと誘拐した。

咄嗟のアドリブにこそ本質が出る

「い、んのおっ！」

世界樹の太い枝によつて両腕ごと上半身を拘束され、魔王は上空へ連れ去られる様に飛翔させられる。その最中、魔王は急ぎ指先だけで魔法陣を描いた。

焦熱の魔法。魔法の速度だけを意識して発動した、物の一部だけを焦がし尽くす魔法。それが魔王を捕まえている枝の背中に回っている部分だけを、火を発さず一瞬で消滅させる。

その枝が再生し始めた。

「想定以上です。ねチキショーツ！」

全力で悪態をつきながら、しかし魔王は速やかに次の行動へ移る。

再生しきつた枝がまた自分を拘束し直してくる、その確定している未来より早く、速く。魔王は両腕に力を入れて広げ、左右に絡む枝に肘を打ち込んで拘束から逃れた。

魔王が宙から落ち始めると同時に、枝が虚空を締め上げる。しかしその場で締められた枝は、その場で形状を丸まった木の塊へ変えていく。

大木槌ハンマー。枝の塊が魔王に向けて振り被る、その前兆を見た瞬間に魔王は次の行動を決

めた。

「燃え尽きやあーっ！」

自由になつた両腕で、自分の身体より大きい魔法陣を描く。紅い円陣より、魔王の全力が込められた業火が放たれた。

火山の噴火を思わせる火炎の津波が木槌を一瞬で焼き尽くし、枝の全てを焦がし、その根本である世界樹本体にまで届く。

雄大な世界樹に焦熱の風穴が開き、そこから火が延焼して走り——掻き消える。

樹木の表面へ広がろうとしていた火も。炎で開いた黒い風穴も。その全てが瞬く間に再生し、再び魔王を拘束しようとしていた火も。炎で開いた黒い風穴も。その全てが瞬く間に再生し、再び魔王を拘束しようとしていた火も。炎で開いた黒い風穴も。その全てが瞬く間

それを見た魔王は、今撃った魔法と同レベルの全力で舌打ちした。ここまでとは思わなかつた。

「この、くの、こつ、なつ——こいつうーっ!!」

氷の槍で枝を貫き、凍らせる。再生される。

風の刃で枝を裂き、吹き飛ばす。再生される。

岩の壁を枝に当て、粉碎する。再生される。

雷の鎖で枝を縛り、消滅させる。再生される。

半ばヤケクソとなっている世界最強の魔法使いのやる事なす事、それら全てが一拍置

けば無に帰していった。ひたすら枝の破壊と再生が繰り返され、魔王は空から墜ちてゆく。

（——ああ、ちやんと無理ですね）

魔王は一つの諦めを覚え、自分を執拗に追ってくる枝に対し両腕を下ろし、魔法陣を消す。

迎撃が無くなった枝は、空気の膜をブチ抜く様な速度で魔王の体に目掛けて飛び掛かった。

「魔王っ、舐めんなあーっ！」

その枝が体を捉えるギリギリの刹那、魔王は枝を足裏で全力で蹴り飛ばす。

これ以上無く引き付けての、渾身のカウンターヤクザキック。枝を蹴った反動により、魔王は迫り来る驚異より爆発的に逃れる落下速度を得た。

「うおおっしやらあああいつ！」

魔王どころか女である事も忘れた迫真の叫びを上げつつ、魔王は真下へ墜落しながらも優れた体幹コントロールと魔法法の併せ技で、自分に強引な宙返りを打たせる。

温い空気を肌を感じる。地上が近い。極限状態における魔王の自己防衛本能は、すぐさま自分の体に防御魔法を・両手に風魔法を即座に構築した。

「ふぬぐおあつ！——魔帝様無事ですか！」

「うむす。ええもん見せてもらつとるでー。……あ、これセクハラとかじゃなくて魔王ちゃんの見事な暴力っぷりを褒め——」

「狙われてないならいいです！」

落下。同時、爪先・脛・尻・背・肩。体を捻り地面に倒れ込み衝撃を分散する、五点着地法。

防御魔法で着地点の肉体をピンポイントで強化し、左手の風魔法で全身を捻るアシストによつてそれを完璧に成功させて見せた魔王は、魔王が上空誘拐されてから一ミリも動いていない魔帝の姿を見て、ひとまずは安心した。そしてちよつとイラつとした。

しかし息を入れる間も無く、魔王が蹴つても一切勢いを衰えなかつた木の槍が降ってくる。

「遅いッー！」

しかし魔王は倒れ込んでからすぐに風に乗つて側転し、既に立ち上がっている。側転を助ける左手の横風の勢いをむしろ強めながら魔王は跳び、自身を掴もうとした枝の側面へ飛び回し蹴りを打ち込んだ。

人間の胴よりも太い枝へ爪先をめり込ませたまま、魔王は蹴りの勢いによつて自分への軌道を僅かに逸しながら、その枝先を地面へと叩き込む。それにより、枝の穂先は地割れの一角へ埋められた。

『螺旋断空脚』。魔王の全身全霊を込めた脚が、世界最大の樹を上回った瞬間である。

「離脱します、失礼しますね！」

「お——」

受け流した枝が再度魔王を狙って地から突き上がろうとしている、それより早く魔王は右手に待機させていた風を解放した。

自身を後方へと吹き飛ばすジェット噴射。途中で魔帝の体を引つ掴み、魔王は爆速でその場を離脱した。



「——ふうっ！ はあつ、はあつ……！ この距離なら、流石に大丈夫、の筈……っ！」

「うわー魔王ちゃん腕すつべすべ」

「ふん！」

「フウー我死んだー！」

枝が自分に追ってくるよりも遥かに速いスピードで、魔王は世界樹から大きく距離を——巨大な世界樹が細く見える程に遠い場所まで、異常などと言える程の間合いを取った。

枝はやってこない。代わりに引つ掴んでる魔帝が自分の腕を撫でてくる。反射的に魔王は、真円に腕を回して振り払うと同時に魔帝の顔面をブチ抜く。

『陰陽反転拳』^{デス・ワインド}。魔王の全ストレスを込めた裏拳が、次元最大の帝を上回った瞬間である。

まあ、それよりも短い刹那で最初から無かった事の如く再生されたが。

「……はあく。や、やばかったあ……ちよつとこれは、想像外、でしたね……」

「人間が侵入してきた時に自動攻撃」、だっけ？　魔王ちゃん実は人間だった説出ちやっただかー」

「魔王の家系は何千年も続いてますけど、徹底的な純血主義なんでそれは有り得ません。……しかし、これは……」

深呼吸を終えた魔王と、この期に及んでぼけーつとしている魔帝が、世界樹の様なモノを遠くから眺める。

それは世界樹というにはあまりにも禍々しすぎた。樹木全体はドス黒く、樹皮は血管の如く脈打っている。それはまさに、世界樹では無かった。っていうかこの世のモノと思えない程に見た目が凶悪だった。

文化的観点が純粹悪たる魔帝としては、すごい綺麗に育ったねーって感じだったが。

「魔帝様の力を甘く見ちゃいましたね……ほんの肉片とはいえ心臓は心臓、魔帝様の影響をここまで受けてしまうとは……うあー、公爵や民達にどう伝えましょう……」

「はっはっは、やっぱ魔王ちゃんウケるわー。なに、人間を迎撃しようと思ったけどミ

「すって無差別攻撃するようになったちゃったん？ 元氣出しなよ」

「いや、無差別ではないです。魔帝様は全然狙われてなかったじゃないですか」

「……あ、ホンマや」

肩を落としてずーんと落ち込む魔王に対し、魔帝はあくまで他人事な笑みを貫きながら魔王の背を叩く。しかし世界樹の様な十二力は、魔帝じふんに対しぴくりとも反応しなかったのを完全なる傍観者として見届けていた。

アレは的確に、魔王のみを拘束・攻撃してきた。「範囲外」なのか既に世界樹モドキの動きは完全に沈黙しているが、それはつまり「範囲」は魔王が設定された通りに機能している——即ち、暴走してはいない事を立証していた。

「……詳しい事情が明かせない以上、範囲対象の検証に兵士達は使えませんね。帰ったから公爵にもアレに近付いてもらって、攻撃されるか確認しましょう」

「“次回、公爵くん死す！”ってサブタイトル、今の内に付けとこっか？」

「大丈夫です。公爵は私と同様、恥を晒してでも生き延びるタイプなので」

「うーん、この感情を排した所。魔帝ポイントの加点対象ですねえ、解説の魔王ちゃん「そうですねえ、ガヤ実況だけの魔帝様。そのポイント、ゴミ箱にでもあげてください」

魔王は心底自分の失敗に落ち込んだものの、程々に切り上げて思考を切り替える。どういう訳だか産みの親たる魔王本人にまで害を及ぼそうとしたという事実。

その検証の為、無関係にも関わらず近い未来で竜公爵は実験台となる事が確定する。その不幸と不憫に、魔帝は心の中で手を合わせた。そして合わせて叩きまくった。内心で拍手喝采していた。

ブラボー、魔族に情など不要。必要ならばなんだってする、そのスタンスこそが魔族らしさなのだ。魔王ちゃんもちゃんとわかかってんじやーん。魔王本人が聞けば心底嫌がるだろう、そんな感想を魔帝は浮かべていた。

「世界樹ユグドラシルなんてカワイイ名前似合わんな……せや、魔界樹マグドラシルと名付けよう。お、我ながらいいネーミングやんけ、惚れ直すがよいぞ魔王ちゃん」

「……………とりあえず、仮称はそれにしましよつか。しかし、やはりと言うべきか……私ながらトンデモない性能に育ててしまったモノです」

「あ、そういうや魔王ちゃん怒涛のラツシユが即座に再生されてたよね。魔王ちゃんあれガチ全力で自分守護ってたやん。世界樹ってスゲーんだねー」

「世界樹があんな再生能力あるんなら、戦争で焼き払われたりしませんよ。アレは私の想定した、しかし想像以上になってしまった世界樹——いえ、魔界樹特有の生体です」

新生した世界樹へかなり適当に名前を付けた魔帝が思い出すのは、魔王の攻撃を真つ向から受け止め何度と無く消滅しながら、それを無視して再生・追撃してきた光景。

魔帝は自分の尺度を抜きにし、人間の最大戦力である勇者達からバカスカ受けた攻撃

と、今の魔王が見せた魔法ガトリングを比較する。勇者の全力攻撃ラストアタックを除けば、魔王の攻撃は勇者一行五人分に匹敵する威力・速度・精密さだった。

それすら無為とした、異常な再生力。しかしそんなモノは、元来の世界樹の性質には無い。

「かつて魔帝様は、権能を散らした上で本体じぶんを封印してもらった」と言っていました。なので、魔帝様の心臓を——体の一部を使って成長させれば、その魔帝様の権能がコピー出来ると思っただんです」

「……あ、あー！ あれ、私の『不滅』なん？」

「ちっちゃい肉片しか使わなかったので、適度なレベルまで下げてコピー出来ると踏んだんですが……再生力が想像以上というか、異常でしたね……」

今回魔王が作ろうしたのは、魔帝の劣化コピーだった。

巨大な世界樹のガワを被った、不老・不死・不滅という害悪三点セットを現世レベルに落とし込んだ代物。そこに迎撃プログラムを仕込む事で、無人の自動城塞とする。

その目論見は半分成功した。こと魔法分野に関しては世界最強クラスたる魔王の与える攻撃も、即座に再生する。近くに居る相手に対し、巨体の枝を用いた迎撃も行う。

ただ一点の失敗——魔族にも攻撃してしまうという、想定外の仕様。その一つさえ無ければ、魔王の目論見は十割成功していたのだが。たった一つの失敗が、あまりにも大

きすぎた。

「人間の侵攻は、魔界樹が突っ立ってるだけで防ぎます。完全な“不滅”では無いので、根本から焼き切られれば終わりでしょうが……その根本は、^{コア}地中深くに埋めたあのガラズ珠です」

「ははーん。枝とか葉っぱで上空から攻撃してくるけど、実は地下に本体ありましたーってか」

「魔帝様がさつき言った『樹を斬り落とさないと次元が壊れない』、そのダウンスケール版になりますね。根っこを断たない限り、あの樹は文字通り不滅です」

「魔王ちゃんにすら攻撃しちゃうのにな？」

「……しちゃうのに、です……」

再び魔王は瘴気の如きネガティブな黒いオーラに包まれ、頭を下げて落ち込む。

不滅の要塞、子供が考えた様な理想の防衛装置。しかしそれは肝心の創造主にすら牙を剥いてしまった。植物であるが故に言葉は届かず、説得の余地も無く、理由を聞き出す事も出来ない。

魔帝の良い所だけを抽出しようとしたが、味方にまで被害が及ぶ悪い所も遺伝した。血は争えないとは言いが、血のみであつても魔帝は争ってきた。そんな事ある？ とう気持ちで魔王はいっぱいいっぱいだつた。

「……一応コアの所在がハッキリしている以上、地中を掘り進んでコアを砕けばあの魔界樹はこちらから緊急停止させられます。完全に手に負えないと判断したら壊しますよ」

『弱点なんて持つてるからザコはザコなんだよ、弱点なんか全部克服しろ』。それが私のモットーやったけど、弱点があるおかげで暴走を止められる。成程、弱者らしい良い発想よの」

「貶すのか褒めるのかどっちかにしてくれません？ 出来れば貶す物言いだけを無くしてくれません？ 私今結構落ち込んでるんですよ？」

「メンゴメンゴ、強くてゴメンねえ」

「あ、ああ弱くてゴメンなさいねえ！」

魔帝の言葉がトドメとなり、ついに魔王は両手両膝を地面に付けて落ち込んだ。

王の威厳など必要無い。そんな物、魔族を守る為ならドブに捨ててしまえ。遙か前からそんな覚悟をしてはいたのだが、こうも自分の失敗と弱さをド直球に言われるのは普通に辛かった。

しかし魔帝はそんな魔王の無様な姿も、『リアクション豊かで楽しいなー』と思うだけで、いつも通り純粋に、悪意なく、混じり気無しに笑い飛ばしていた。言葉の反面、貶す気持ちがあく無いので余計タチが悪かった。

「あ、完全な不滅じゃないんやろ？ 魔王ちゃんの攻撃も再生はされたけど、我みたいに
“無かった事”に出来ないし。勇者ちゃんがめっちゃデカイ剣作るヤツ撃つたら突破
出来るんじゃない？」

「“巨神剣”ですか。ええ、アレを受ければ流石の魔界樹でもへし折られて、再生に時間
がかかってしまうでしょうが……その心配は無用です」

「お、断言するやん。その心は？」

「勇者のあの技は一発撃つたら終わりなんですよ」

“巨神剣”。魔帝に対し勇者が最後に放った、魔族の大群すら一撃で吹き飛ばす光の
奔流。魔帝以外の全てを必滅する——魔王が全力で防御しても受け切れない、そんな理
不尽な大技。

しかしその驚異に比例した欠点も、既に魔王は把握済みだった。

「あの技の最大のデメリットとして、アレを撃つと神剣は二刀とも丸三日は力を失いま
す。つまりアレは連射出来ず、撃つた後の勇者は“無敵”から“人間最高峰”に成り下
がります」

「メインウエポン無しでも最高峰なん？ コワ〜……」

「おかげさまで暗殺が失敗しまくりました。マジでシンプルに強いんですアイツ」

放った後の神剣の無力化ラグタイム。三日に一回、単純計算にして魔帝の二倍は出動して魔族の

大群を雑に葬れる驚きのコストパフォーマンスではあるが、一応はそれが技の欠点だった。

勇者側からすれば、想定外の驚異に直面した時に最強の技が撃てないという事態は避けた。味方を巻き込む状況でさえ無ければ、どんな状況でもひっくり返せる魔王泣かせの切り札。

それ故に、勇者は撃つ前後を想定している。

「勇者はアレを温存して城を目指してきます。しかし魔界樹と対面し、攻撃を受けてもすぐに再生する姿を見れば、技を撃つべきかどうか悩むでしょう。なんせこっちは、その大技を喰らって尚ピンピンしてる理不尽な化物が後ろに控えていますからね」

「えー、そんな超偉大でカワイイカワイイ魔王ちゃんからの尊敬と信頼を一身に受けられるスゴい奴がいるのー!? だれのことー、ねーねー魔王ちゃん!」

「はいはい魔帝様の事ですよー。あーはいはい信頼してますよーだ」

「ざつつうー。……でも。そんな魔王ちゃんが、我は好きだよ……うー」

「はいはい」

「ざつつうー」

勇者の一撃は、魔王を倒す為にある。しかしその一撃を撃つべき対象が二つあれば、勇者は必ず躊躇してしまう。それを撃つて尚、無傷だった魔帝を事前に見せつけられた

が故に。

更に勇者は自分の大技を撃つた後、警戒を最大に高める。神劍がただの劍に成り下がれば、自分が負ける——殺される可能性が少しでも大きくなるからだ。

故に“巨神劍”を撃てば、勇者は慎重に——悪く言えば引け腰となる。勝てる相手が遠くに見えても無理に突っ込まない、魔族を攻めるよりも人間軍を守る事を優先し、前線に出過ぎない。

人間側が勝っている状況で、その選択は戦略的に正しく堅実だ。しかし、その堅実による遅延こそが例によって魔王の望む所だ。

「という事で、勇者は神劍を撃てません。魔帝様の囹プラス私の空爆が印象に残ってる以上、魔界樹に無理せず突っ込む事はそう無いでしょう」

「突っ込まれたら?」

「城に残ってる竜公爵と私が出陣し、日に余裕があれば魔帝様を投げつけ、全力で樹海突破の邪魔をします。私達の最大のホームな以上、嫌がらせならいくらでも出来ますよ」

『『絶対に勝てる』とかちゃんと行ってもいいと思うんやけど、王的に」

「^{わたし}魔王的に言えるのは『絶対に負けたくない』だけです」

そう言い終えて魔王は、魔族にまで攻撃してきた魔界樹の取り扱い、及びいきなり生えてきた凶悪な世界樹モドキを民達にどう説明するかをぶつぶつと呟き考え込み始め

た。

魔王は『勝つ』と断言する事は全くしない。後ろ向きに、悲観的に、絶望的なまでに。不利を自分自身へ言い聞かせる様に、『負け』ばかりを声に出している。

全部ぶつ壊して勝つてスッキリしたい魔王としては、そんな子孫の姿を見るのは結構もやもやしてしまう。しかしどうやっても、現代魔族と自分の視線の高さが合わないのでも何も言えない。少し考えた後、圧倒的強者たる魔王はやっぱり思考を完全に放棄した。

「——よし。ともかく、公爵への報告と民達へのお触れが最優先ですね。魔界樹の範囲外ギリギリを迂回し、全速力で飛んで戻ります。行きますよ魔王様」

「うおー魔王ちゃんに抱きつくチャンスだ！ 我をおんぶしろー！」

「風が呼んでますよ、魔王様」

魔王が魔王に飛びかかる。魔王が一瞬で風のボールで魔王を閉じ込める。そのまま魔王は右手で魔王を風ごと掴む様にしてから、地上から飛び上がった。

このやり取り、実に三秒。樹海を囲む切り立った断崖の上空より、魔王達は城へ向けて円状のコースを取って空の旅を始めた。

「すんすん、魔王ちゃんが冷たい……世界の温度をマイナス方向に反転加速させて、一瞬で氷河期を呼ぶ我的魔法ぐらい冷てえよお……」

「冷酷にも程がありませんか私の態度。どんな偏見と見積もりを挟んでもそこまではならぬでしょう。アイス食べたければ、その風の結界の中にミニ吹雪出しますよ」

「別に私は温度ダメージは受けんけど……そんな事してみな、我がうっかり今の悲嘆をこの世界へ反映させかねないぜ……？ 今言った魔法で」

「すみませんでした勘弁してくださいやめてください皆死んでしまいます」

魔王は器用にも、全速力で飛行しながら空中で土下座する。露骨なジョークを口にしながら、魔帝がぞつとする様な冷たいプレッシャーを放ったからだ。

青ざめる魔王の姿を見て、魔帝は雰囲気をすぐに平時の物に戻す。その後、はっはっはっというも通りのからつとした笑いを向けた。

全くシヤレにならない。言葉の通じない魔界樹に、言葉が通じても根本的には制止出来ない魔帝。結局、ほんの気変わり一つで世界の破滅に繋がる魔帝の方が圧倒的に恐ろしかった。

九割九分九厘、魔帝の言葉はジョークでしかない。しかしその言葉の裏には、無視出来ない一厘の狂気がある。割とぞんざいな対応を取るようになった魔王も、その一厘には忘れず最大限の恐怖と警戒を抱いていた。

「ジョークジョーク、魔帝ジョークよ。全く魔王ちゃん、我が本気でそんな事すると思っ
ん？」

「魔帝様、本気でやらないと思ってます？ 誓って言えますか？」

「全然思っていないけど。試しに三分であの樹を平らにしてみせよっか？ 樹海ごと」

「あ、あ、あ、あ、あ！」

「はっはっは」

その気になっちゃったらいつでもお前らを滅亡出来ちゃうぞ。逃れ得ぬ絶対の宣言に対し、ついに蓄積されたストレスゲージが限界を超えた魔王が発狂の大声を上げた。

魔帝はあくまでけられけられ笑い転がる。今現在魔王の風に自由を囚われ、魔王のどんな命令にも従う立場ながら、魔帝はどこまでも破滅的な自由を謳歌していた。

前門の勇者と人間軍、後門の魔族と魔帝。懸念事項のサンドイッチに押し潰されそうな魔王は、間違いなくこの現代最大の心労を背負う立場にあったが。

「……もうやだあ……お父様なんで逝っちゃったんですかあ……私が使える手札が少なすぎるんですよお……」

「あー魔王ちゃんマジ泣きし始めちゃった。でも実の父親をカード代わりに思うのはちよつと良くないと思うよー」

「現実というテールブルが厳しすぎるんですよおお……」

両手で顔を覆い本当に半泣きになりながらも、魔王は風の制御を一切乱さず規定の飛行コースを全速で飛び続ける。魔王は残念なことに、泣きたくなくなるぐらいのストレスを

完全に切り離して行動や仕事を正しくこなせてしまう精神力の持ち主だった。

夢や幻として現実逃避出来れば、魔王はきつと幸せな最期を迎えられただろう。しかし現実と向き合った結果、こうして泣きながら心労と奔走する羽目となっている。その事実を、魔王自身がよく理解していた。

もうやだ。ほんとにやだ。心の底から魔王は、自分の立場を誰かに譲って隠居したい気持ちでいっぱいだった。

「お、もう城が見えてきとるで。ほらほら、魔王ちゃんが城離れてるのを人目に見られるんは良くないんやろ。早めに高度下げるべきなんじゃないん？」

「……もう速度と高度はゆっくり下げ始めてますよ……崖近くをゆっくり下って樹海に降りて、そこからさらに人目のつかないルートで城下町に戻るんで、面倒ですがお付き合ってください……」

「うーん泣きながらも全く揺るがぬ行動プラン。魔帝ポイントもつと進呈したいね」
「そのポイント、胃薬と交換して下さい……」

「それは無理やなー、誰かを治す願いは我の力を超えとるわー」
「薬一つすら買えないポイントなんていりません……」

絶望に顔を歪める魔王。その絶望の半分を占める魔帝。

さめざめと泣き続ける者、何一つ寄り添えない者。いつも通り対照的な二人は、城よ

り離れた崖から樹海の端へ降りていき、木々の隙間に姿を消す。

千年樹海に残されたのは、頭痛の種からすすく育ち聳え立った禍々しい大木だけだつた。

失敗が成功の基とは限らない

〔王族より緊急示達・及びそれに伴う謝罪について〕

この度、千年樹海を中心に起こった大規模地震・及び世界樹の唐突な出現に關しまして、現王族を代表して報告します。

私は先日、民の皆様へ告知もせず、独断で世界樹の種子を用いて世界樹を発芽・強制的に成長させました。その不始末で皆様の暮らしに支障と無用な混乱を招いた事を認め、ここに謝罪します。

竜人師団長と伴に人間軍・及び勇者の進軍が樹海に至った事を確認した私は、当代魔王が事実上不在の今、早急な侵攻対策が必要と判断しました。

愚考の結果、以前より考えていた『世界樹の防衛装置化計画』を、王族の資産を用いて敢行し、結果この度の地震と繋がりました。大変な迷惑をおかけし、改めて深くお詫び申し上げます。

また、変異した世界樹——便宜上、これより『魔界樹』と称します——の防衛機構である自動迎撃システムは機能しておりますが、規定範囲内の人間のみを攻撃する設計の筈が、魔族にも攻撃する不具合が生じております。

現在原因を調査中であり、樹海内に設置した結界ラインを大きく越えた場合は魔界樹の攻撃対象となる事象を私・及び竜人師団長が確認しております。

日頃から軍を挙げて「人間軍の侵攻阻止」に取り組む中、喫緊の情勢とはいえ軽率な行動をしてしまいました。王族という立場にありながら、城下町の皆様へご迷惑をおかけした事には、責任を鑑みると痛恨の思いでございます。

こと人間達への迎撃能力に関して言えば、私の魔法攻撃を以てしても突破が困難である事から、対勇者にも十分に能力を発揮するものと判断しております。

以降の城下町よりの移転・出征に関しては、再び配布する『地下大洞穴道への案内・及び竜人師団による飛空移動』を参照していただきたく思います。

今後はこのような事が起こらないよう、王族・軍間における報告・相談を徹底し、再発防止に努めたいと存じます。誠に申し訳ございませんでした。

——魔王軍大將代行・王女より



「——うーん。マオちゃん、文章までマジでおカタイねえ。もつとカジユアルに行こうぜー?」

「……うっさいです……私は王として、民達に誠意を見せ続けねばならんです……」

「大丈夫かなあこの王。もうちよつと気持ち良く、ストレス発散として反乱の芽と無差

別にぶつ潰して見せしめに市中引き回しとかしてもええんちゃうん？ マオちゃん、ちよつとひと処刑殺ろうぜー！」

「私は暴君を指すつもりはないんです……そんな器でもないですし……」

魔界樹の出現とそれによる大地震。それから二日が経過した今、魔界ハイムの一室では憔悴しきつて机にへばりつくマオと、そのマオの頬を指でつつくマテイウスの姿があった。

事件当日、城下町へと戻る最中『じゃ、我眠くなってきたし寝るわー』と、風の結界の中で昼寝を始めた魔帝を絶句しながら家に送り届けた魔王は、直後に城へ直行。

『なんなのだあの樹は、どうしたというのか』

『魔王様か王女様が何かしたのか。どうか王女様でしょ絶対』

『詳しく説明して下さい王女様、絶対王女様なら把握してるでしょ』

『非常時に王女様が真っ先に出て来ないって時点でもう確定では』

隠密魔法を纏った魔王は、既に困惑と混乱にざわめく住民の反応と、説明を求めて城に殺到する魔族達を見やりながら無視して猛ダツシュで城に潜入。執務室の窓辺にて、遙かなる宇宙を眺める様に思考を停止させていた竜公爵をチョップで再起動させる。

竜公爵に『あれは私と魔帝様の仕業です、詳しくは後でお触書に起こしながら説明します』と端的に説明した後、魔王は正礼装に慌てて着替え、城の正門上へと移動。

『お待たせしました王女です！ すみません私の仕業です！ 明日に公的に今回の事についてお触れを出すので、それまで待つてください！ 人間達がなんかやったとかそんな事無いんで安心して下さい！ あと私のせいって最初から断定してたヤツ、一部顔を覚えましたがねッ！』

城へ殺到する魔族と、声を魔法で拡声する事で城下町全体に対し、そう魔王は弁明を届けた。

『やっぱかー』『まあ王女様だしな』『次マオちゃんに会う時こええんだけど』と、結構素直に引き下がっていく城前の兵士・住民達の姿を、魔王は滝の様な冷や汗を見えない背中にのみ流して見届けた。あと一部怖がっていた顔を追加で覚えた。

その後、執務室に戻った魔王は優れた分割思考マルチタスクを駆使して公文書を書きつつ、竜公爵へ今回の事態の詳細を説明。『という事で、魔界樹に近付いて攻撃される範囲を確認して下さい』と命令された竜公爵は、敬愛する魔王に対して心底嫌そうな表情を向けてしまった。

そしてお触書と別途必要文書の執筆と発行を終えた所で、命からがら竜公爵が帰還。そこへ魔王は『よし、じゃあ安全ライン作るんで戻りますよ』と、竜公爵を使い樹海へとんぼ返り。濃霧で視界不良の樹海の中、ギリギリまで攻撃範囲を正確に把握しつつ魔王は結界を敷いた。

その最中に魔界樹からの迎撃を命じられた竜公爵は、三回ぐらい死にそうになった。

「……はあー……まあ、思ったより町の混乱が大きくなって良かったです、いやホント……」

「一晩でガチ謝罪なお触書と危険表示結界ライオンを早急に出す有能スピーディー対応されちゃ、そりゃ誰も文句言えんやろ。ナイスリカバリング、これにはマティウスおじさんもニッコリよ」

「……その間、共犯のマティウスさんはずっとこの部屋でぐっすり寝てましたけどね……」

「我は巻き込まれただけです。我は悪くありません。全てマオちゃんが考えた事です」
「……………何一つとして、自己弁護の余地がありません」

はあ。食卓にめり込む様に額を押し付けるマオから、生きる活力と色が抜け落ちていく。

ここ二日の検証の結論として、魔界樹の自動攻撃機構はどんな魔族に対しても反応する事が判明した。これで人間でなく魔族にしか攻撃しない仕様でしたー、などという事になれば最早王朝崩落待ったナシだが、こればかりは実際に勇者・人間軍の到着を待つしか無い。

そして妙な仕様として、樹海内の動植物には反応しない事が分かった。

「……魔界樹、魔族に対してだけ明確に攻撃するんですよ……樹海内の魔獣達を派遣
しましたけど、素通り出来ましたし……」

『誰がこんな風に生んでくれと頼んだ、復讐する』とかそういう知能を持つちやつたん
じゃね?」

「竜公爵に迎撃させながら意思疎通を試みましたが、アレに思考は無い事が判明しまし
た。迎撃範囲もおよそ私の設定から外れていない辺り、“魔族への攻撃”以外の想定外
は一切ありません」

「はっはっは、想定外がデカすぎんやろー」
「ホントにそうですわねもおっ! 私は何をやらかしてんですかねえっ!」

机が壊れない程度に自制した力で、マオが両手のアームハンマーで机を叩く。お触書
では“痛恨の思い”と書いていたが、実際に抱く思いは文章では抑えきれない程の痛
恨っぷりだった。

魔族に匹敵する魔力を持った魔獣や、意志を持つ植物。それらに対し、魔界樹は攻撃
しない。そもそも反応するようならば、樹海の入口周辺は発芽の時点で大惨事となつて
いた。

しかし、魔族に対しては魔力の大小を問わずに反応する。試しにこっそり、投獄中の
現魔王軍に反抗する過激派（うらやみもの）を魔界樹に放り込むと、力量を問わず即座に反応したのだ。

魔王や竜公爵の様なわかりやすい高位魔族以外にも反応する。しかし魔族に匹敵する力を持つ魔獣達と、今回の事件の元凶にして根源である魔帝には反応しない。この理由だけは、現状どうしても解明出来ずにいた。

「——あれ。あの樹、我と動植物のことを同レベルに扱ってる？ ようし、そんな無礼な態度取るんだったら、パパちよつと本気出しちゃうぞー！」

「やめろおーっ！ やめてくださいいい！ もうこれ以上問題を増やさないでええ！」

「……………おう……………ゴメンなマオちゃん……………」

あからさまなマテイウスの軽口に対し、マオは閃光の如き速度で体を起こし、鬼気迫りながら悲壮感溢れるという二律背反を表情と悲鳴で表した。そんな事はしないと前に一応言っただろうに、それでも今のマオは本気に受け取ってしまった。

明らかにいつもの冷静さが欠けている。魔帝というイレギュラーをほぼ身内として抱え、世界滅亡のスイツチの上を反復横跳びするかの如き軽口すら叩く、それ程の精神力を持った筈のマオの心が崩壊しかけている。

ここまで限界化しているマオの姿に、マテイウスは強い既視感を感じた。あ、これ私の封印を解いた直後の、初対面でどうしようもなく頭抱えてた時と同じヤツや。

「まあ、なんだ、その……………あ、せや！ 魔界樹みたいなヤツ、各地に投下しようや！ 世

界樹じゃなくても、別の植物を私の血肉で育てて人間達の領地にバラ撒けば、そいつら殲滅した後にコア破壊して一件落着やろ！」

頭上に電球を輝かせる様なひらめき。マティウスは我ながら大絶賛モノのアイデアを思い付いたとばかりに、マオへ新たな軍備を提案した。

魔界樹の量産、魔帝の劣化コピーのさらにコピー。現状何故か魔族へも攻撃する固定要塞となっているが、これを人間達の拠点や基地にバラ撒けば、大体の軍は壊滅・撤退するだろう。

核という弱点はあるが、転じてそれはいつでも魔王の意志で破壊可能という長所でもある。タネが割れるまでは——植物だけに——、多くの拠点・戦線を押し返せるだろう。

「…………それは、不可能でした…………」

「へ？　でした？」

しかし、マオは悲痛に満ちた顔でそれを却下した。それも過去形で。

「魔界樹を発芽させる時に使った肉片ですが、私の掌にこびりついた分も私はこっそり別の容器に保存していました。あの時はまだ、触媒として使えそうだと思ってたので」

「えっ、いつ、どのタイミングで？　全然気付かんかった」

「魔界樹の核を地に投げ、歩き始めたから辺りですね。どうせだし勿体無いので、詰めて持って帰ろっかなって」

「そんな残り物をタッパ―に詰め込む感覚で扱われてたの、我の血肉」

魔戒樹に用いた魔帝の心臓の破片、そこに残された僅かな残滓。欠片の欠片とでも言うべき掌に付着した血肉を、あの日の魔王は保存した上で帰還していた。

魔王の勿体無い精神が表出しただけの事だが、それは英断だったと言えるだろう。魔界樹の発芽・及び半暴走に至る程に、魔帝の心臓は規格外の力を持つていた。故に、それをさらに薄めて小さくした血肉ならば、今度は制御出来るのではないか。

——過信だった。

「マテイウスさんの言う通り、私は魔界樹のさらなるダウンサイジングを図りました。まあ人間達の領土に投げ入れるとか戦略的な事は考えず、純粹に失敗の原因を探る為です」

「それで、『不可能』って?」

「……魔帝様の魔力に耐え得るモノがありませんでした」

僅かな血雫に宿る魔力。魔王の知る中・持ち得る物で、それを受け止める器が無かつたのだ。

どうやら魔力の大きさより、性質の問題らしい。限りなく水で薄めた血を使い、同様の手順で別の魔法植物を発芽させてみた所、一瞬でドス黒く染まった後に朽ち果て、塵と化した。

世界樹が耐久・容量に優れた特別な品種であつたが為に、変異はあの程度で済んでいった。

世界樹は世界で唯一、魔帝の魔力を受けて無事で済む代物。それが、魔王の研究結果だった。

「我々の持つ唯一の世界樹がアレになつちやつた以上、“魔帝様の力を栽培してこき使おう計画”はここで頓挫です。植物ではなく、魔獣や他の魔族にマテイウスさんの血を与える事も……ホントに、ホントツツトに一瞬だけ思いましたが……想定されるリスクがデカすぎるのでやめます」

「だが忘れるな……我がぐつすり眠りこけていようと、第二第三の我が必ず現れる事だろう……」

「マテイウスさんが二人になったら、もう私は全力で公爵に全てを投げますよ」

「やだー我はマオちゃんと一緒にがいいー」

「私がッ！ イヤなんですッ!!」

懐くマテイウス、拒むマオ。邪念一闪、全身全霊の拒絶だった。

植物であれば思考の代わりに外付けの指向性プログラムを与える事で、魔帝の力を魔王の思い通りに出来る。しかし動物・魔族が魔帝の力を得ると仮定したなら、どうなるだろう。

仮に不完全権能を継承出来たとして、生まれるのは劣化とはいえ不老不死不滅の化物

だ。そんな存在が己の力に溺れないなどと誰が断言出来るだろうか。

最悪、血を継いだ対象に魔帝の性格まで複製されたり、魂が乗っ取られる可能性がある。そうなったらもう、魔王は死ぬ。胃痛と頭痛と責任感で自害を選んでしまうだろう。

「あああ……世界樹の要塞化、思いついた時は『私ながらナイスアイデア』って思ったのに……どうしてこんな事に……私達の世界は……」

「あーアカン、心が折れかけとる。……は一発、我がそのハートに激励を——」

「ふんすー」

なんとなくマオは自分の座る椅子を左足で弾き、右足で横にいる魔帝を蹴り穿つ。

なんとなく、本当になんとかの事でマティウスの顔にマオの横蹴りが埋め込まれる。極めて直観的に放ったその脚の先には、両手を鉤状に構えてわきわきとしているマティウスの姿があった。

マオはこの時、世界で初めてマティウスの悪意無きセクハラを阻止する事に成功したのだった。

「ふー、やれやれ。ちよつとしたじやれあいだつてのに、マオちゃんは手厳しいぜー。あ、足厳しいか。そんな言葉現代にある？」

「ねーですよそんなモン。さっさと離れて下さい、私の体幹が片足立ちに耐えてる間に」

「ほいほい。くそー、マオちゃん的好感度稼げねえー」

「人の好意を『稼ぐ』なんて言ってる内は常時ゼロですよ」

顔面に突き刺さったマオの脚を完全に無視する様に、マティウスはすごすごと引き下がる。風穴が開いている筈の顔には、ただ残念そうな表情が浮かんでいた。

マオは最早すっかり最近お馴染みの友と化した溜息を肺から解き放つ。魔帝の復活、勇者の一時的な撤退、魔界樹による防衛線の構築。ここの所心労ラツシユが止まらないが、全体で見れば圧倒的に魔族にはプラスな事が続いている。

とはいえ、絶望的だったマイナスがようやくゼロに近付こうとしているだけで、未だに戦争の情勢は全く変化していない。これからも魔王は、どうしようもなかった状況をどうしようも無く頑張っただけに過ぎない。

どうすりやええねんこんなん。何度と無く浮かんだ考えの中、魔王は既に新しい対策を考え始めていた。未だ次にどうすればいいのかわからず、こうして魔帝の休日に家へ戻った今も常に頭をぶん回していた。

「まあまあ、ともかくコレで人間達は止められるんやろ？ これからはしばらくはゆっくり出来るって。大丈夫？ サ店行く？」

「行きませんよ行けるワケないでしょ。まだまだ考えるべき事も、後処理もあるんですから。とんでもない大失敗をかました以上、少しでも何か得られる物を見出さなきゃい

けません」

ド直球かつ軽率にデートに誘おうとするマティウスをにべも無くマオは追っ払う。

実際、マオは最優先でやるべき事を終えて一時休日を挟んでいるだけで、魔界樹の性質や実態について完全な検証と把握を終えた訳では無い。懸念事項が天地に聳え立つて見える状態で呑気に散歩が出来る程、マオの精神と心臓は頑丈ではなかった。

というか、先日の町案内の時の様に余計なトラブルをランダム発生させては休みどころではなくなる。今日はただ、竜公爵に民達のクレーム対応——不平不満というよりは、詳しい説明を求める方が多い——を肩代わりしてもらい、その間にマオが善後策を考えるだけに済ませたい。

部下へ負担を押し付けて得た休日でありながらも、施策を練らなければならない。そこに疑念を抱けない所に、マオの置かれた境遇がいかにか切羽詰まったものが垣間見えた。

「ふえー、つまんねーのー。マオちゃんが遊んでくれないなら、我どーすりやええんよー」

「お金あげますから好きな所行ってください」

「我が好きな場所は、マオちゃんのいる所だよ……」

「私の事は忘れて新しい出会いを求めて下さい」

どさり。マオはマティウスへ、一週間は余裕で遊び尽くせる程度に膨らんだ金貨袋を渡す。どんな大金よりも貴女の方が良い、そんな愛情を込めた微笑みゆえつをマティウスは向けたが、マオはまるで対極の様に冷え切った鉄仮面をお返しした。

それきり、マオは自分のとっ散らかった思考をまとめる独り言をぶつぶつと呟きながら、自分の思索の深淵へと沈む。完全に見放された、そう感じたマティウスは素直に机の上の金貨袋を受け取る事にした。

マオを弄り倒すのは楽しく、最も期待値の高い遊びだ。だが、精神すりきりいっぱい限界ギリギリの今ちよっかいをかけるのは、ガチで嫌われそうでもよろしくないと感じた。

マティウスにとってマオは、古代を含めてもトップクラスのお気に入りだ。これからも楽しい遊び相手としての関係を保つに辺り、嫌悪と憎悪を分かち一線は超えてはならない。そう思つての事だった。

言い換えれば、別の日には今日の分も含めて一杯遊んでもらおうと思つていた。そこそこマオの精神が保つギリギリまで。

「しゃーねーな。マオちゃん、我大図書館にでも行つてくつわ。夕方には戻ってくるから、ご飯用意しててな」

「出掛ける時は魔族を気をつけて下さいね」

「……ん？ 魔族を？」

「ばったり市民と喧嘩を起こして、うっかり町を滅ぼさないで欲しい、って事です」

「あれ、これ私の心配じゃなくて他人の心配じゃね？」

「当たり前でしょう、私は民の暮らしを護るべき魔王なんですから」

「護るべき対象からナチュラルに外された……かなしい……」

送り出す相手ではなく、送り出された先の誰かを思いやる。

塩対応にも程があるマオの見送りを受け、マティウスは好感度を上げなければならぬのではないかという焦りを、ほんのちよこつと僅かながら少しだけ覚えた。

そして家を出て十歩ぐらいで忘れた。



「んー、お日様さんさん。こんなにも広い青空の下、何も破壊しないで歩くなんて……なんて、難しいんや……」

城下町の大通りを、マティウスはだらだらと歩いていく。人間軍の脅威が届かぬ穏やかな町中で、マティウスの足取りは誰よりもすつとろかった。

一步一步は亀の様に遅く、時折足を止めては左右にうろつき周りを見渡す。町に最近やってきたお上りさんと考えても、あまりにも目的が感じられない遅々とした歩み。ぶつちやけ、不審者にしか見えなかった。

魔帝にとって“目的地に向かってただ歩く”という行為は、遙か昔に忘れかけていた概念に近かった。日単位で寝て少しだけ起きる時間感覚、敵や目的地に対して真つ先に瞬間移動を考える常識、移動するならついでとばかりに広範囲を破壊しながら突撃をします悪癖。

破壊的な事ばかりやってきたせいで、マティウスの生活習慣は破滅的なまでに常人からズレていた。

「やべー、蹂躪突撃や瞬間移動の無い移動ってこんな難しかったんか……地に足付けた生活ってすげえんやな……我、なんか現代魔族達が偉大に思えてきたわ……」

マティウスは足を使って一歩一歩進むという行為の、あまりの難しさと面倒さにもはや感嘆すらしていた。

何秒かけても目的地に着かない。移動しても地が割れ空が裂けない。何百を超える致死の隙があつても攻撃されない。こんな事を、現代の魔族や人間は受け入れて生きているのか。

思うように動けない事に対しての苛立ちは無。マティウスにとつてのストレスとは、神魔戦争における神々の遅延行為や神皇からの煽りの数々ぐらいであり、それに比べれば自由気ままに歩くという自由が保証されている今など、夢にも等しい爽快感だった。

まあ、ちよつとずつ慣れてきやええか。一般生活という初挑戦の事象に、魔帝はどこまでものんびりと——それこそ、普通の目線からは緩慢すぎて逆に不審なレベルで構えていた。

「……お？ また会つたな、ニーサン」

「ん？ あ、大鬼くんやん」

「そういうニーサンは、マティウスくんだけ」

「せやで。我はマティウスやで。マオちゃんにさんざ怒られて蹴つ飛ばされて追い出された、悲しい悲しいマティウスくんやで」

「……何しでかしたら、あのマオちゃんにそんなに怒られるんだ……？」

そうしてマティウスがただらだとほつつき歩いていると、通りの向かい側より先日マオとの町案内で出会つた大鬼がやってきた。

その背に自分の得物だろう大斧は無い。どうやら今日は大鬼も完全なオブラしい、そう思っていると心底不憫かつ不思議な視線が向けられている事に気付いた。

「マオちゃん、この町が荒れてた頃はそりやもう嵐みたいに暴れ——つて言う俺も蹴られんな。ともかく、昔はよく民度低い連中を片っ端から成敗してたけど、最近は滅多に足を上げる事は無かつたんだよ」

「手を上げる」じゃない辺り、マオちゃんイコール足技キックつてのは常識なんやな「コ」

「『王女の足音が聞こえてくる』、当時ボコられた魔族が震えて言った言葉が有名なぐらいにな」

マテイウスは大鬼を見上げながらも、大図書館方面へ鈍く進む足を止めない。大鬼も歩幅を合わせてくる。どうやら、オフでありながらマテイウスに付き合ってくれるらしい。

一度顔を合わせただけの身にも関わらず、随分興味を持ってくれているようだ。現世ではマオ・竜公爵としか知り合いのいない現状、フレンドリーに接してくれる相手は大事だ。

これで遊ぼう。マテイウスは、やはり破滅的な発想で以てこの大鬼と絡む事にした。「カワイイもんだよねーマオちゃん。ちよつとからかっただけで、すげえオーバーなりアクシオンするもん。はっはっは、前のデートでは痛い目見たわ」

「……あんた、公開処刑喰らったって聞いたんだけど？ 土手っ腹ブチ抜かれながら殺意ビンビンに警告されたって聞いたんだけど」

「『処刑』ならこの先も生かす必要無いやん。ちよつとしたじゃれあいのボディープロー一発なら、ダチ同士でもやるもんやろ？」

「背中までぶち抜かれて警告されといて、ちよつとした」で済ませていいのか……？」

「（こ）まで五回ぐらいはしてるコミュニケーションやで。面白えーわーマオちゃん」

「マジで死ぬ気がアンタ？　こんな命知らず知らねえぞ俺」

はっはっは。王族直々に下された殺傷一步手前の私刑を、何度と無く受けておきながらあっけらかんと笑い飛ばしてネタとしている。

その声色に虚偽は全く感じられない。大鬼は、マテイウスに対する第二印象を”とんでもねえ大型変人”と受け取り、一抹の興味とそれを遥かに凌駕する異常さを感じた。感じてしまった。

今この時を以て、現世におけるマテイウスの三人目の犠しりあ牲者が生まれた。